あり是と針口とこづるこのゝ針とあく
し急に手あくれば針口へう血出る
とれと栄衛とゆるこのゝ若血出ハ何
度も穴とこゝろよんそこを
人ゆハふくは痩る人ゆあるく
さし大人ゆハそこに針小兒ゆハ
そこに球ゆらるべし始て針とあ
人ハ先ゝ外腿ゆ刺しく針のとう
ゆとゝ試て他人ゆ
金針ハ
針ハ殊ゆ久しく用ゆれば
の内ゆて折るゝのあり

打針の手法

打針ハふくく刺とゆれ一身栄衛

とゝろて主とゝるゝこゝあり鍼經ゆ云く
浮氣の經ゆ隨ひ運る者と衛氣と
いゆ其精氣の經ゆ行るゝこのてゆゝ
者と栄といゆ氣ハ血道の外とゝ
かゝくゆゝるゝ血ハ筋の底と流ゝ
者ゆり氣ハ陽衛ゆり血ハ陰栄ゆり
氣ハ外とゝ
肌肉とゝ

打鍼之圖

血ハ筋の内とゆれて肌膚と潤かん
これを依て打針ハ[illegible]槌をもて
うつゆへ栄衛とゝどこ骨髓へ徹ゆる
理り手法ハ病人をさらしうつ左の足
とらき右の膝くゝて槌ハ右の方ふ置
るこ[illegible]槌の置所と定めざれハ忘る
りの也さて針と口に含こ左の手ハて
病人の腹とうゝひ左の中指と食指
のしたふ重て穴まとき針と左の中
指と食指の間にさ[illegible]ゝ針先乃
肌ふさらねにして槌とうり針と
打ゆり皮と切ゆ痛まざるやうふ打
ゆり針入と一分ゆ[illegible]して槌ゆ手
應あり二三分ゆり深く入ゆ[illegible]ど

打て氣血とうどこ推こ内ふ徹し
の移りて補瀉迎隨とちとるふ針法
按く後針口ヲ閉べし推手ハ[illegible]く槌と
うゝく打べし推手ハ[illegible]く槌にゆ
あれど痛ひゆり槌の打やうハ乳ふあく
一二とかぞゆる如く手づまゝ[illegible]く打ぜ
打針の本意ハ腹ごゝりふ用のそ外
の經ゆ用のず諸病ハこふ五藏ゆう
生ゝるにゆう其本とゝ[illegible]くあて治を或
目筋爪と病とゝさハ肝の腑ゆ針と刺
真皮氣と煩ふ[illegible]ハ肺の腑ゆ刺ど
餘ハこかとれゆてゆうべし

管針の手法

管針ハ學びやとくして痛ん手法ハ

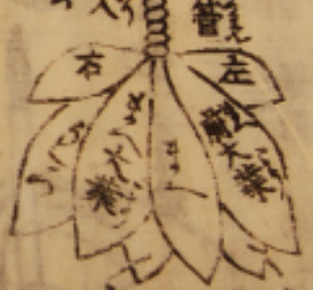
左の手にて管と穴の上にあて針と管を
持て右の食指と中指の後に重て
食指のうらにて針の軸とはらを下
をべしうごかして彈けば痛ひ一藏
をべしうごかして彈けば痛ひ一藏
をとり中指と食指にて中
指を下にして管は大指と食指にて中
下して管と長さ右の食指大指にて
撚下して下にして撚るなり扨大
方の病には鍼經に云く針大にして
刺入りにくく邪氣をとり病いよく盛
あり管の寸法は長さ二寸五分針軸一寸
穂一寸八分總長二寸八分太抵なり
太きなるは穴の中をとり
針口ひろく小兒の針は細くして軸

管鍼之圖

五分穂一寸二分管一寸五分
手法は人に同
五臟六腑の圖說
腧の藏は重さ三分春の第三の
附その穴は葉の蓮花の數
三葉は前に垂三葉は後に垂
左右に垂葉は小葉一
の兩耳のごとし一葉は
穴あり二十四穴あり

そこの八孔へ出て節を産
を吸ひ八孔へ入て肺管
を諸藏の清濁陰陽の氣此に從て
周身に分布して五藏の華蓋に為相傳
の管をもつて冷節と出て諸藏の氣
めぐらす

肺藏之圖



大腸の府八重さ二斤十二兩長二丈二尺
のろさ四寸徑一寸腑の下一寸水穀の
道を當て右へ回り疊て積て十
六曲五穀を盛て一斗水七升半大腸

の上の口八小腸の下の口に近て水穀の
精粕これより大腸へ入り傳導の官
をもつて食物を變化して廣腸直腸を
へ肛門より大便と出る

大腸之圖

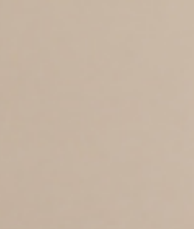
胃の府八重さ二斤十四兩折曲屈伸
のろさ二尺六寸大一尺五寸徑五寸數
とりて二斗水一斗五升をのかゝる
大裏のごとく上口を言門と云上脘に
當り咽喉の通じて飲食これを入て

胃中に切り脾と合して五臓と養ひ
飲食と魁化して下口に傳へ小
腸を主り小腸の下口に接して清を膀胱
に注ぎ濁を大腸に入る大小便の別
倉廩の官なり五味を出し水穀の海
血の海なり

胃の府之圖

脾の臓の重さ二斤三兩廣さ三寸長さ五
寸故書半斤あり血を養ひ肉を主り五
臓を温め春の季十一月に旺ずこの形
馬蹄の如く又垂蘆の比胃の上に
置り敵ふ常に運動して胃中の
水穀を消化をなす化をなす所
の水穀胃より出て脾に達し脾より
又五臓六腑に配りて一身を養ひ
皮毛肌肉筋骨を充し倉廩の官に
して五味を出す 垂蘆の〻〻之力

脾臓之圖



心の臓の重さ十二兩春の季五脈
其の尖圓なり尖圓なるの脈
華の比半の肺の八葉の間に
の下膈膜の上に居て常に血を

生ず 精汁を盛こと二合神と[illegible]
中にその孔竅の[illegible]八直の系
ならびに上下に吉水通じ四の系る
て四臟に通じ君主の官なり[illegible]く
神明と出し表理[illegible]万事[illegible]
を蓄藏[illegible]分心神の命令を受くる

心の藏之圖

小腸の府へ[illegible]さ二斤十四兩長さ三尺
三尺廣り二寸半[illegible]八分余左[illegible]
[illegible]積と十六曲[illegible]と二

寸四分水六分二合余小腸の上口ハ胃
の上二寸にあり幽門と云則胃の下口也
水穀是より入る小腸の下口ハ膀胱の上
一寸水分の穴を分ち大腸の上口あり
[illegible]と云後ハ背に附前ハ脐
の上に附是ハ至て清濁[illegible]
水穀ハ膀胱に入滓穢ハ大腸に入
穢の官なり化物を出し大小便と
[illegible]

小腸之圖

膀胱の重さ九兩二錢廣さ九寸

心包絡は心と包の膜なり心下横膜の上
堅膜の下にあり其形細き筋膜なりて
緒の如し心肺と相連る位相火なり
其所擅中に當る臣使の官なりて喜樂
と出でまし心は神を藏し臟腑の主君
なり此心に其藏を保て見られに別ふ
細き筋膜ありて真心の藏の外を包む
絡ひ心の衛となり君火と相ふゆふ相
火といふ又手厥陰君火を代て事を行ふ
故に手心主と云

圖

三焦は水穀の道路氣の終始する所也
上焦は心下下膈に在り胃の上口に出
呼吸を行ひ栄を導き水穀の精氣を身
に充ち膚を熏し毛を潤を納く出さ
る其治膻中にあり中焦は胃の中脘
に在り臍の上四寸に當る水穀を腐
熟し津液を化して精微を為し
上肺脉に注ぎ化して血を為を上さ
を下さる其治臍の旁にあり下焦は
膀胱の上に當る其治臍下一寸に有
別る腸を遶く膀胱に注ぐ滲入を
出して納を故に水穀帯に胃に并る
糟粕を放して俱に大腸に下るなり
謂ふ此三氣水穀を焦化し清濁を
分別を故に三焦と名く決瀆の官

水道の出るところなり
脉訣に云く三焦は狀ちくの如く名あり
正傳に曰く其体脂膜なり腔子の内
ふあり五藏六府の外を包む羅なり
三焦之圖

膽の府は重さ三兩三銖その象ら蟹の
殼の肝の藏葉の間に藏を居る背の
拳に附く精汁を包ひと三合
その精汁味ひ苦し苦きは火に屬
膽は肝の府にして木に屬を木の味は
酸し故に膽汁の苦きは何ぞ

火は木より生じ肝より出ゆく膽中に火
孕で其汁苦し精汁とは水穀の精液
又水穀の濁るものは受ず故に中
正の官にして物をさばき決断をなす
主る又出入の口にして故に吐下を忌ひ

膽府之圖

肝の膽はありさ四寸四兩脊の第九
に附その藏右の脇右腎の前にあり
其治左にあり其色青くして形木の
葉のごとし元て左葉左の脇に垂ること三
葉右の脇にくるみて四葉あり左

五藏の色脉証候虛實の例

肝は血を藏して魂を舍し筋を瓦を屬し春に
応じて主る東方の木に屬し春に
旺して其脉は弦なり外候は目にあり
その聲は呼その臭は膻その味は酸
其液は泣その色は青し其志は怒る
其維は足厥陰その府は膽その變動
は握その積は肥氣杯のごとく左の脇
の邊に覆ふ肝氣盛なるときは目赤
痛の脇の下痛く小腹に引いて怒り
氣逆するときんは頭眩き耳聾して
額腫る宜くこれを瀉べし不足する
ときんは目明かなれど兩の脇拘急筋
攣り太息するときは爪甲枯て
青くして怒り恐れて人の補を待るべし

心は脉を藏して神を舍し血脉を主る
を主る南の方君火に屬して夏に旺し
て其脉鉤のごとくして洪なり外
候は舌にあり其聲は笑その臭は焦
その味は苦しその液は汗その色は赤
し其志は喜ぶ其經は手少陰その府
小腸その變動は憂その積は伏梁臍の
如して腹にあり心氣盛るときは
胸内痛て脇支滿脇下痛膚背
膂脾の間いづれも兩臂の内痛て喜で笑
て休を宜これを瀉べし不足するときんは胸腹大小脇下と腰脊と相引

く痛び怔忡驚悸恍惚顔色少く舌
本強り善く憂悲を宜これを補ふ
脾は一日に藏して意と舍と肌肉と勞
倦と濕とを主る中央の土に屬し長
夏に旺して其脉緩なり外候は唇口に
在り其聲は歌その臭は香し其味は甘
し其液は涎その色は黄その志は思その
經は足太陰その府は胃その變動は噦その
の積は痞氣胃管に在て覆大なして
盤の如し脾氣盛るときは腹痛と腹
脹洩利ありて身重く苦き飢足痿て收
らず行ときは善瘈脚下痛び宜く
これを減ずべし不足ときはこれを
益すべし四肢用られ

ず食少く食化ぜず嘔逆腹脹腸
鳴ときはこれを補ふべし
肺は氣に藏して魄に舍し皮と毛と
燥に主る西方の金に屬し秋に
旺して其脉は毛の如くして浮なり
外候は鼻にあり其聲は哭その臭は
腥し其味は辛し其液は涕その色
は白し其志は憂ふ其變動は咳その
經は手太陰その府は大腸その積は息
賁右の脇の憂にあり肺氣盛んなときは
喘欬上氣肩背痛み汗出尻陰
股膝踹脛足に痛び宜くこれを瀉
し不足ときは補ふべし氣なくして
悪寒ときは足ど耳聾盛ときは鼻の色変

卒に遺失して度々宜くこれを補ひ
腎は精を藏して志を舍し骨髓を主る
寒を主る北方の水に屬し冬に旺
して其脈石の如くして沈あり外候は
耳に在り其色は黒し其味は鹹し其
志は恐る其聲は呻その臭は腐しその
液は唾その変動は慄その經は足少陰其
府は膀胱その積は賁豚脐の下にあり
腎氣盛んなれば腹脹發泄小便黄し
瀉り躰腫喘欬汗出づ風に憎し面目
黒し宜しく温めて不足を補ひ脉を
腰背冷胸内痛み耳鳴苦しみ
尊び歯動き腰脊痛み唾血足の心
熱して痛み善く恐る宜しく補ひ

五藏の色體

| | | |

四知之論　病証を見るの法

神聖工巧望聞問切これを四知という

又四象ともいう難經に曰く

問ることを知るあるを工という脈を切

して病を知るを神という聞ることを知

を聖という

それ工藏内に病あるときは即五色外にあ

る面青きは腹中のいたみあり赤きは

腹中に熱あり黄なるは脾胃のいたみ也

白きは腹中の寒あり黑きは腎のいたみ

あり酒とのまずして醉るは神氣

の不足あり手足の指のゆび節あのすき

まの病を得て重くいたむ此のゆく

神という

それ五藏内に有て五聲を出を歌哭

呻笑呻これあり五音は唇舌牙齒喉

に出る宮商角徵羽これありそれで

病人の聲を聞く腹中の病とも

たとへば哭は肺の病ともいう

鼻のなは肺に風寒ありともいう歌く

ことは多きは脾の病ともいう怒るは

肝の病あり唾はあり呻

は腎の虛あり喜ぶ笑はたまたまいう

心のやまひ聲のかるきは氣のかるき也

氣の重く濁るは風のいたみ声出ざる

は肺の病あり声は急あるは神の衰へ

なり声そさうの疾のこわざあり声高
あり発あり声ひそびい氣の不順なり
あり発あり氣のいそうり火也あくび多
あるくい氣のつ〳〵るあり此の如く病人の声
い氣のつ〳〵るあり聞くとい聞といひ聖とい
聞く病とろ病聞といひ聖とい
天五味ハ口に入胃ゑ納るといへとも是
とそろ〳〵こゑして脾に渡ゑハとゑ
ゑと五藏六府ゑ散をるあり口酸ハ肝
ゑ熱あり口苦ハ心熱あり口甘ハ脾
の熱あり口辛ハ肺ゑ熱あり
きハ腎の熱あり口淡ハ胃熱
此のごとく病人のうゑこのむ味と問
まハ人と五藏の病つおとろとろと
あり又病者つ休ゑ何と食ゑ

脈やうくめつゑうあして病と受
るぞと奏〳〵病因と問く病の
源とろると問といハエとこゑあり
右望聞問の三ハとつ〳〵其後脈と候
の病の虚實とうハ陰陽寒熱と
つゑめ〳〵ゑ生死吉凶とさびると
診候の術と云あり脈と候ふ〳〵ハ神
氣とろつめ呼吸と定めて診べきあり
脈と切ゑして藏府の病とつるゑ人生
死とろとれと切といの巧と云ゑ
針灸醫の道と勤る人ハ大酒と色欲
と戒ゑ〳〵ゑ貪り妬〳〵ゑ心と
生ぶつゑ〳〵ゑ慈仁の心と存〳〵利欲
とうゑん薄く施して衆人と濟也

診脈

男は左女は右の手より診るなり所謂指と浮てしるに指のしるを浮と通る是氣の往來なり真と按てしるを力あり氣の實なり又力なく弱なり氣の虛なるなり これを微と候 ふとりふさと指と火し按沈めてしるを力なりて底にあるは血の實なるも又力なく渋りて弱きは血の虛なり是を栄と候 ふとりふ九と一息の間脈四動は平脈なり一息に醫者の呼吸する間とりふ呼は出るいき吸は入息也

三部九候

醫者の食指のしるを所とす部と中指のしるを處と関部とす一無名指のしるを所と尺部とす是を三部とりふ部ごとに浮中沈の診法ありこれを九候と候 浮はうすめて候 沈はふかめてうがつ中は浮なるを沈なるを中にしてうごかざるなり

六脈

病人の左手の寸口は心と小腸なり

関部ハ肝ニ膽ヲ診ス尺部ハ腎ニ膀
胱ヲ候ス右手の寸部ハ肺ニ大腸ヲ
候ス関部ハ脾胃ヲ診シ尺部ハ命門
ヲ診ス此ノ如ク六府ハ陽ナレトモ
三焦ニ於テハ命門ノ六府ハ陽ナレトモ
ハ陰ナリ故ニ沈ムヲ五藏ヲ診ス
沈ムヲ五藏ヲ診ス

祖脉

浮ハ浅ク脉ニ指ニ応ズルヲ診ス
沈ハ深ク脉ニ指ニ応ズルヲ診ス
診ニ脉ニ二ツアリ指ニ応ズルヲ
診ニ脉ニ二ツアリ指ニ応ズルヲ
診ニ脉ニ二ツアリ指ニ応ズルヲ
診ニ脉ニ二ツアリ指ニ応ズルヲ
力ナキハ虚ナリ病ノ表ニアリ
力アルハ熱多リ力多キハ実也陰虚ニ
沈ハ表ニ脉ニ指ニ応ズ

七表の脉ハ陽ニ属ス

浮ハ水の上ニ物ノ浮テ手ニ按ズレ
ハ中空ク意素ノ如ク失血ヲツカサドル
滑ハ珠の動ガ如ク痰ニ吐逆ヲ主ル
實ハ弓ノ如ク病内ニアル故ニ
弦ハ弓ノ弦ノ如ク按ズレハ拘急ヲツカサドル
緊ハ索ノ如ク按ズレハ急ニ痛ヲ主ル
ハ沈ミテ力アルハ積聚カ
ナキハ氣ノ不足ナリ也病裏ニアリ
遲ハ脉ニ一息ノ間ニ二三動ク
ドウニ力アルハ痛ミ多ク力ナキハ
冷多リ陰脉多リ陽虚ニ数ハ
脉ナリ一息の間ニ五六動ク力アリ
力アルハ熱多リ力ナキハ寒也陰虚ニ

洪は極く大なり熱とつくさるる

八裏の脉は陰に屬す

微は有りのごく無きを氣虛と主どる

沉は肌肉の下にあり濕冷洞泄と主る

緩は浮大にして軟にして微なれば風結と主る

濇は輕く竹を刮るを血氣不足と主る

遲は一息に三動腎虛の脉なり寒と主る

伏はつくづく按ずれば骨にあり物聚と主る

濡は極く軟にして浮細なり虛損と主る

弱はつくづく力なし虛にして筋萎と主どる

九道の脉　七表は裏九道と二十四脉を

長は竿のごとくなり三焦の熱と主どる

促は數にして時に一止し氣血痰食行ぶ

結は遲にして時に一止し血氣痰積痛と

牢は鼓皮を按ずるが如く氣壅り骨肉いたむ

動は微動にして來て往とし虛勞血崩痢病

澁は線のごとくわれて精損氣血俱に虛と

代はうち切るごとく也惡脉老人はなるべし

七死の脉

彈石は石をはじくごとく

解索は散亂して聚らず次第不向なり

啄は鳥の喙のごとく連來て數急なり

屋漏は止まる時に起り相連らず雨の漏に

雀遊は浮く動ずして速に去るなり又來

魚翔は魚の水面に尾を振て行ごとく

蟹沸は釜にて蟹を煮る沸のごとく

死証の見様

面赤くして眼白く　面赤くして目青く
面青くして目黄き　面青くして目白く
面白くして目黒く
面黄ありて目青く
面黒くして目白きハ死しるしと
面黒くして唇青く　面青くして唇黒く
面黒くして唇青く
面に精彩なく土色ありて食を受ず
目に精光なく齒黒く耳目顴頰赤く
黒色額上へ出て直に鼻脊両顴
上に下り　黒色或ハ白色出　目鼻口に入
両頰赤く一切に不言　熱なくして妄語
衣の縫に循　床に摸り　空をつかむ
人病虫下り　戴眼し　目乖がらり
髪直ぶの如く沢山なり

髭堅　唇青く人中反り　唇反人中
清　唇口たちまち黧き　脣腫齒焦き
齒にたちまち黒くなり　舌卷卵縮り
汗出て流れ　齒黄く落　遺尿あり
爪甲青く或ハ白く　爪甲の肉黒く
陰陽俱に閉て失音　神氣不安
食を見て後ずさ　項の筋解
手の内の紋なく　足の甲又重ねれ
肝絶ハ首の如く泣出　汗出て流水の如
心絶ハ肩ありて息し　目不回直視を
脾絶ハ口冷　足腫漸利して無度
肺絶ハ口張て魚の如く氣出て不反
腎絶ハ齒長く茎面黒く目黄腰折れ
大骨枯蕭し　大肉消下し　胸中氣清

嘔息不便動作まうくかころく疲困を
ろ者いこと死と目人と見ざりハ立ると座と
病人の色青さこと翠鳥の如く赤さこと
雞冠のごとく黄ろこと蟹の腹のごとく
白さこと豕の脂の如く黒さこと烏鴉の
ごとく潤〻たること青さこと蓋の
如く赤さこと褚の如く黄ろこと蘇實
のごとく白さこと鵝骨の如く黒さこと
炭の如く澤なこと
凡病色面にあらはるゝ赤きハ熱多り
白きハ寒多り血虛多り積多り肺ハ
きハ多り黄ろハ脾胃の虛多り青きハ
痛多り黒きハ腎の實多り
腰の見様　并生死を知る法

病人を仰きて卧さしむ足とのべさせ兩
手と股のまゝに付さしむ男ハ左女ハ右の
乳下と手の亟まて押へ病人のむねを
ゆあ息五六ばかりをして其手をあらし
上腕をゆ押へくるゝろ左右をうくび
見る男ハ左女ハ右を先にするふむ心ハ
虛多り押へて痛ひ實多り輕く押て
むしハ邪表にあり重く押へて痛む
ハ邪裏にあり脇より胸の間をゆく脇
より下ふくれて押へどこへあるハ腎病
の實多しゆ胸の下ふくれ脇下ゆきて
ゆるハ腎の虛多り脇の上下ふくれあるて
何のこゝろとなく押へどこへあるハ無
病の人多り或ハ堅くあるハ痰りハ

[illegible]木の枝をとて袋す入
[illegible]のるーこと也
[illegible]病あり左右の立態
[illegible]
くあるハ脾氣の虛あり生死と候又
臍の下三寸関元の穴と手[illegible]押
くるにかゝ、空虛ゐして指と動
[illegible]中ゝ[illegible]立ゐ溝あり
指の隙あるゐ[illegible]死を此穴ハ天の一
元の氣とうけ始る所をゐわら一身の
大極と云所ゐり 經ニ曰く臍下腎間
の氣ハ万人の生命十二經の根本ゐり
三焦ハ則元氣の別使とゐり此三焦の
根本ゐり[illegible]又三焦ゐり終る
[illegible]者ハゐ[illegible]三焦の部

元の氣ゐ[illegible]ゐり其ハ一元の氣ゐ
うゐ有無と云ハ生死と辨へ
[illegible]ゐ[illegible]胸の下堅く右と[illegible]
[illegible]ハゐ[illegible]死を此外腹心の傳受ゐ
[illegible]醫の秘密ゐ[illegible]ハ根にゐ[illegible]又
見脉ゐて生死と云[illegible]見脉[illegible]人ハ床に
つき不食[illegible]云[illegible]本復[illegible]見脉と
腹[illegible]死を

天地人男女の法

人ゐ天地人の三才あり爾に天地人の
三才あり人の胸[illegible]上と天[illegible]
輕く淺へ刺へし胸[illegible]腑[illegible]人
[illegible]針と中操ゐ用ゐ腑[illegible]人
を重深く刺へし中ゐ[illegible]胸[illegible]上に

刺と大事あり 胸ハ是心の命神の舍る
所なる近きゆへあり天ふ刺さば針を伏
さく深く輕くひ神のゆへ若針刺すく過
あ〜ハ病人の面と袖あるおひ口鼻の
息と濕め面に風〜ゆへ男ハ足の三里
裏嵩女ハ三陰交さん男女ともふ腎下
一寸五分氣海の穴と刺なく補瀉とあり
なを〜かゆへ〜ど藍生あり又針ハ天地
人の三才あり刺〜く皮肉に至るを天と
肉内に至る法人と云筋骨ふ至るを
地しかふあり難經に云〜く春夏ハ淺く
ふ宜し秋冬ハ深くしたがへし男ハ淺
く女ハ深く左ハ削ハ男ハ淺く女ハ深く
是陰陽の法あり針灸と行ふあ先行
年宜忌及び人神在處と定べし然ち
ざるを害あり万物ハ五行の理にそむ
ど人ハ天地の正理あるゆへ多り經ふ曰
人ハ天地の氣と受く生ると天の陽氣ハ
氣とあり地の陰氣ハ血とある天地ハ万
物の父母とあり頭面喉胸心腹腎下肩
背肘腿手足各主法ありこれふ
治と施べし

太極の論

夫針ふ太極と云こゝあり此理を言に
のべいと心にあらずふ得てし言ふ
迷うこれとの万物の上にあり太極
の理あゝどと云とあり 先天地未分

○陰陽兩儀

まざるとの小三六太極判ち陰陽兩儀と生ず是より寒暑燥濕風水火土金水千變万化こゝる分こゝ云ふ次に運無ちり混沌といふに清へ上く天と濁へ下て地ところ是乾坤の初なり濁へ下て地ところ是乾坤の初なり鍼の上におのて泳法ところ八鍼へ本金虛無の夢幽少無心の鍼へ本金虛無の夢幽少無心の鍼へ本金虛無の夢幽少無心の

○五より整こゝに元を腹の部に針をゝに
元の内に於くかゝく整搖をゝり
中脘関元の如ゝに先刺く入ること二
寸五分退き出ること一寸留ゆる
こと一寸五分内に在しめて整搖とる
○搖こゝに元を搖ゝこゝに針を出
さんと欲せば動搖して後に出すべし
○彈こゝに補ふこゝに大指の甲をもて輕く
針を彈き氣をして疾に行しむ○按
こゝに手指をもて針を按り左を外し右を
内こゝに女に是に反ず○循こゝに針を部
分經絡の処に下し手をもて循り氣血
往來せしむ經に曰こゝに推こゝに行
こゝに刺こゝに止○門こゝに補の時に

針を抜く其針口を手をもて押閉ゝり
○搖こゝに針を刺こゝに氣滯り滯ること
を得ば經絡に隨ひ上りて大指の甲に
く上下に其氣血を切こゝに
こゝ通し行ること○按こゝに手をもて
針を按く進退ること多く按切の
狀のごとし○爪こゝに針を下して左手
の大指の爪をもて重く穴の上に抓し
氣血を散ずしむ準ずり○切こゝに針を
下さんと欲してまづ大指の甲をもて其
針をる所の穴を按して左右の氣血を
宣散して後に刺をべしこれ栄衛を
傷らしめざるなり

補瀉迎隨の論

手法の補瀉虛實の補瀉あり
針鍼と口にふくみ温めて右の肘と向へ
ふり手先と内へてゝめ大指さんと前へ
向の呼氣にちさゝのゝ食指とゝゝへ大
指あて和ふの終り下をとゝ呪
く曰く 五帝上眞六甲 玄靈氣付至
醫百邪閉理と三篇念と入こと二三分
留と五六呼經ふ瞞の病ふ隨て の終り下
進退動搖でゝめて氣と至らしめ手と
振の針とゝらく徐々ふして吸にちゝぶ
のゝ針と出し孔と閉よ是手法の補
終り瀉ハ時とさゞげて我ゞ前ふ付手先と
向へ大指とさんふ向く吸ふちゝぶ

くの終りとき呪して曰く 帝扶天
形護命成靈と誦ふこと三遍入る
こと三分留ること五六呼ふして經ふ迎
の病に迎めて撚り下の氣至て左手
ふて針のこと開き呼にちゝぶめて針と
出と孔と閉ざるこは呪と念ぶる時ハ
一心針に念とこゝするそ是手法の瀉
終り婦人ハこれふ變ゞ補法と瀉と
瀉法と補こゝ 虛實の補瀉ハ補ハ
不足と補の瀉ハ有餘と瀉と不足ハ病
成り麻と多ハ有餘ハ腫と多ハ痛ハ
天民の正傳ふ曰く其鍼と刺ふ
補瀉の法ありとゝ雖とも手恐くハ俱ふ
有瀉く無補とちゝれども此文段ふ

は針法こゝろ中に手法の論る〜事予
以らく靈樞に曰く微鍼を以て其經
脉に通〜其血氣を調へ其道順出入
之會を營ぜんと欲をとあるを世俗
の醫者の云こゝは鍼灸こゝは氣力
く人の氣力をとゝふと云こゝとゝ
ぞ夫人の病は邪氣勝く正氣
ぞ蓋し鍼は邪氣をうりぞくるゝの也
邪氣さへうりぞくるゝは自正氣は盛
なる理たり我俗醫の言ところの意
ところがの看るに只鍼は痛と忍の
緒あり是を以て鍼をるゝは氣力
たしとふと云こゝをのこゝの鍼經と

あらためて云ゆはあるゝまあるゝは是
俗說多り針は痛くの性なるこゝを
いふと痛さるゝは刺者の能と
不能こゝるゝ若妙手を得は何ぞ
忍痛の勞あんや鍼經に云く能刺
者は肉と傷と而能病に中とあるを
抑針の其來ること尚きこゝを寧一人
の不能を以てあく萬世の鍼法をする
ることせんや針は忍痛の勞あるを刺
者の不能なり〜針のくにのこゝと藥
は於ても亦然り醫のはとのにらて
藥の人を害をこと鍼こゝもあるを
〜妙手に逢こゝは針藥をもは病
治をるを惡手に逢こゝは針藥共は

人と害をべーちんをのこり針ふおい
く其害と論をるこあんつ又或人
問く曰く曾聞針に瀉あつて補也
と正傳あも見へこり故に人こ多き
有餘ところところと刺く實邪と瀉と
の義をく瀉素の如きの義にあつ
又正傳に補あーと云このへとこも已ふ
經に補の義と遠こり不足と刺也
く病と除くハをんハ元氣こらと得く
是元氣と生とるにあ〜をや
醫へ補の補ろこと知く瀉の補
ろこと知をと程明祐が妙論あて
行人東こり西へ通

ろふ中途に賊あつて通ろこと多く
時に傍こり見る者あつて賊と遮
ふとハ行人ちく道と通る
ちるにも途と通る者ハ正氣多り
これと妨る賊ハ邪氣多りかの賊と
遮退る者ハ針多り夫針に四法あり
其一に迎隨一白に是針に補あり
瀉のの證多り何を偏に補をこと
ちんや醫師をて針とそ〜ぶハ武士
の兵器とそこるに國に新賊あると
ちハ兵器と用の人に素病あるこ人ハ
針素と用ひたこへハ素ハ智仁のこと
針ハ兵の仁智仁と表に兵と裏に
をこ人ハ素をあハつて國豊治ら

さんや凡そ人の經十二各經五穴あり
并榮兪經合くわい是あり五あり〻く
十二あるとれば六十穴あり是鍼の要穴
あり鍼灸人の穴一身に三百六十穴その
鍼をるところ要穴六十一又その要あ
りの二十四穴あり腑の病あれば各經よ
依て其經の兪と刺を臟の病あれば各
經の合と刺をこれ十
二兪十二合あるをそ二十四穴これ也
兪はこれ各經の本原あり故よ又原
穴とも名るを其經よ病あるとれば
その經の原穴と刺く治をるを其
經實をるとれば瀉し虛をる

あるとれば方とるらの補あれば方
とるる或人の口〻方圓の義いん
予ら曰く方とは氣の方に盛ありんと
をる方あり是氣の榮へ盛あるん
すると見てとれと迎へく利
と換く故に瀉すれば方とるらの圓
は行あり移あり宣ざるの氣と行
復ざるの脉と移をあり宣ざるとるを
いまる復ざると移しとこれと脊ざれ
虛氣と扶助しこれと補ふあり如蔵
の義あり たとへば足の三陽の經は頭
より足かいまるまで鍼と刺こ
指と以て經脉と擊り上で鍼
上に向へ經脉のをくびを

刺して其の實に後これ道に
義多り又刺人の指と
下して針鍼に下に向へ無脉の後
醫と濟の義多り虛して脉帝に
ど故ふ後に道に刺く脉と後
集のふたこと中号
ると人後に輪と進て力とそれ
とし車と後をこしこれ道の義多り
經脉に子に至り今
至りに陰陽に下に分れり今その人
脉と試ること思惟に鍼に實と
ひ虛とそこの經脉とそこのふたの
經脉あるとは五藏六府腑
用の道と斷に関格の

あるん夫関格に命と盡さ
とこれ古人の言多り鍼に急
数の方手に刺に其功
りと早さ又經穴に
病の處在と刺をこれと散鍼と
氏又と且と天應穴と云今の鍼科多
くに此散鍼の二法のこたとひ經穴と
考へて刺を者あれとも迎隨の理と
ふ故に鍼其經に中に
迎へくその隨とくふの義
又長鍼と以て刺をゆ經脉
ふ入て損傷に古人の禁
慎ひ

針裏に入る其用ゆ其穴にしめく
針入ること二分あるひハ二分半あるあり
三分あるのく分あり故に昔ハ周身三
百六十穴針し赤三百六十本ありて
其經と刺しにその針とりつけとれ
針と刺者ゆく知ることるり深く
刺く損せると損し傷ざれ傷成
をべからず

當流傳受の奥儀

和手ゆ傳ることろハ本朝針家の祖無
分の末流ゆり病の頭にあるし腰に
刺し病脚にあるし赤腹ゆ刺をその
刺に次第あり諸病ゆ脇の下二寸
前田の一穴と刺をとれ腎間の動氣

あり十二經の根本多りとれと刺て
元氣と刻し其後に鼓針の法にら
く經穴ゆ物らにく邪氣のある処と
刺て元氣の巡途と開さて通せ氣と
氣順をる氣順をれい痰順と痰順
をれと熱散をる熱散をれと風内に
消を況や又氣順をるとハ血活と血
活をれば潤ひ生と潤の生をれば精と
益を精益とハ神内に充をれ針の功
とあるとと此の如し古人ハ滿者に刺と
好と俞原ゆ刺と好と腹に刺と
好と四肢ゆ刺と好と是ハ
腑にあるとと恐と此のおと
たとひ俞原と刺と赤四肢と刺と意

と得ざらしめ不可なり腹に刺こと
意を得く刺は可なり古人腹に刺を
こと勿れ誤て針深く入て藏府損
損を藏府損れば忽死せされば針
の鏡皮膜外に止まつて藏府へ入
さるなり刺て藏府へ入れば害と
その〳〵に〳〵す其功あり〳〵その故は四
氣外感の熱七情内傷の火鬱て肓
膜乾き枯て髮の溫氣に汗多くして
身に垢の浮りたるごとく又竈の上の煤
のごとく冬の木葉に霜の結ごとく況や
又膜外乾くときは鼓の皮と急に張さ
るごとく故に膜況て裡に入つて藏府
の神元氣の途ともに先時

氣滯りて諸病を起こと然るに針鍼
と腹外に止め手法を素して推下
ときは氣の途〳〵氣の造ひ〳〵
〳〵は血頻ることなく腹をうる
ひと得ることなく和ぐ多り故に病
の滯ることなし人多くは針を刺
此意を得ずして刺こと
は腹を刺こと何のかそうの処
あるん内經に曰く熱の病多り時
脉の運ること〳〵汗の流々
大に多きことなし人は飲食
滑〳〵に飽食〳〵なることなし大に
こと是等は〳〵を刺こと〳〵
不足氣不足これ陰陽〳〵を不足也

[illegible]と刺とこさんハ此と刺とこさんハ重て
天氣と鳴ー老者ハ絶滅ー壯者ハ復
[illegible]とすり中ゑと經脉と刺の針と
脉中の氣と奪ゆゑにこゝかこれと恐る
[illegible]ー尤と針ハ經脉のところと除きえ
[illegible]膜と刺やうゝゝ是とかゝる
[illegible]抓膜の奇術あり

針淺深の論

春夏ハ陽氣上ろゆゑに人の氣浮ふ針と
[illegible]刺べしー秋冬ハ陽氣下ろ故ゑ人
の氣も沉む針と淺ハ刺べしー陳氏ゑ云
春ハ氣毛の分にあり夏ハ氣皮の分に
あり秋ハ氣肉の分にあり冬ハ氣骨髓
あり是淺深の意あり陽分ゑ針と

[illegible]ハ針と伏く刺と陰分ゑ針と
刺[illegible]先左手ゑと針とろ處の穴
俞と按摩て氣と散ーとかゝら針ハ
刺と此と穴と刺ま衛と傷ろこゝあく
衛と刺ま穴と傷ろこゝあくーと云あり

阿是の穴

阿是の穴ハ秘傳あり九經穴三百六十
所とかゝ經の正道あり其餘穴まかゝら
ど三百六十穴の外痛む處と推て針灸
と行ふこれ阿是の穴あり前ゑと記と
ごゝくあるとと天應の穴ゝゝと散針ゝと云
あり[illegible]と狠りゑ行ふへーゝゝと
へゝ田と行ま道と行ゝゝて田の阿是と
行ろあり道にあり[illegible]と田の中と

行ずして何是と行ずと經絡の外
なれども妄に行ことなかれ〻〻と道
理と考へ鍼灸をなすべし乱れたる
こゝろに入とあやまれば然ゆゑ
中の秘をしてこれを忤さん初学の者
のそこなひ經絡を會得せざる
上にて何是の術と行ふをれば寸効
鍼刺く抜ざると鍼の法
鍼肉内に入ること四五分ありて出ずるをれば
皮肉鍼先を擺付ころまり此抜やう人
意の出ることを指おかと入と一競にもち
と抜べし又二三寸をの移り下して出
ざるを藏府の邪氣運動して鍼先を
鍼りまとの出ざるを且進退動揺

すべし邪氣とらしして指を力と入く
心ちづを抜べし出ずるをもて病者
も鍼者を驚くにもてはなく抜ぬ
るの出あるのい其傍を別まを鍼と刺て
氣と省散して後をあくもこと

折鍼と抜の法

鍼折く肉の内を在て出ずんく
鼠の肝と脳と并燗うし鍼口の上
を塗べし又象牙と粉すして水に調
く貼ぶし若鍼口愈合者ハ鍼を
割開く基と勉べし

鍼灸慎の事

凡そ鍼と用く欲べ前一日後二日房事
慎ぶべし灸ハ前三日後七日房事

なし又鍼灸を用ゐる時は先づ暫く氣を定めて後に用ひ
若事あらん暫く氣を定めて後に用ひ
べし又たとへ飢てなほ食を消ず
べし灸の後二日風呂に入るべし沈
滯の翌日に用ひべし又風寒を禁ず
べし窓隙を閉ぢておこのべし

灸穴を熱する法

灸穴を熱する法は墨を以て風多く
時窓戸をあらかじめ病人の暑うして
寒うしてあるいは醫者心を收め
点をつけ俞穴を思慮し病人の四肢
しかるのち眞直にして休すべ

量り俞穴を定め手を以て穴を按ずべ
の下に指を病人の心に快く徹するこれ
俞穴の的なり俞穴をとるに足穴
徒に好肉を傷りて病に益なし坐して
熱するときは立て灸すべし立て灸
すべき右に左に先づ
後に上部に先づ
後に背に先づ腹に後にすべし
但し女は右に先づ左に後にすべし

十二經旺分の時

寅の時は肺の氣至る卯の時は大腸の氣
至る辰の時は胃の氣至る巳の時は脾の
氣至る午の時は心の氣至る未の時は
小腸氣至る申の時は膀胱氣至る酉の時は腎の

時ハ心胞絡経の時ハ三焦ねの時ハ膽
うしの時ハ肝の氣のさかり此脏腑の時
考へくらべくに灸をすへいと其験あり

四季の人神

春ハ左脇　夏ハ時　秋ハ右の脇　冬ハ腰

毎日の人神

一日足の大指　二日外踝　三日股の内側
四日腰　五日口　六日手
七日内踝　八日足腕　九日尻
十日腰背　十一日鼻茎　十二日髮際
十三日牙歯　十四日胃腕　十五日通身
十六日胸　十七日氣衝　十八日股
十九日足　二十日内ゝ踝　廿一日手小指
廿二日外ゝ踝　廿三時命門　廿四日足の内側

廿五足陽明の　廿六日ひ経　廿七日のさ
廿八日陰　廿九日のぞ脈　卅日足の跗

十二時人神

卯　辰　巳　午　未　申
酉　戌　亥　子　丑　寅

血忌日

正　二　三　四　五　六
七　八　九　十　十一　十二

血支日

正　二　三　四　五　六
七　八　九　十　十一　十二

六日十五日十八日廿三日廿四日廿八日廿九日
艾葉の製法

三月三日五月五日に採るの神靈のうり

久しくのこしたる紙を巻き長さ三寸ばかり

のうりを切べし開さ八切口二分ばかり人々の

氣力に應じて大小を量るべし小さくれば

命短かくなり小兒の小灸をも

虛人をやまうるのわるべし

灸火の法

鐵石を打て火を出し麻油を燈心に入

て用べし天の火はよくなり

水の火魚の油はまろし箸は桃の枝を

竹をもるべかず灸し終るまで口をくく

塩をうゝて其灸穴に付て又三壯灸

置べし

尺寸を定る法

男は左女は右の手の中指の第二の節

上の折目と下の折目との間を其人々の

一寸とす

折目を内外あり食

指の方へ向る折目を取べし中指を屈

して取るかゝるを環のごとくとべし

中指　無名指　人さし指　大指

屈伸圖

髮際を定る法

髮際の分明なるは子細あり若髮抜て

ふしなるは兩の眉の正中より三寸上と

敵の髮際は鬢の八推うり三寸上と

ところの髮際

大推とさぐるの法

大推とは上に小推一穴と二穴とあり
又一穴とる法とあり大の字に穴を付
く東へし又秘傳ふ病人と脈ふ
小推は頸に付て下る大推は脊骨に付て
動ぐ又肩と同し通りあるが大推とも

灸補瀉の法

病實をとる者はこれと瀉し正氣虛をとる
者はこれと補ふ瀉は艾炷と吹き或は
灸補は艾炷と補ふ艾炷と吹き
して火のおのづから滅次第にとるあり
灸をとるは駄暈をとるとあり吟き
動かし灸の処と歷ぬおのづから魅も良

久しくもて稀粥うるのへ姜湯と用ひて

灸瘡と發とる法

尤灸して潰されば其病愈るなり
ふ灸瘡と發せんと欲せば古き草履の
底と焙りあるくあ火疱の上と摩るく
十遍かとをれば三日あして潰る
又蕁の葉三五水と糖灰の中にあるくあ
火疱と慰せば三日めふるふ効あり

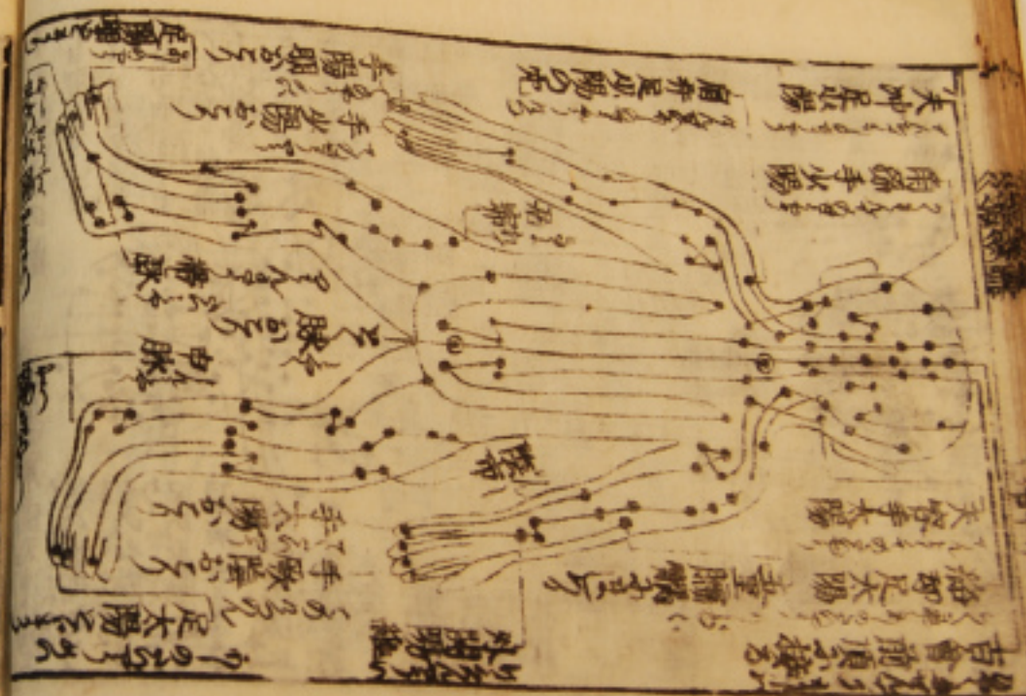
灸瘡と洗ふ方

尤も灸し已てまう茶湯あて灸瘡のあ
ぞりと温あ〳〵ぐ風熱と除く經脈と通
トらく潰てやまのと愈を
蕁の赤皮の根　薄荷各等分
右剉こ煎して絞ふ後〳〵あくあ酒を

内踝うちの上廉より下廉まで三寸半
内踝うちの下廉より内踝まで一尺三寸
内踝より内曝まで一尺六寸内くるぶし
膝より内曝まで二尺六寸足の掌の長さ二尺二
寸足のひろさ四寸

周身尺寸之圖

十四經起止の圖



十四經脉是動所生病

太陰の脉ハ中焦胃の上口ヨリ起リ下リテ大腸と絡ヒ還テ胃口ヲ循リ膈ニ上テ肺ヨ屬シ肺の系ヨリ横ヨ腋下ニ出テ下テ臂内ヨ循リ少陰心主の前ヲ行ク臂の内上骨の下廉ヲ循テ寸口手の脉処魚際ヲ上リ魚際ヨリ太指の端ニ出テその支ハ腕後ヨリ直ヲ次指の内廉ニ達シ其端ニ出テ手陽明の經ニ交ル此經氣多ク血少シ是動ヲ病ムトキハ肺脹滿シ喘欬シ缺盆いたミ兩手ヲ交ヘ整ヒ生ずる所の病ハ咳嗽上氣喘喝煩心胸ぐち脇痛の内いたみ肩背のいたみ實ハ風寒汗出中風ヲ虛ハ少氣溺色変シ遺失を

手陽明の脉は大指の次指の端より起り
指の上廉と循りて合谷の兩骨の間より
出て上ること兩筋の中に入り臂の上廉と
循て肘の外廉に入臑外の前廉と循て
肩に上り髃骨の前廉に出て上て柱
骨の會に出ること下て缺盆に入り肺と絡
ること臑を下り大腸と屬して其支は缺盆より
頸を上り頰と貫て下齒縫の中に入り
還て口と挾て左右に交て上て鼻孔と挾
む此經氣血俱に多し故に足動じて口目
齒いたみ頸腫る生じて所の病は目黄
口乾きて鼻衄喉痺肩前臑いたみ次指
いたむ實すれば熱腫し虛すれば
寒慄して復す

足陽明の脉は鼻の交頻中に起て下て
鼻の外と循て上齒の中に入り還出て
口と挾て唇と環り下て承漿に交て却
て頤後下廉と循り大迎に出て頰車
と循り耳前に上り客主人と會し髮
際に循て額顱に至て其支の別は大
迎の前より人迎に下り喉嚨と循り
缺盆に入り膈を下り胃に屬して脾と
絡ふ其直行は缺盆より乳の內廉に下
て臍と挾て氣衝の中に入る一の支は胃
の下口に起て腹中と循り下て氣衝の
中に至て合て髀關を下て膝臏に入り
下て脛の外廉と循り足跗に入て中指
の外間に入る一支は膝より下て三里に注き

まろれて中指の外間に入る一支は別て
明上より大指の間に入て其の端より
出る此經氣多く血も多し動ずること
甚悪寒し欠伸し顔黑く人と火と
あくこと木の音と聞ばおどろき高きに
上りて歌ひ衣を棄て走る生ずる所の
病は狂癇濕溽汗出るなら口ゆがみ唇
裂てひくつかとうい水腫ひ脛ひ股膝
前足踝中指をおいるむ實まるとえん身
前熱し善飢溺黄多り虚まるとえん身
前寒慄し脹滿を
足太陰脾の脈は大指の端に起り指の内
側白肉の際をめぐり踝骨の後をとおる
内踝の前廉に上る腨内に上り骨の

後をめぐり厥陰の前に交り出て上て
股の内廉をめぐり腹に入り脾に屬
し胃をとおして膈に上り咽を挾て舌の
本を連て舌の下に散る其支は胃に
注て膈に上り心中に注く此經氣
多く血少し是動ずるときは舌本こわり
嘔吐し胃脘ふさがり腹こわり善噫し後と
氣とを得ときは快し身體ことごとく
生ずる所の病は舌の本いたみ體動搖
あるときは不食煩心心下ふさがり寒疝
溏瘕泄水下黄疸夜不寐強立ては股膝
の内腫足の大指あがる
手少陰の脈は心中に起り心系に屬し
膈を下て小腸を絡す其支は心系より

上て咽と挾む目に系る其直なるものハ
心系より却て肺に上り膈の下に出
て臑内後廉とめぐり太陰心主の後
を行き肘の内廉に下り臂の内後廉
とめぐり掌の後兌骨の端を抵り掌の
内廉に入り小指の内とめぐり其端ニ
ハ口渇嗌ゑらき心痛を生ずる所の病ハ目
黄こ脇いたこ臑臂の内の後廉いたこ厥
をなしハ掌の中熱していたむ
手太陽の脉ハ小指の端ニ起り手の
外側とめぐり腕に上り踝の中に出て
直に上て臂骨の下廉とめぐり肘の内
側兩骨の間に出て上て臑外の後かとを

循り肩解に出て肩胛と繞り肩の上に
交り缺盆に入り心とゆきて咽とめぐり
膈ニ下り胃に抵て小腸ニ屬す其支ハ
缺盆より別れて頸とめぐり頰と上り
目の銳眥ニ至り却て耳の中に入るその
支ハ頰と別て瞳に上り鼻に抵り目
の内眥に至る此經血多く氣少く邪
是動ずるときハ嗌いたこ頷
ゑらゑらす肩拔かるゝ臑折るゝ似
生ずる所の病ハ耳聾目黄こ頰腫頸
頷肩臑肘臂の外後廉いたむ
足太陽膀胱の脉ハ目の内眥に起りて
額に上り巔上に交る其支ハ巔ニ入り
の上角ニ至るその直行するものハ巔ニ入

腦と絡の還て出て項に入る項の下
肩髆の内を循り脊を挾て膀胱に抵
り入て脊をめぐり腎を貫て腰中に下て
屬す一の支は腰中より下て別
る胞中に入る一支は腎内の左右
を下て脾をつゝみ脊の内を挾て膈
を通て膂外の後に出て腎の下に
出て合て下て腨の内をつゝみ
の後に出て京骨をめぐり小指の外側
の端に入る此經血多く氣少し是
動ずれば則ち頭痛目眩を仮て項強
ふくらこく腰折を仮て腰ふりうごく
脊の中央ふるえり喝ひとなりて物なく如
く膀胱ふくれとなる是筋をつるぶる生ず

所の病は痔瘧狂癲ゝら額頂痛
ゝ目黄ゝ涙出ゝ多ら項せう要尻
胞腨脚ゝふくらこく小指のゝ
足少陰腎の脈は小指の下に起り斜に
足心を趨く然谷の下に出内踝の後へ
めぐり別ゝ腎中に入る腨内に上
り胞内廉に出て股の内後廉に上
り脊をつゝみ腎に屬膀胱と絡
其直なるものは腎より上て肝膈を
つゝみ肺中に入喉嚨をめぐり舌の
本を挾む其支は肺より出て心を絡の
胸中に注く此經氣多く血少し是
動ずれば則ち飢ても食を欲ずして面
黑く喘欬唾血坐して起を欲
自

脈々として所見多くして心驚かし
飢るがごとし氣不足にして善恐き心惕々と
して人の捕こうるごとし生ずる所の病
口熱して舌乾き咽腫して氣ありて嗌乾く
いきづく煩心心痛黄疸喝厥脊ちう厥
内の後素いきづく痿厥して母ことと者
ミ足の下熱ていきむ
手厥陰心包絡の脉ハ胸中に起て出て
心包に属して膈と下て三焦とめぐりて
胸とめぐりて脇に出て腋に下ること三
寸上腋の下に抵り下て臑の内と循り
太陰少陰の間を行き肘の中に入て臂を
下り両筋の間に行き掌中に入り中
指をめぐり其端に出る支のごとくハ

掌の中より小指の次の指とめぐりて
其端に出る此經氣少く血多して是
動ずるときハ手心熱して臂肘掌急
して腋腫る甚則ときハ胸脇支滿心中
澹々として大きに動く面赤く目黄ふ
笑く休ずして生ずる所の病ハ煩心心痛
して掌中熱を
手少陽三焦の脉ハ小指の次指の端を
起て上て次指の間に出て手表腕と
めぐり臂の外両骨の間に出て上て肘
をつらぬき臑の外をめぐり肩に上て足
の少陽の後に交り出て缺盆に入り
膻中にちらして散て心包と
膈を下て偏に三焦に屬して其支ハ膻

中ゟ上へ缺盆に出て項に上りて
耳の後と挾と直に上て耳の上角ふ
出て屈く頰ふ下り頤に至るその
支ハ耳の後ゟ耳の中に入り却て
出て目の銳眥に至る其經氣多く
血ゟ[illegible]是動ゟ[illegible]ハ耳聾あゝ
くれ喉痺是氣と主る生ゟ所の病
ハ汗出目銳眥いゝ頰いゝび耳の後
肩臑肘臂の外ゟ小指の次
の指ゟらいらゟ

足少陽膽の脉ハ目の銳眥ふ起り上
く頭角に抵り耳後に下り頸と循
り手少陽の前とゆき肩上に至り
却て少陽の後に交り出く缺盆に

入る其支ハ耳の後ゟ耳中に入り
耳の前に出走り目のまゝゟの後に
至る一の支ハ目のまゝゟ[illegible]別まて
大迎に下り手少陽に合し頰ふ抵り
下て頰車に加り頸と下り缺盆ふ
合し胸中に下り膈と[illegible]肝
と[illegible]膽の屬し脇の裏ゟ[illegible]
氣衝に出て毛際と繞り横に髀厭
の中に入る其直るゟのハ缺盆ゟ
腋ふ下り胸と[illegible]季脇と過ぎ
下て髀陽と[illegible]膝の外廉ふ出て
[illegible]の輔骨の前に下り直に下て絶
陽の抵り下て外踝の前ふいで
[illegible]と循り小指の次指の間に

と是肝と主る生ずる所の病ハ實ならば
九此十二經の病ひ實ならばハ之
嘔逆洞泄狐疝遺溺癃閉
と瀉し虛ならばハ之と補ひ熱る
ならハ之と留
ならハ之と疾し寒ずるならハ之と留
脂下ならばこれと灸し實ずん
虛ざるならば經とりてこれと取る
督脉ハ下極の腧二陰の間ふ起る脊裏ふ
並て上く風府に至り腦に入る巔ふ
上り額へめぐり鼻柱ふ至り陽脉ハ
海に屬し此病ならハ脊強り反折る
其絡ハ陰器へめぐり蟇間ふ合し蟇
後へ繞り別ふ臀へ繞り少陰巨陽
ふ至る中絡ハ少陰に合し腹内後廉

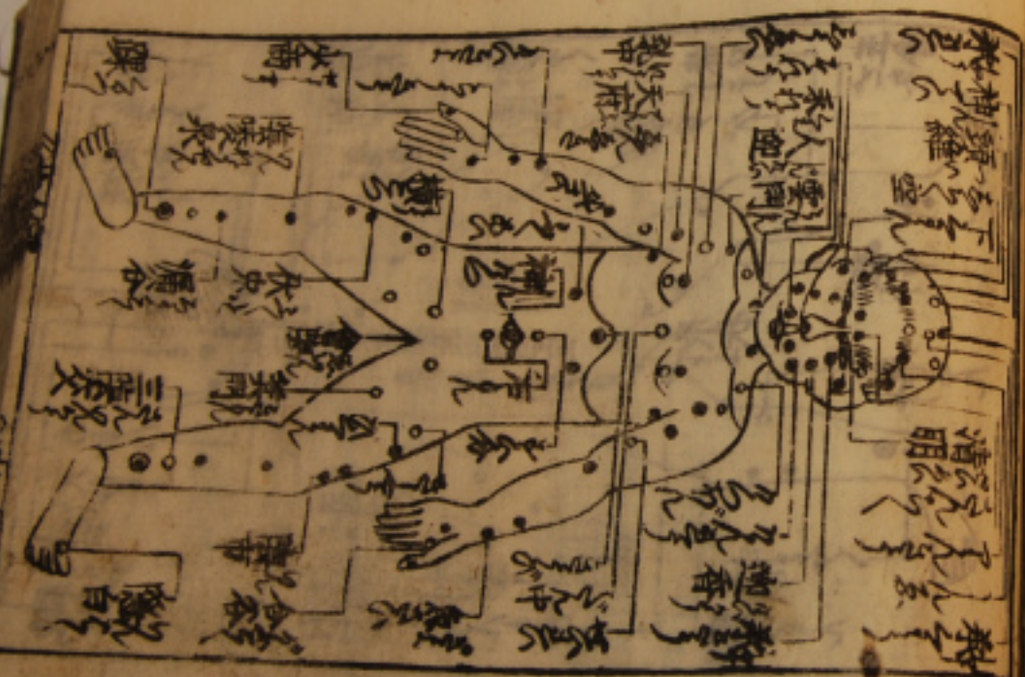
ふ上り脊へつ　ぬき腎に屬し大陽
と目の内眥ふ起り額に上り巔上
ふ交り入て腦へまたハ還出て別に
項へ下て肩髆へ循り脊へ挾み腰中
に抵る入て膂へ循り腎へ絡ふその
少腹直に上るものハ臍の中央へつゝぬき
上く心へつゝき喉に入頤に上り唇
へ環り上て兩目の中に系る此病ハ
少腹へ上て心に衝くいたみ大小便
通ぜん衝疝へ多く癃殘遺溺嗌乾く
督脉の別名へ長強へいふ膂へ俠み項へ
に上り肩胛の左右に當り別に太陽
ふ走り入て膂へ貫く實ならば則ハ脊強
虛ならばハ頭重これへ方別ふ取る

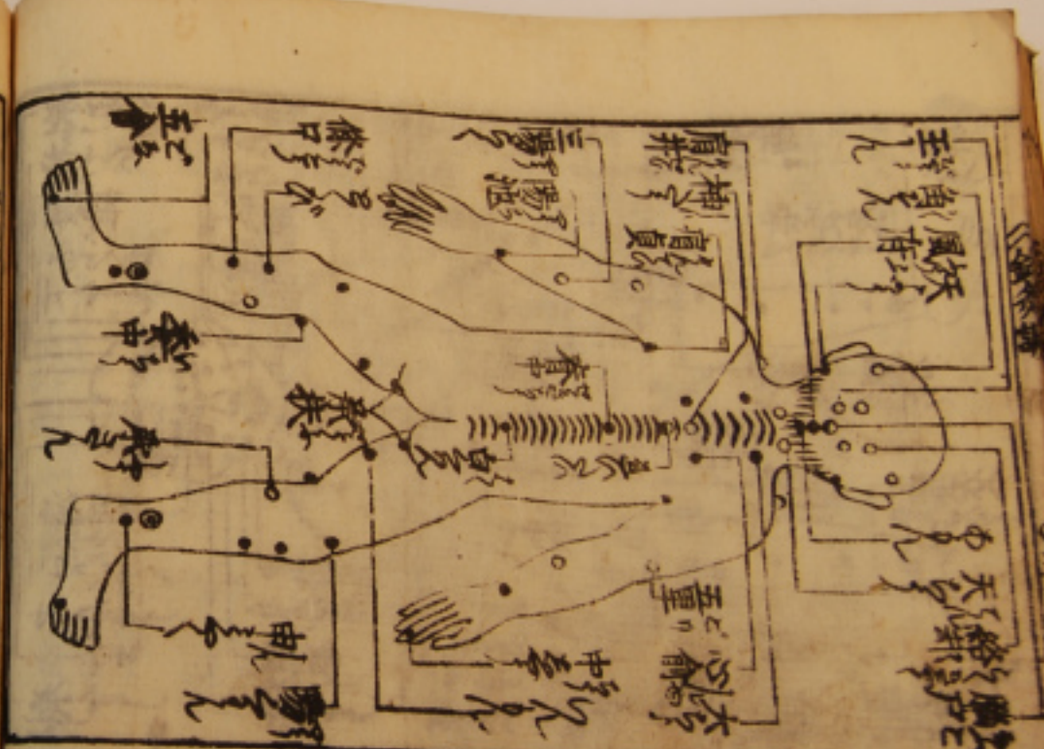
任脉ハ中極の下に起て毛際に上り
腹の裏を循めぐり関元下三寸ふのかり
喉嚨に至て陰脉の海ふ屬と又曰
胞中に起く脊の裏とめぐる經絡の
海なり其浮て外あるものハ腹をめぐ
り上行く咽喉に會をつらねて唇
口をまとふ血氣さかんなるときハ肌肉
熱を血獨り盛なるときハ毫毛を生
ず其病さかんなる男子ハ七疝女子ハ帶下
痕聚と

奇經八脉

督脉　任脉　陽蹻脉　陰蹻脉
衝脉　陽維脉　陰維脉　帶脉

禁針禁灸の圖　○ハ針　●ハ灸





禁灸の穴

承光一穴前の髪際の真中より二寸半上
風府一穴後の髪際の真中より一寸上
瘂門一穴後の髪際の直中より五分上
天柱二穴後の髪際に墨を點し両方各二寸
臨泣二穴烏精の真中のこ髪際より
五分上推へあとの外こゝへ
天牖二穴両の耳の後骨の下こゝ
頭維二穴額の角の髪際の
推こゝ骨のくれめこゝ
素髎一穴鼻柱の尖り推へ骨肉のくれめ
下関二穴耳珠の前額の竪の髪際の
頰骨の下口を閉へ穴あり
承泣二穴目より七分下下胞の

睛明 二穴 目ノ鼻ノ間ノくぼみ
攢竹 二穴 両の眉毛の頭ノ上ノ中ヘ入て
迎香 二穴 鼻の孔の外の旁へ五分ばかり
顴髎 二穴 頬骨の尖の下ノくぼみ
絲竹空 二穴 眉毛の後の陷ノ少シ中ヘ入
人迎 二穴 喉の尖骨の旁へ一寸五分づつ
のゝきて動脈のあるところあり
靈臺 一穴 背六推の下七推の上の間
脊中 一穴 十一推の下十二推の上の間
大椎 一穴 脊の第一推の下 左右へ二寸
づゝのゝきて又ハ一寸五分づつとる
心俞 二穴 五の推の下 左右へ二寸宛開く
中風半身遂さるゆへ灸を其外ハ忌
白環 二穴 廿一推の下 左右へ二寸づつ開く

尾閭 一穴 肋骨の真中のくぼみ
乳中 二穴 乳の頭のまゝ
腰髎 二穴 中脘の左右へ四寸半づつ
淵腋 二穴 直ふ脇つけの下二寸
天府 二穴 腋下三寸臂の内廉動脈の中
少商 二穴 大指の内側爪のきわへ去て一分程
少海 一穴 肘くかゞめて折目の上の尖ハ
曲池 あり下のくぼみハ少海あり
勞宮 二穴 掌の真中動脈の裏あり
髀関 二穴 膝の上一尺二寸ばかり
足三里 股の少シ外に肉の際ばかり横文中
伏兎 二穴 脛坐して膝の上に肉高く成
巨虛 二穴 脛坐して膝の上に肉高く成

陰陵泉二穴膝の下内側骨の下陰の陰
也衝と筋との間足の[illegible]
股門二穴直に立て臀肉と股の肉と
折め紋の真中より六寸下
申脉二穴外踝の下指の頭の入穴の窪
陽関二穴膝をかゝめて外の尖骨より三寸上
地五會二穴足の小指の次指の外側本節
の後此ハ多くとも三年の内に死を
禾髎二穴人中の兩傍へ五分づゝのくぼ
人中ハ鼻の下の溝あり
肩貞二穴背の肩下肘のつけ根の
周榮二穴天突の下三寸六分左右へ六寸
づゝのくぼ天突ハ結喉の下四寸あり
鼠蹊二穴手の大指の内の側本節の後

散脉のところあり
中衝二穴手の中指のうら外の側ら
爪の甲へ去ること一分ばかり
經渠二穴兩手のすゝあり口ハ脈あり
陽池二穴手のくるぶしの上腕のくぼ
あり無名指のとなりあり
隆白二穴足の大指の内側爪の甲のきへ
ハ一分ばかり去て小指の方へ外と
條口二穴三里の下五寸にあり
漏谷二穴足の内踝の上六寸太陰經也
犢鼻二穴膝眼の下あり三里より三寸上
陰市二穴膝の上三寸にあり陽明經也
委中二穴膝の内横の紋の正中動脉あり
承扶二穴尾の下股の上の紋の中

禁鍼の穴

腦戸 一穴 百會の後四寸半うしろの髮際より二寸ゑへの髮際より九寸五分此穴に灸をすれば癲癇に針をすべからざるところあり

顖 會一穴 鼻頭のうへ前の髮際より二寸上にあり

神道 二穴 脊の五椎の下背と俛ぐところ

靈墓 一穴 脊の六椎の下鍼灸ともに忌

角孫 二穴 耳の後ろ耳郭の中間のうへ角にあるところ髮のこゝろぶとに開き空あり

膻中 一穴 兩乳の正中にあり

水分 一穴 臍の上一寸にあり

神闕 一穴 臍の真中あり

會陰 一穴 前陰と肛の穴との間

横骨 二穴 臀の下四寸半左右へ一寸ずつ髮の際

氣衝 二穴 腎の下八寸左右へ四寸ずつ開く

肩井 二穴 肩の上二の骨の間陷とこの中央也

盆の大骨の後一寸半肩の中央也 指

三陽 並く推て中指の下陷の中にあり

五里 二穴 曲池の上三寸大筋の真中

喉門 二穴 喉の結喉

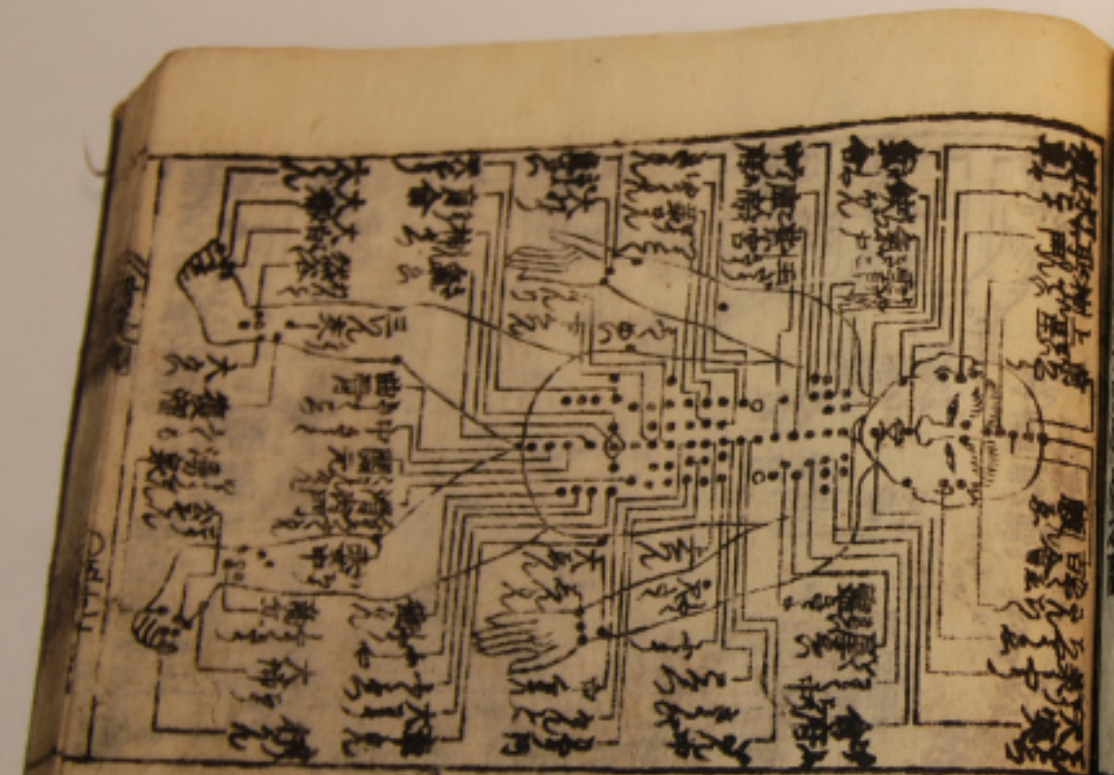
缺盆 二穴 肩の下横骨の陷中 喉の

三陽絡 二穴 臂の上腕の後四寸兩骨の間陷

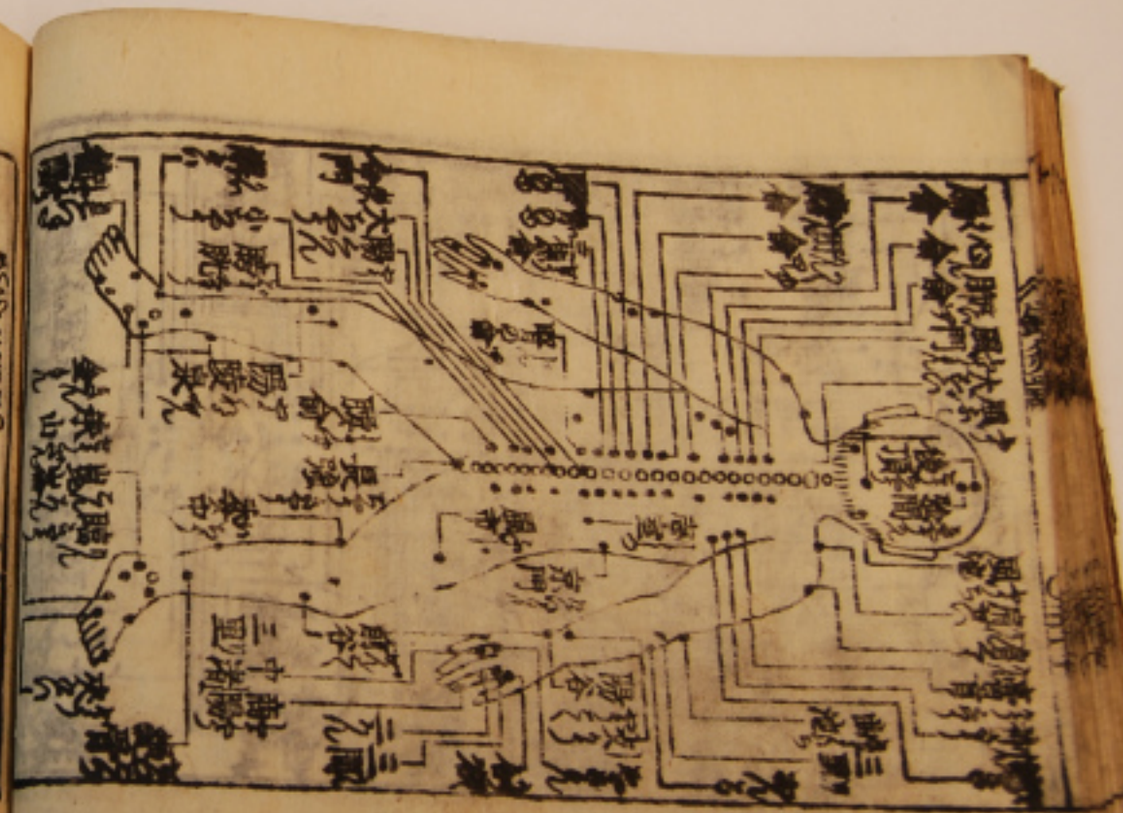
天門 二穴 膝頭の内廉の上七寸半内髮の

五處 二穴 腦戸の兩傍一寸三分つゝ三寸

承筋 二穴 腸腨の中央陷中



神庭 一穴直鼻の上髮の際五分上
巻霊 二穴目の上直に髮際に今く四寸
兼泣 二穴目の下七分直に瞳子のもとう
青霊 二穴肘の上三寸臂に挙てうる
齢部 三穴玉枕の前一寸五分
顧顔 一穴額の上をこうそりふ處
石門 一穴臍下二寸 一名八丹田女子
合谷 二穴手大指と食指との岐の間
推べ肘にこるゆる處 一名虎口女子
交 一穴臍の下一寸 妊娠
此穴うの針灸とんべ子と孕んべ
尾 一穴肋骨の真中のこう



○神庭　一穴　額の真中前の髮際より五分上にあり灸三壯あるべし二七壯

狂亂でんでん驚風天吊白目反張舌ゞ

ゝ一人事をもつて眩暈つくう寒熱瘧

涙止ず目淚出驚悸怔忡不寐嗜睡

喘渴をもつて治す

禁針の穴あり

○上星　一穴　一の名は神堂　神庭の後五分

髮際に入ること二寸脳中針三四分留ること

六呼灸五壯　頭痛面赤〻腫皮ゝれ

鼻中に息肉いで鼻ずさぐり痰喘汗

不出めまいの目ぐりのくるくるして遠く

とあるいは吐血して多くは治せず

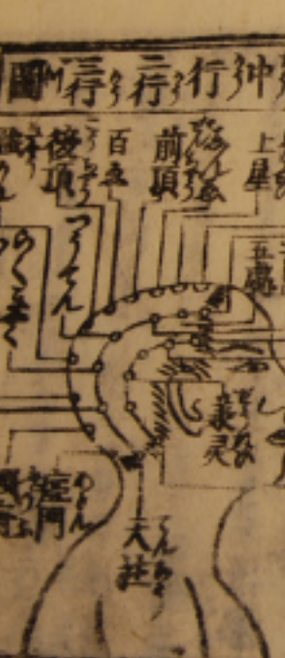
○顖會　一穴　上星の後へ一寸髮際

寸上灸二三壯あるべし二七壯 鍼灸業
穴あり腦漏 [illegible] 酒食とゝのゝ
腦痛く破るゝごとく風頭眩顔のゝ
面あるく [illegible] 腫れて [illegible]
膚と生じ鼻塞て香臭を聞むこと
上し皆く人と先さるゝ治を
○前頂一穴 額會の後へ二寸半髮の髮あ
際より三寸半上骨の間陷の中 灸三壯
三七壯鍼一分あるべし四分 頭風面赤く
くれ水腫でんうん [illegible]
[illegible]くれやくむこをつくさぐる
○百會一穴一名三陽五會 前頂の後へ
一名巔上一名天滿
二寸五分前の髮のこゝへ [illegible] 五寸
上 [illegible] 毛の中にあり兩の耳の尖の直

頭の真中 [illegible] 鍼二分 灸七壯
[illegible] 頭風中風言語謇澁
口噤 半身 [illegible] 心煩 [illegible] 驚悸
健忘痰癡脱肛風癇角弓反張 [illegible]
多く哭て語言擇び發る [illegible] 入
沫を吐き汗出乾嘔 酒を飲む 面
赤く腦重く鼻 [illegible] 頭つゝ目
[illegible] 食 味 [illegible] 主る百病を治す
○後頂一穴一の名交衝百會の後へ一寸
五分前の髮際 [illegible] 六寸半 灸五壯
鍼二分三分四分 項強り額上痛 [illegible]
風寒 [illegible] 風眩目 [illegible] 歷節 [illegible] 汗出狂
走不寐 [illegible] 發 [illegible] 偏頭痛 [illegible]
○強間一穴一の名大杼 後頂の後へ一寸半

灸七壯五壯針二分　頭痛めまひ風を
のぞく痛み心煩悶嘔吐項こり肩
こと得ざるとつつさどる
○風府一穴一名吉本　強間の後二寸五分
後の髪際こより一寸　針三四分留ること
三呼　禁灸　中風舌縮り語られず
振寒汗出く身重しゝ惑寒つこう項
強て回顧しこと得ず偏風半身ふかれ
こゝろ咽喉これ痛み傷寒狂走目
妄に視ると治を頭の百病黄疸と言ふ
傷寒つう惡風發熱身疼む者或ハ
耳聾脇痛嘔して口苦く頭痛寒熱
往來する者並ふ風池風府より刺べし
○瘂門一穴一名吉横一名ハ瘖門

風府の後五分ふかく針四分二分留る
こと三呼して瀉し五吸ふして瀉し灸
を更ふ針と留めてこれと取る　灸禁
光多り舌急して語られず重ふして
の陽熱氣盛ひて鼻衄止さる治を



○曲差二穴　神庭の傍ら左右へ一寸半
ゝ前の髮際こより五分上に左右へ針二分
灸三壯　月明　鼻衄　鼻塞　心煩

頭項いたみ痛さ腫るると治す
○五處二穴曲差より後へ五分 灸三五壯 針三分留る一七呼 脊こゝろこと反張てんかん頭風めまいのとつきさゝる
○承光二穴曲差の後へ二寸 針灸共に
○通天二穴曲差より後へ三寸半 百會の左右へ一寸半つゝ〻 灸三壯 針三分留ること七呼 鼻塞 清涕と出し頭ふらつき項いたむと主どる
○絡却二穴曲差の後へ五寸 針三分留ること五呼 灸三壯 頭ふらつき耳鳴り腹ごり目の内障と生ずると主どる
○玉枕二穴曲差の後へ八寸半 頭の中行ごり左右へ一寸五分づゝ開きて 灸三壯 針禁沉あり 目眩目のくらむ 頭項いたむ 鼻塞り香臭と聞ざると治す
○天柱二穴項の後の髮際の中行ごり左右へ一寸三分づゝ開きて大筋の外廉脈の中 針二分五分留ること三呼 灸三壯 頭風 鼻香臭と聞と頭ふらつき腦痛重く項いたむ項強と主どる
○臨泣二穴目の眞中の行の上髮際五分上を多くら神庭の左右へ二寸三分半づゝ開く 針二分留ること五呼 禁灸 目眩き月病き月病く白翳と生じ惡寒 鼻塞 傷風てんかん反視 卒中風 月水通ぜず
○目窓二穴臨泣の後へ一寸 針三分 灸五壯 一切の眼病 頭面浮腫 寒慄

○正營二穴目窓の後へ一寸 鍼三分 灸五壯 目眩 頭項くるく痛み 齒齦痛 灸五壯

○承靈穴正營の後へ一寸半 灸五壯

禁鍼 頭いたみ 惡寒 惡風 喘息

○腦空二穴承靈の後へ一寸五分 灸三壯

鍼四五分 氣と得く漏を 勞熱 羸瘦 麻身熱 一項強り 頭重く痛 目眩くを

○風池二穴腦空の後へ耳の下面の通り

項の竪の髮際の陷の中をかゝら 難々

耳の中へ應る處 鍼三四分 ゆくゆくの七分留ること二呼 灸七壯 傷寒 々邪ろ

溫病 汗出て目眩きあるひは偏正の

頭痛 瘧 瘧頸項 ゆくゆく痛 主る

○天牖二穴風池の後へ項の竪の髮の

くゝぎの穴門の兩傍 鍼灸ともに禁

○本神二穴神庭の左右へ各三寸づゝ

前の髮際へ五分上 鍼三分 灸七壯

驚風てんかん 涎沫を吐き 頭項

強りいたみ目眩くらくする

○頭維二穴額の角の髮際へ入ること

分 神庭の左右へ各四寸五分 鍼五分

三分 禁灸 頭痛 目眩

風腸を見て明かるくさるを治す

○額厭に灸　額の角より寸を一ト壓る

髮際頭維の光より少一ト寸の敵め

灸三壯　針七分留る　七呼深く刺す

○耳聾　耳の前の下の凹の中　灸三壯　針二三分留る

○耳鳴　耳の前の下の凹の中　灸三壯　針二三分留る

○耳聾風　こんこん手洗いくさ　耳鳴目不明

○懸顱　額の大角の下　頷厭の下　灸三壯　針二三分留る

○懸聲　えんろの少一ト米咬の下

○懸聲　耳の上の少一ト前曲髮の中

針三分灸三壯　ひいも壯　頷腫痛

目禁めまいと能を頸項かりくるくる

得と腦の兩角　耳の前で目に引と治す

○耳聾　耳の上髮際を竪に入くく一

寸五分少一二分　前へ白めて

針三分灸三壯　發熱腫いさ　頭腦痛

○天衝　耳の後の通りくろさを竪に入

と二寸上と三分　前へ白めふ

灸三壯七壯　針三分　頭疾善驚

○頭痛　牙齦腫いさ　ひとつくさ

○曲髮　耳の上の少一前曲髮の中

針三分灸三壯　ひいも壯　頷腫痛

禁めまいと能を頸項かりくるくる

得と腦の兩角　耳の前で目に引と治す

○耳聾　耳の上髮際を竪に入くく一

寸五分少一二分　前へ白めて

針三分灸三壯　發熱腫いさ　頭腦痛

○天衝　耳の後の通りくろさを竪に入

と二寸上と三分　前へ白めふ

灸三壯七壯　針三分　頭疾善驚

○頭痛　牙齦腫いさ　ひとつくさ

額頬いさこ員の内畜赤しと無ひと主
○承漿一穴下唇の赤肉の火下陰中
口と開く点を針三分気と得て即
留ること三四徐々に気と得て止
此穴に灸すること一日に七壯づつ七日
迄四十九壯灸るなり然るときは毎月
つゞけて灸すること勿れ只一日に七壯
灸して八四五日を間と置て又七壯
灸を日数と積て四十九壯迄至れば
血脉通じ病直ちに愈る　偏風
半身遂に口眼喎斜面もれ消渇口
乾痔蝕瘡と生じ暴に瘠して言と
能ず男子の七所女子の複裏と主る
○廉泉一穴一名舌本結喉の上四寸推

で舌の根へ應ろ処即て點を灸三壯
針三分留ること七呼氣と得て渇を
咳嗽上氣喘息舌下腫口瘡と治す
○攢竹二穴兩眉の頭の毛の中へ入補
の中禁灸　針一分目ろくく涙出眼赤
いくく瞳ろく臉瞤動し頰の
風眩てんかん狂乱鬼魅をつかさどる
○睛明二穴目の内眥一分を外目じ
鼻しの間隔く針一分禁灸　目遠く
見ること能ず悪風涙出弩肉省目と治す
○陽白二穴瞳子の通り眉毛の上毛際
一寸上針三分灸三壯瞳子痒く
痛み視目眩ち眼昏をつかさどる
○聚竹二穴耳の前ふ圓くのつくの尖り

瘧と珠子といふ瘧に小豆と容ろ程
の腫こゝろの所鍼三分灸三壯　癲癇
心腹つゝ音不出耳聾耳鳴耳塞へ治
○頰車二穴耳の下曲頰の骨の端とに
前に口と開と腫こゝろ口と開へ骨蓋ふ
鍼二四分灸二壯　中風牙ゝつめ
口噤て上ゝ下ゝ方痛頰腫眼口噤鍼
○耳門二穴耳の前珠子の上起る肉の
鍼ゝ処腫の中鍼三分　禁灸　耳鳴
耳聾耳瘡齒痛口唇ゆがむと治
○聽宮二穴耳の後への下角腫この
中へ推へ耳の中へ應へいゝむ処灸三壯
より七壯　鍼三分七分　耳聾
耳鳴口眼ゆがむ頰ゝ治

頭面耳迴の穴圖

○地倉二穴兩の口吻の傍ら唇の赤肉より
四分ゝ去て動脉のゝ処　鍼三分半
ゝ五呼氣と得て即ち瀉　灸十四
壯病重きゝ四十九壯　丈と小くもべ
大ゝ丸ゝ反て口ゆがむ若嚼ぐ茶藥に灸
四十九壯ゝ丸ゝ中風半身
ゝ口歪ゝ目閉昏ゝ音出と飲食

收らざるとつくさざる
○聽會穴耳の前珠子の下少し前
陷の中口と開きて陷む処鍼三分或い
七分留ること三呼氣を得て即ち瀉を
灸三壯又毎日五壯づゝ四日の間灸して
十日ばかり間を置て又五壯灸を耳鳴
耳聾牙車脫離上歯ぐきの中風口歪
手足の多くはざるとつくさざる
○大迎二穴耳の下曲りくの額の角よう
一寸三分前に動脈あり骨のくぼみあり足を
動せばあがくつがのあり也灸三壯鍼三
分留ること七呼口噤み開かず頰腫牙疼
心腹の部
○天突一穴頸の結喉の下四寸死々
中灸三壯五壯鍼一分五分留ること三呼
氣を得て瀉を若鍼を直ぐに下し手を
低くしきい五臟の氣傷ぶて短命なり
面熱上氣逆氣暴に喘咽腫
咽喉声破喉出膿血を咯き
痰を生じ膿血を咯き
痛して言ふと能はず寒熱頸腫哮喘喉
中鳴胸中魚鯁の在るごとく舌の下
急にはしと背に相引て痛脹嘔吐を
○璇璣一穴天突の下一寸灸五壯鍼三分
胸の骨痛み頻に喉痺咽腫
○膻中一穴兩乳の間膈の真中灸七壯
五十壯禁鍼中氣上氣短氣
逆噎膈嘔吐不食嗜促咳嗽胸塞
心胸いたみ肺癰唾膿乳汁少きを治す

○巨闕一穴肋骨の真中のくぼみ敷骨
より二寸下鍼六分留ること七呼氣を得
く即ち瀉を多七壯ほどすべし
上氣咳逆胸つまり短氣背のいたみ心痛
痰飲霍乱吐逆驚悸怔忡腹脹暴満
いたみ心恍不食傷寒心煩嘔逆發狂黄
疸瘧痢小腹脹戸厥妊婦子心へ衝くら
昏悶をうしなうを主る
○上脘一穴巨闕の下一寸臍の上五寸鍼
八分先補後瀉を風痢熱病は先瀉
後補して即灸日に十四壯ほど
百壯ほどのうち未愈ざるを倍をべし
腹鳴痛み食化せず霍乱吐利腹いたみ
身熱汗出て鬱冒嘔吐不食腹脹り
氣滿心悸胸騰嘔血痰涎多く或
積黄疸虚労吐血とうくさぐろ
○中脘一穴 上脘の下一寸臍の上四寸
鍼一寸二分ほどの八分留ること七呼瀉
五吸ほどくく鍼を出を多日に十四壯ほど
三四百壯まで 腸澼翻胃不食嘔血
腹脹中惡心腹いたみ 瘧疾痢氣積聚
傷寒疫病温疫先腹いたみ先瀉後霍
乱洩出を知ず穿吞俛き仰ぎ
○建里二穴中脘の下一寸臍の上二寸灸
五壯鍼一寸二分ほどの八五分留ること十
呼腹脹身腫心痛不食を治を
○下脘一穴建里の下一寸臍の上三寸
臍下に動氣上り腹堅く胃脹腹

りくこゝ六府の氣寒ゝ穀轉化ゝを熱
痩小便赤く糞閉不食を治ゝと
○水分一穴下脘の下一寸臍の上二寸
蓄五分留ゝ三呼水腫ゝ刺ゝ赤つき
て即死を水病ゝ灸四十九壯ゝ
百壯ゝ水腫腹滿小便
通ゝ轉筋不食臍腹ゝ心ゝ沖き
腰背こゝり腸鳴り鼻衄小兒驚癇を
○神闕一穴臍の真中あり禁針也
○中脘の中惡き瘍を生じて死を灸を
輕き病ゝ張ゝをべし
病ゝ塩ゝ味噌を布てをべし 中風
卒倒ゝ甦らゝ久く冷く泄痢止ゝ水
腫鼓脹腸鳴り臍腹ゝ小兒驚癇風

てんん反張脫肛を治を卒中風甦らざる
ゝ灸百壯をれば甦ゝをれをゝ甦ざる
又百壯をへし
○陰交一穴臍の下一寸針八分氣を得
て即瀉を瀉ゝて後ゝ補ゝ灸ゝ灸ゝ
一壯ゝ百壯で婦人ゝ忌心腹ゝ
陰中ゝ引て小便通ゝ赤氣陰汗濕
ゝく腰膝ゝ臍下熱ゝ臭血
婦人の崩漏月水ゝ帶下產ゝ悪露
止ゝ臍の繞り冷痛ゝ陰痒く積塊小
兒の陰癢を治を此穴ゝ灸針をれば
一生子を孕ずず
○氣海一穴臍の下一寸半灸七壯針入
分氣を得て瀉を瀉ゝて後ゝ補ゝ

傷寒湯水と多飲して腹脹氣喘さ心
の下痛み冷病面赤く真氣不足し
一切の氣病久く差ず痩羸四支力無く
積聚ぜんき血塊臍の下冷氣いくさ心煩
中惡泄瀉大小便通ぜず崩漏帯下月
水調ぜず産後惡露止ず腎臓痛み閉著
腰いたみ小兒の遺尿を治す
○石門　一の名は丹田　臍の下二寸　灸七壯より
三百壯までで鍼五六分留ること七呼或は
八分留ること三呼氣を得て即ち瀉す
婦人此穴を鍼灸すれば生懷妊せず
傷寒小便赤く通ぜず泄瀉止ず血淋
吐血積塊ぜんき腹いたく不食水腫血
塊血崩

○関元　一穴　臍の下三寸　灸七壯より三
百壯までで鍼一寸二分留ること七呼或は
八分留ること三呼瀉五吸妊婦に禁鍼
精冷虚乏く臍中絞いたみ寒氣腹に入
くいたみ元氣勞損積聚風眩つみ浅
利小便通ぜず淋病失精白濁溺血下
血崩漏月水通ぜず帯下
○中極　一穴　臍の下四寸　灸五壯より
百壯までで鍼六分留ること十呼氣を
得て即ち瀉す　積塊心に上り元氣
虚寒陽氣虚惡水腫小便頻數遺
精ぜんご惡露行らず脚衣下らず月
経調ず子門腫いたみ　厥病恍惚ア厥
飲食を食ずこと能ず子宮婦人

四度鍼をすれば子さあり又豆腐又大のむ
○尾骨一穴腎の下五寸横骨の上三
寸の間中　灸七壯　ようり四十九壯
針二寸一寸あるひは六分留ること七呼
五藏虛弱冷氣ゑ小腹惡寒　小便
通ぜず淋瀝遺精赤白帶下を治す
○雲門　二穴　結喉の下七寸　左右へ六寸
脇中　針三分　灸五壯　傷寒手足熱
兼のやうり心胸をつき脇へうり背にそうり
く惡く肘をわくるをしと能ぶ喉逆上氣
經氣壅塞を治す
○中府　二穴　雲門の下一寸　灸五壯　針三分
腹脹手足しびれ食下らず喘氣胸塞肩
背こり嘔吐欬逆上氣肺系ハそうり

肺の寒熱胸ふさがり脹滿熱一欬唾膿
の多くなる　淋風汗出面浮少氣しとゝ臥ることを
得ず　傷寒胸中熱一直死とつたへる
○氣舍　二穴　天突の左右の左右へ各一寸五分
灸五壯　針三分　上氣肩腫一氣ゑ
結ぶどこうの咽腫飲食下らずあやそう
奉　灸瘡をつくるべし
○缺盆　二穴　天突の左右へ各四寸　鎖骨の下
肩骨の上廉くぼみの中　灸三壯　針二分
留ること七呼　ようく刺べし　水腫喘息
痰嗽喘急ゑ汗出寒熱或金瘡
中腫胸ふさがり傷寒胸の中熱をゑ治す
○幽門　二穴　臍の上六寸巨闕の左右へ
各五分　日一日五分づつのくく針一寸　灸五壯

水腹脹滿羨涕を嘔吐し　いとうれひ
目赤いのさびと治を
○通谷二穴幽門の下一寸上脘の左右へ
五分灸　鍼五分灸三五壯　口噤こと不言
心慌目赤いさこと　痰欬嘔吐多くして治
○陰都二穴通谷の下一寸鍼三分灸三壯
心滿逆氣腸鳴腹脹目赤いさびと治を
○石關二穴ゐんこの下一寸鍼一寸灸三壯
嘔吐多くして腹いさこと氣滯大小便通ぜず
心下堅滿脊強して目赤く女の血塊と治
○不容二穴幽門の傍ら掛去ること一寸五分
灸三壯五壯　鍼五分八分腹こと痛こと
腹中肩脇いさこと心背いさこと痛ふ

引て痛こと嘔噦加痰不食腹鳴嘔吐
○承滿二穴ふくろうの下一寸上脘の傍
各二寸　鍼三分灸三壯五壯　腸鳴腹脹
氣噦逆飲食下らず肩息吐血と
○梁門二穴承滿の下一寸鍼二分灸五壯
腸下積氣不食滑泄完穀化ざること多治を
○關門二穴梁門の下一寸鍼八分灸五壯
噦滿積氣腸鳴いさこと泄利不食腹中
氣　腑と來ひとうり痛こと
痰喘振寒こと遺溺こと治を
○太乙二穴關門の下一寸灸五壯　鍼入
分　心煩こと狂亂舌と出こと治を
○滑肉門二穴太乙の下一寸灸五壯　鍼入
分　痰在嘔逆吐血重舌こと治を

五壯 教道腰冷脚ゆくさ 泄瀉心煩を治す
○章門 二穴脇の上二寸兩旁へ九すづく
側臥てこうへの足とかゝめ下の足とのべく
肘の尖のゆくさる処の肋の端 鍼八分入
分留ること八呼 灸百壯五百壯ことく
腰鳴食化ざる腹脇のさこ 鍼ご得ど
煩悶口乾き不食噦息心煩食傷嘔吐
腰脊冷のさく白濁 寒熱をそく下の腰腿
脊強り 肩臂拳らへ四支懶惰 黄疸
痰善おそれ水氣厥逆を治す
○京門 二穴直に章門の後十一枚めの肋
骨の先に〻へこゝある陷こ俗よ後章門
といふ処あり 灸三壯鍼三分留ること七呼
腰脇のさこ痛りさこを治す

肩背の部

○肩井 二穴肩の上陷の中 缺盆の大骨
の後一寸半肩の中央多り指〻三次て
推てゝる中指の下陷の中 灸五壯鍼
五分ゝりふく刺へ悶倒ゝる悶倒ゝ
三重ふ鍼して補へ中風氣塞り 淋
上て語られ腎虚して腰の 氣短
氣逆氣風勞樸損臂尾いる 頭項痛
ゝ得ゝ五勞七傷婦人難産
腹胎の後手足冷弱ゝ者鍼して則り
日に灸ゝこと七壯 ゝ二百壯ゝて
○肩髃 二穴肩のゝ上肩骨ゝ端骨の
つゝのめ臂ゝ伸のくれゝ肩端
穴ある処 鍼八分留ること二呼瀉

〇五吸或ハ一寸或ハ六分留ること六壯
灸七壯二七壯〇中風四十九壯お
ゆくをへうゝ風痺筋骨力なくハ灸せよ
〇肩臂の熱氣と瀉を中風手足う
ごかぬ肩臂の熱氣と瀉を中風手足う
ごかぬ〇肩臂の熱氣と瀉を中風手足う
ごかぬ〇肩臂の熱氣と瀉を中風手足う
ごかぬ〇

熱し月經通ぜざる帶下を治す
○長强一穴 脊の骶骨の端俗に龜の尾
と云處なり 針二分留むること七呼 灸五
壯あるべし 三十壯 二百壯すべし 是痔の
根本なり 腸風下血久痔腰背痛む
在乱大小便しぶる頭重く洞泄淋病小
兒癲癇隱り驚風癲癇瘈疭血驚恐
視と正しからざるを主る 脊强ること
と潟し頭腫る者にこれを灸すべし
○風門 二穴 背の三推の下兩旁へ一寸五
分 針五分留むること七呼 灸五壯
癰疽身熱し氣を短く欬逆胸背痛む
嘔吐傷寒頭項强り目瞑り胸熱を治す
○肺俞 二穴 三推の下兩旁へ一寸五分

針三分五分留むること七呼 氣を得て
瀉を刺す 肺に中れば欬して
三日ならず死す 灸百壯 五十壯 勞瘵口舌
乾き上氣腰脊强むること寒熱氣短喘
滿虛煩肺痿咳嗽肉ゆること皮膚痠吐
不食狂走り背僂を治す 太陽と少陽
と併病頭項强むること或は眩冒心下痞
硬し太陽の經の肺俞肝俞を刺べし
○厥陰俞 二穴 四推の下左右へ一寸五分
針三分灸七壯 欬逆牙痛悲むること胸滿
嘔吐煩悶を主る 即ち心包絡の俞なり
○心俞 二穴 五推の下左右へ一寸五分
針三分留むること七呼 氣を得て即瀉を
刺て心に中れば 即死 禁灸

千金ニ曰中風心急ニハ心俞ヘ灸スベシ

ト百壯 中風冒瘋てんかん狂走ヘ主ル

○鬲俞二穴七推の下兩旁へ去ること一寸

五分ヅヽ灸三壯 壯多ヽ灸シテ心中

ヨ微ク悸惕スル鍼三分留ること七呼

若刺て腦に中ル人一歳ヲ過ずして

死ス心痛周痺吐食飜胃骨蒸手足

急惜ヽ則ちとこのく筋痺熱逆嘔吐

兩胃寒疼飲食下らず熱病汗出て

身ひやく常に濡ヽして不食身のさゝ脇

腹滿自汗ある也と治ス

○肝俞二穴九推の下兩方へ相去ること各一

寸五分灸三壯七壯 鍼三分留ること六呼

刺て肝に中ル人熱して五日に死ス

怒リ黄疸熱病の後目ヽく淚の出る目

眩氣短く熱血目上視熱逆口乾き寒

而筋寒へ熱痙筋急ヨ相引轉筋腰ヨ

入リ熱して胸脇ヨ引て痛ミ反折り上

視し驚狂ヽ多ク唾血短氣積聚ヲ治

○膽俞二穴十推の下兩旁各一寸五分づヽ

鍼三分五分留ること七呼灸三壯五壯

刺く膽ヨ中ル人一日に死ス頭痛振寒

汗出て腋下腫心腹脹口苦く舌かわく

咽痛乾く嘔吐骨蒸勞熱不食目黄ヲ治

四花の上三穴ハ鬲俞下二穴ハ膽俞ヨリ

○脾俞二穴十一推の下兩旁へ相去ること一

寸五分ヅヽ鍼三分留ること七呼灸三壯五壯

刺く脾に中ル人呑酸して五日に死ス

多食して身痩せ嘔吐し汗と吐さくんべる
積聚脇下にあり浅利痰癖寒熱水腫
氣脹脊に引くいたみ黄疸不食を治
○胃俞二穴十二椎の下両旁へ一寸五分
て鍼三分留むること七呼灸三壯七壯
中濕霍乱胃脘腹脹て鳴り飜胃嘔
吐不食多食して痩羸目暗く腹いたみ
ひひりと支滿脊いたみ筋牽を治を
○三焦俞二穴十三椎の下左右へ一寸五分
鍼三分五分留むること七呼灸三壯五壯
積聚腹滿不食羸瘦傷寒頭痛吐逆
肩背腰強り小便渋り泄注腹脹腸
鳴り目眩頭痛を治を
○腎俞二穴脊の十四椎の下左右へ一寸
五分て鍼三分留むること六呼灸三壯鍼三分留むること
七呼り刺て腎に中れば走て六日に
死を五労七傷虚して羸瘦耳聾を
下部冷淋濁目暗く溺血遺精腰膝
脚いたみ消渴身熱振寒多食して
て痩面黄黑く腸鳴四肢ひたく洞
泄食化せず身浮腫るを治を
○大腸俞二穴十六椎の下左右へ一寸五
分て灸三壯鍼三分留むること六呼中
脊強り腰痛腰いたみ腸鳴り多
食して身痩大小便結浅利白淋腸澼
○小腸俞二穴十八椎の下左右へ一寸五分
て灸三壯鍼三分留むること六呼中暑小
便赤く淋瀝遺溺小腹脹滿疝痛

[illegible]病腹血五色[illegible]くれ五痔つゝ[illegible]
[illegible]消渴口かわき常[illegible]
[illegible]
○膀胱俞二穴十九推の下兩旁へ一寸五
分つゝ灸三壯七壯鍼三分留ること六呼
風労脊強り小便赤黄[illegible]
氣[illegible]寒拘急腹滿大便[illegible]
ゆくこゝ脚膝力なく女子[illegible]
○膏肓俞二穴四推の下五の推の上[illegible]
脊中と左右へ相去ること各三寸に傳ふ脾
骨のきわふ一指と側置[illegible]
後ふ氣海丹田關元中極四穴の内一穴
と足の三里[illegible]灸して火氣と引下し
[illegible]灸百壯五百壯までも虚損傳尸
[illegible]

氣發狂と主る嘔噦心中妨悶項背と
[illegible]り目病氣病諸病治ずべしとのたまへ
○神堂二穴五推の下左右へ三寸づゝ開
鍼三分五分灸五壯三壯腰背強り惡
寒發熱胸腹滿氣逆上攻時[illegible]
○意舍二穴六推の下左右へ三寸づゝ開
肩膊の内ゝ鍼三分留ること七呼あるい
六分留ること三呼瀉五吸灸五壯
百壯して大風汗出て労損卧[illegible]
[illegible]疾背[illegible]氣滿腹脹氣[illegible]
[illegible]腰背痛[illegible]
膊内廉[illegible]食時頭痛五心熱[illegible]
○高肓二穴七推の下左右へ三寸づゝ胸
の中鍼五分灸三壯背痛[illegible]

り不食ゑくり涎唾多く胸しゝへ
大便調ゝ小便黄おゝく治を
○魂門二穴九推の下左右へ三すづ
針五分灸三壯背こりぶん引のさこ戸
歟腹鳴大小便そのゝゝと治を
○意舎二穴十一推の下左右へ三すづ
針五分灸五十壯百壯腹滿泄瀉小便
赤黄嘔吐不食清湯目黄おゝと治を
○盲門二穴十二推の下左右へ三すづ
針五分灸二壯あゝひゝ二十壯心下ゝゝ
大便ゝゝ婦人の乳病と治を
○志室二穴十四推の下左右へ三すづ
針五分灸三壯七壯陰腫いゝゝ腰背と
りすゝゝ食化と遺精淋病吐逆兩乃
ゝゝ挛りゝゝ霍乱と治を
○胞肓二穴十九推の下左右へ三すづ
針五分灸三十五壯五十壯腰背ゝゝ
腹食化と淋病大小便通ぜざを治
○秩邊二穴二十推の下左右へ三すづ針
三分五分灸三壯五壯小便赤腰痛と治

肘手の部

○極泉二穴肘ゝ脇ゝ下付れば肘と肩
二所ゝ折る義文のゝゝうすゝ胸の方へ
推入てゝゝ筋肉の間動脉のある処也
針三分灸七壯肘手足冷ゝゝ心脇い
ゝゝ煩と乾嘔ゝ悲ゝ多く發ゝゝと治を
○天府二穴極泉の下三寸新骨の間ゝ動
脉ある処ゝり下の人迎と目めてゝ

禁灸鍼四分留七呼或八三呼
卒中風邪氣殭尸惡症鬼語あるを治
○伏白二穴天府の下二寸動脉の處也
鍼三分灸五壯心痛短氣乾嘔心煩
○尺澤二穴肘の中屈伸する横文の中
中指と無名指との間の通り推て筋
骨の解め動脉の処鍼灸ともに肘の中
の青筋の中ならんやうに長鍼三分留
と三呼肩背のこと中風小便數く癒
く樂と寒熱風痺臑肘挛りこゝの上
氣嘔吐口舌ゆがき欬嗽ゆこゝの手足こゝ
わるい腫心痛心煩労熱上氣腰背強
痛と肺の積小兒慢ものを治
○魚際二穴手大指本節の後へ内側

り横文の中すぢの脉の上陰あり鍼一分
留ること三呼禁灸酒病惡寒虛熱舌
肺黄づゝう欬嗽胸腹ゆゝく自收不食
肘挛り胃乾尻ゆこゝ溺血嘔血心痛乳癰
痛と

○孔最二穴尺澤と同的に魚際
鍼三分灸五壯熱病汗出て欬逆肘痛
手握られて吐血咽腫声出ざると治と
○列缺二穴腕の側上八寸五分然谷

すと以て知るべし左とすべきなれば病人の右の
食指と左の大指と食指との間ふ組入
く右の食指の頭のあたる処と穴とを
と取るこの如し鍼二三分留ること三呼
五吸灸三壯七壯四十九壯すべし
嗽口眼ゆがみ手肘力なく半身不遂
寒熱おこり咳嗽唇ゆがみ健忘溺ふ
血ばかり精れ陰痛小便熱
痢癰腫肩痺胸脇冷戸厥手足腫ること
○太淵三穴掌の後横紋中魚際と寸口
との間灸三壯鍼一分留ること三呼
胸痺逆氣嘔吐咳嗽不寐目痛青く或は
白翳赤筋と生じ轉筋作寒作熱
掌中熱鉄盆の中と胸肩背臂い

寒慄咳血吐血振寒咽乾狂言
溺の色変り遺失度なくなると治す
○少商二穴手大指の内側ら小指の方へ外大指の方へ内
爪の生ぎわと一分ばかり去る鍼一分留ること三呼瀉は五吸禁灸
○商陽二穴手食指の内側ら爪甲の
角と一分ばかり去る鍼一分留ること一呼灸
三壯胸中に氣ふさがり咽乾おこり熱病
汗出て耳鳴ること聾を領れ歯
肩背鉄盆のごとく目青くなりて灸三壯
目左右とも左に
○二間二穴手の食指の本節の前の

内側ら拳とゆびれん食指の内側ら第一節の
前ゆ折目出るもりめの頭ら陷の中也
針三分留ること六呼灸三壯喉痺頷腫
肩背臂のさゝ齒のさゝ目黄ゝ〻〻〻
口ゆゞ〻〻不食傷寒の水結と汗を
○三間二穴 手食指の第一節の後内側
拳とゆびりて食指の内側ら第一節の
後ふもりめのうゝら脂の中 針三分
留ること三呼灸三壯 こゝの下齒と虫
喰ゝさゝ胸腹つゝ腸鳴泄瀉かん疝つ
おこり唇焦て口乾き目背いゝさゝ舌と出
氣喘不食傷寒氣挽身冷結胸と
○合谷二穴 手大指と食指しゝの岐骨の
間と脂中推て射ゆこるゝ処 灸三壯

針三分留ること六呼 傷寒太ゝ渴ゝさ發
熱惡寒ごう背強り汗多く無熱瘧り
こゝゆら目ゝく虫齒耳聾喉痺面これ
言と能ず口禁ゝ中風ゝさゆゝ瘧疥
偏正のごう腰背のゝさゝ小兒乳癰と治
○陽谿二穴 腕中の上側兩筋の間陷の中
直に合谷の通の腕こび屈伸ゝる節ゆり
狂言ゝて笑ひ瘧疾ごう胸滿息ゆゞ
寒咳こうの耳鳴ゝさゝ肘痛疥癬と
○偏歷二穴 陽谿の上の三すゝのう此ゝ
以下の穴ハ陽谿と曲池と目的ゆゝて
ゝる針三分留ること七呼灸三壯 肩肘
腕ゝびる痛ゝ〻〻吸血瘧てんうこうの耳
ゆり小便ゝびのさと泄ゝ

○溫溜二穴直に偏歷の上二寸跳のしろ
五寸針二分灸三壯　上氣めまひこんん
風邪手足くれ肘痛こゝの口舌痛こゝを治す
○下廉二穴偏歷のこゝより曲池の下四寸
針五分留ること二呼　灸三壯泄瀉勞察
小腹つゝ大小便に血まじる中風洗風冷
ゝひと顏色のしゝくんへき腹脇のゝ
食こゝろれいと乳癰ゝ治す
○上廉二穴曲池の下三寸針五分灸五
壯小便こゝより黃赤く胸のゝこゝ中風
半身ゝゝゝ腎臟ひゝ手足ゝゝ歸急
腦風ゝつゝゝ治す
○手三里二穴曲池の下二寸推い指の四
方の內高く起る處針二分灸三壯中風

手足ゝゝ看亂攣失音出ゝ治す
○曲池二穴肘ゝかゝめ手先ゝ胸ふあてゝ
肘の橫文の上方のゝゝ曲る骨の間ゝ
針七分氣ゝ得て瀉ゝ後にゝれゝ補ゝ或
い五分留ること七呼　灸三壯又日に七壯
ゝ二百壯ゝのゝゝ且停ゝゝ余日ゝ
又七壯　中風半身ゝゝゝ手肘ゝゝ風
ゝゝゝ胸のゝれ肘痠力ゝ傷寒
の餘熱てんん身痛ゝゝ虫のゝゝ
痲疹婦人經脉ゝゝゝ治す
○五里二穴曲池の上三寸大筋の眞中
にゝり肩髃肩の前に目的ゝゝ禁針
灸十壯　驚風吐血肘ゝゝ上氣心滿

身黄こるいとき〻つゝさゝる
○臂臑二穴直に曲池の上七寸肩髃と
目の間にゝる筋骨の間こゞゝの中灸百壯
七壯二百壯ゝ至る針いゝ治をゝ若針
せゞゝ三分ゝう深くこゝゝす肘ゝ
力なく肘痛るいとき頸項強ると治を
○少海二穴肘とかゝめて横文の下こゝる
小指のとゞゝり也横文の上の小大い曲池
下の尖い少海多う針二三分留るゝ三
呼鴻八五吸禁灸齒痛ゝ目ゝゝ喪狂
吐項こゝゝり肘挛り脇下いゝゝ手足ゝ
ゝゝを腦風つゝう心痛咽逆ゝるのとき〻治
○青靈二穴直に少海の上三寸肘と伸拳
ゝゝる禁針灸三壯七壯 目黄こゞゝ

肩肘いゝゝゝゝるいゝゝと治を
○少府二穴掌の内小指と無名指とと
かゝめて両指の頭のゝゝる間ゝゝり針灸
灸三壯七壯心煩少氣人と異ゝ手中
熱肘ゝゝ脇挛り胸いゝゝ久瘧
陰ゝゝいゝゝ小便通ゝゝると治を

○神門二穴小指の後の通り脛の横
文の中にあり則掌の後の尖骨の下手

外踝の上兩骨の間拳を握り力あり陷
延多り針三分留ること七呼灸七壯
瘧り心煩を水と好く不食心痛手肘
の掌熱し目黄く脇いたく嘔血吐血
上氣音出ること健忘心積てんかんを治す
○前谷二穴 手小指の外側より小ゆびの
本節のうしろ拳を握りて小指の
前後に折目出る前のうめく
前谷後の折目の後縫多り針一分留る
こと三呼灸一壯三壯 熱病汗出ること瘧り
てんかん耳鳴こうい頸項頬こわ鼻塞
咳吐血肘いたく産後乳多きを治す
○後谷二穴 前谷の後より針 分留
こと二呼灸一壯治証は前谷に同し

○陽谷二穴 手外の側より小指の後の
腕の文の中灸三壯針二分留ること
二三呼 目眩てんかん腸いたく頸領腕
手ふるえ歯虫牙小児木舌乳を治す
○曲澤二穴 肘の内の横文の中すぐり
曲池八八遠く少海八八近く動脉の処也
灸三壯針三分留ること七呼 心痛身
熱し頬ろろき嘔血かさかさ肘腕
傷寒逆氣嘔吐頭を撫を治す
○大陵二穴 掌の後腕の横文の中
筋の間すぐり灸三壯針五分六分留る
こと七呼 熱汗出ること掌熱し肘
腸腫心煩を心痛目赤く小便赤
嘔口乾を掌熱し

○胸痛 [illegible] 治を
心包絡の實ハこれを瀉すべし
○中衝二穴手中指の内側爪の生際
去し一分陷の中鍼一分留ること三呼
灸一壯 熱病汗出て [illegible]
の中 [illegible] 火の如く心痛舌強
治を心包絡の虛ハこれを補を
○液門二穴手小指と無名指との間 [illegible]
名指の本節の前方あり拳を握りて
ところ鍼二分留ること二呼 灸三壯 瘧
ひきさけ咽腫手肘いたみ頭つう目
赤く渋り耳なりこえを聾いたを治を
○中渚二穴手小指と無名指との間 [illegible]
指の本節の後へ [illegible]

液門のもつへ一すんとにあり灸三壯
鍼二分留ること三呼 熱病汗出て目
すひ頭つう咽とれ耳ときこえを目膜を
生し久瘧肘手指いたみ屈伸なりを
治を三焦の虛これを補すへし
○陽池二穴小指と無名指との間と
筋骨にたるの推上せへ脈ふて指
の止る処腕の中にあり鍼二分留こと
六呼 禁灸 消渴口乾きおこり肩の
いたみ折傷を治を
○支溝二穴直に陽池の上三寸兩骨
の間陷この中灸三壯五壯七壯 鍼二
分三分留ること七呼 熱病汗出て [illegible]
のら痺 [illegible] 脚のいたみ三里足拳

乳嘔吐口噤と腕に心問へ心痛傷寒
亦癖妊婦脉通ぜん産後血暈を治
○天井二穴肘ちりの尖骨の三寸前
筋の間肘のつゞの陷この中 針三分
あるひは一寸留ること七呼 灸三壯五壯
心痛咳嗽 上氣唾に膿血まじり不全
寒熱 母ことあるゝと驚悸てんかん中風
耳ちさこへと喉痺目ちゝ痛く頰これ
耳後肘いたゝうちこゝ腰臆項頸いたゝ
大風痛ひ処と知と心ちうく脚氣を治
○膈會二穴肩の前の廉肩の頭と下ろ
こと三寸天井と目的ふとろ灸五壯七壯
針五分七分留ること三呼 肘痛を治
カタ〳〵連痛ちうちゝ

腿脚の部

○陰廉二穴氣衝と斜下ること二寸股
の附根 針八分留ること七呼 灸三壯
一切婦人の病と治を子あり人或の子
落やをとゝ人に此に灸して効多し 腰の部
此ちう以下の十一穴は足厥陰肝經
○五里二穴陰廉の下一寸陰包と的ふて
点と針六分灸五壯 腹中満熱して
小便通ぜざると治を
○陰包二穴直に曲泉の上二寸 跪坐をれ
ば此所の肉ふ溝出と 膽のゝくれ兩筋の
間 針六分 灸三壯 腰尻ちう 小腹へ引
いたゝ小便覺へを通じると治を
○曲泉二穴膝と力あて内の折目の横

大筋の上小筋の下に点を鍼六分
灸三壯痎氣あり陰九膕内股いたみ
灸三壯痎氣あり陰九膕内股いたみ
房事大過ゝ泄瀉女の血塊を治す
○膝関二穴膝蓋の下に牛の鼻ゝの
ゝ陰ゝこの穴下二寸に点を鍼四
分灸五壯膝痛を灸ゝ四中痛みを治す
○中都二穴直ゝの蠱溝のと二寸鍼三分
灸五壯腸下り痎氣婦人の血崩を治す
○蠱溝二穴内踝の前の通りゝ踝のうえ
五寸に点を鍼二分留ること三呼灸三
壯七壯痎氣脇の下に積聚石のごと
婦人の赤白とおりゝ下を治す
○中封二穴足の内踝のまえ一寸をおろす
大指と次指との間の通りに点を

針五分灸三壯おこり寒ゝ痎膝ゝ
陰裏縮て腹ゝ入引痛を主る
○大衝二穴足大指の側ら本節の後へ
三寸針三分灸三壯心痛小便ちがう腰
ゝ小腹ゝ引いゝ婦人の漏を治す
○行間二穴足大指と次指との縫の
間ゝを上大指の方へゝ
灸三壯腹吐利溏泄三壯中痛滑泄
婦人經水多く下て止ざるを治す
○大鼓二穴足の大指の外
ゝ去ること一分ゝ鍼三分灸三壯五壯
痎陰萎ゝ頭光婦人の血崩を治す
○陰谷二穴膕の前目の外に輔骨に
大骨あり其下ゝ表大筋の下小筋の上

針四分灸三壯　腰の痛陰萎陰縮男女共
腰の如く或は灸のごとくなると治す
是は足少陰腎經
○築賓　二穴内踝の上五寸兩筋の間
ふくらはぎ針三分灸三壯　五壯　疝氣頭
うん足の腫いたむを治す
○交信　二穴復溜と相並び有る間
筋と隔つ復溜の後へ交信の前
上へ点を針四分灸三壯　疝氣　氣
淋陰囊ことに婦人崩漏陰挺出るを治す
○復溜　二穴内踝の後への通り踝の上三
寸針三分灸五壯七壯　腸鳴痢病鼓脹
胃熱氣動し逆し出し血痔を治す
○水泉　二穴大谿後の下一寸有り

踝の後への下針四分灸五壯　目を閉じ
見ること能わず小便淋瀝婦人の月水
通ぜざるを心下悶痛を治す
○照海　二穴足の内踝の前の下一寸　針
三分灸三壯七壯　おこり疝氣手足力
なく陰濕りあり月水とどこのこおりを治す
○大鐘　二穴内踝の後へ踵骨の上廉踵
と踝との中央ふ点を灸三壯針二分
留ること七呼　嘔吐ぜんそくうんぴのこり
舌こり腸嗜を治す
○大谿　二穴足の内踝の後へ五分踵骨の
上動脉ある処針三分灸三壯久積心
痛足冷湧嘔息奏實七日中滑るを
○然谷　二穴足の内踝の前大指の本節

の後への側ら通ず起骨ありその骨の
下に点を鍼三分留ること三呼刺て血
を出すべしこれ灸三壯 足痿を治す
男子精泄やむこと婦人子宮陰戸出
月水調ず小兒の臍風口噤を治す
○湧泉 二穴足掌の中脆坐して足
仰け指を捲屈て点を鍼三分五分血
を出すべしこれ灸三壯 尸厥心痛
目明かず目眩五指ふるえ痛むを治す
○箕門 二穴内股の動脈の中跪坐して
此処の肉起て魚腹のごとく其肉の上大
筋の間即ち血海の上六寸 灸三壯禁鍼
遺病小便覚ず遺ずを治す
此より以下十一穴足太陰脾経多り

○血海 二穴膝頭の内廉の上一寸五分
即ち陰陵泉の通りの上多り 鍼五分
灸三壯 氣逆腹脹婦人の帯下を主る
○陰陵泉 二穴膝の下内側ら輔骨の
下陷の中足を伸てこれを禁灸鍼五
分腹中冷ぜんさ腰いたさ水腫小便通
ぜず淋病陰ぐるみを治す
○地機 二穴膝の下五分足を伸てこれを
鍼三分灸三壯 腰いたさ溏泄水腫
堅くして小便通ぜず不食女子の癥瘕
○漏谷 二穴足の内踝の上六寸 鍼三分
灸三壯 腸鳴ぐんぐん膝痛を主る
○三陰交 二穴内踝の上三寸 脛骨の内
側骨と筋との間 鍼三分灸三壯 脾

胃虛弱心腹脹滿不食小便通ぜざる
陰莖いたみ足痿夢ゑ精りれ臍の下
痛こと經行の時に房して羸瘦憂愁
腸漏こんと血下ること多くして昏暈する

○商丘二穴足の内踝の下少し前足を
張挙れば踝骨の上に折目のつる所
のうら筋骨の間に点を鍼三分灸三壯
腸脹痛痢上下に走り小腹を引いる
脾積舌の本強り胃脘いたみ心情
固しやこの婦人子なく小兒慢驚風

○公孫二穴足の大指の本節のうしろ一寸
をかりて大都の通り鍼四分灸三壯
寒疝不食頭面ふれ心いたみ咽

○太白二穴足の大指の外側本節の後へ
下に向き骨あり其骨の下白肉しこ赤
肉しこの堺めふ点と鍼三分灸三壯
腹こう食化せず泄瀉嘔吐腰のこゝ
腹一ぱいくるしむ主どる

○大都二穴足の大指の本節のさき赤
白肉の堺の点を即ち大指を屈して

新目の頭に鍼三分灸三壯　我病汗出
で眠られず身重く骨いたみ傷寒手足
ひえ胸腹に嘔吐いきれ熱一煩乱目
眩腰いたみ胸心痛蛔虫小児ひきつけを治
○隱白二穴足大指の外側爪の生際の
角と云ふ韭葉うら一分　壯鍼一分三分
留ること三時腹脹嘔吐して臥ること能
はず嘔吐不食胸熱一暴泄ときどき厥
厥足寒脹八日是止ず小児慢驚風
客忤を治す
○會陽二穴龜尾と尻骨との兩旁の陷
鍼八分灸五壯腹寒熱氣寒氣泄瀉
久痔下血陽氣虛之医汗多を治す
○承扶二穴尻の下股陰上衡文平中鍼
七分灸三壯腰脊掣引くいたみ久しき
寿尻てれ大便ときどき小便通ずるを治
○殷門二穴承扶の下六寸鍼七分禁灸
腰脊いたみ伸屈多しと外踝腫重を
持て歩行ず血いたみ泄注を治す
○浮郄二穴委陽の上一寸鍼五分灸
三壯霍乱轉筋大小便熱して
腰の外のいたみ髀枢不仁を治す
○委陽二穴承扶の下一尺六寸膕中の
横文の外側の項筋の間鍼七分灸
三壯腰脊いたみ膕中に引小便通ず
てんかん小腹にくいたみ傷寒大熱を治す
○委中二穴足膕の横文の中央脈多し中

鍼五分留ること七呼灸中の人脉と刺
こぶりん灸三壯 腰脊膝いたみ血道
小腹ひえくくり身痛と脾虚痛
傷寒四肢熱一熱病汗出ること大風
髮眉あけおつくる者刺て血と出ること
○合陽二穴委中の下三寸鍼六分灸五
壯腰脊こわり腹を引くいたみ陰股熱
脇痠痛寒熱陰萎ゆること崩漏帶下と
○承筋二穴臨腸の中央の陷中脛痛
合陽のこと法り足踝こうり七寸上灸三壯
禁鍼腰背ゆること痙攣臨踝ゆること
血霍乱轉筋と治を
○承山三穴合陽の通り臨の肉高起て
正しき所の肉の分際の中鍼七八分留と

得て帥瀉ーーーく鍼と出ること灸五壯
大便通ぜず痔ことに戰慄ゆつて腫ゆる
霍乱轉筋不食傷寒の水結と治を
○飛揚二穴承山と相並ぶ承山ハ臨ろ
中央通りの下飛揚ハ外踝の後通り
の上踝の上七寸に点を灸三壯鍼三分
痔腫ゆること髓ゆるく脚臨こわること
目眩目痛ーんん寒疝と治を
○附陽二穴飛揚の下四寸外踝の上三
寸筋骨の間鍼六分留ること七呼灸三壯
五壯霍乱轉筋腰足痛項重く寒熱
ゆること治を
○崑崙二穴足の外踝の後へ踝の下
骨の上の前あ隙ゆる中鍼三分灸五分留

〜十呼 灸三壯 妊婦あい禁 腰尻足痛
いたみ 頭肩背いたみ 目眩 目痛 おこり
汗多く 咳喘 ちぢ 陰腫いたみ 胸支
下らず 小兒の驚癇 治す
○僕參 二穴 崑崙の下 踝骨の
陷あるの中 針三分 灸七壯 足太陽脚氣
腰背筋攣 厥逆 厥癇 狂言 治す
○申脉 三穴 外踝の下五分陷るの中
針三分留 〜七呼 灸三壯 風 肢腰
足いたみ 癲癇 癲癇 治す
○金門 二穴 申脉の 一寸 針一分 灸三壯
亂轉筋 厥 小兒 足 脚膝痛
戰 小兒 頭 搖 身反 治す
○京骨 二穴 足の外側大骨の下小指の

本節の後 陷るの中 針三分留 〜
七呼 灸五壯七壯 頭痛 項腰背足
痛いたみ 卒中 目の内眥赤くなる
自驚自眩 癇 喜怒 不食心痛
○束骨 二穴 足の小指の外側本節の後
赤白肉の際陷るの中 灸三壯 針三分
留 〜三呼 腰脊 脚 頭項いたみ 卒暴
眩 自眩 臭 熱 肌肉動 目眥赤
泄 痔瘡 癰疽 治す
○通谷 二穴 足の小指の外側 本節の
前陷るの中 灸三壯 針二分留 〜五
呼 頭重 項いたみ 胸滿 食化
○至陰 二穴 足の小指の外側爪の生際
の角 〜一二分 灸三壯 針一二分

留ること五呼 寒疝手足出て心煩足下
小便利とき遺精目いたみ鼻と
牛下 鼻塞 頭重く胸脇いたみて治
○腰関二穴 膝の上一尺二寸 跪坐して
脚の内根のもとより下れ横文のうえの
中にあり 針六分灸三壯 腰痛足膝
不仁 灸三壯 小腹痛引いたみて治
上り以下十四穴は足陽明胃經なり
○陰市二穴 膝上三寸 卸三里の通り也
針三分 禁灸 腰脚膝冷 痺 寒
疝 小腹いたみ 脹滿消渴と治
○梁丘 穴 陰市の下一寸 兩筋の間也
灸三壯 針三分五分 腰脚冷 彈痛と
○犢鼻二穴 膝蓋の下 骨の上 脚
卸ち三里の上三寸 針六分三分灸三壯
脚氣 膝腫痛と治 膝腫潰は治
○三陰二穴 膝裏の下三寸 骨の外大筋
の中 灸三壯七壯 ○八一三百六十五
百壯まで針五分八分留ること一呼 胃中
こと七吸 ○八一寸留ること一呼 胃中
寒心腹脹滿小腹脹堅 腸鳴 腹氣
上 眞氣不足 腹いたみ 不食 隱
心痛 逆氣上り 及喘息 腰いたみ
四肢滿 膝痛 脚氣自明 ○足
後血 暴傷 癲 寒熱 汗出 嘔吐 口
苦 煩熱 反折 口噤 復腫 痛 乳腫 男
女 陰 事不足 久泄 利 食化 ○詩
腰熱 身熱 狂言

怒り狂乱遺尿失氣頭痛大小便
利せざるをくり五労七傷諸病皆治す
灸年三十已上の人は三里に灸すべし氣
上く目むき沖ずひ又四花高肓百會是等
に灸すべし後ち三里に灸一七上熱と下せ
○巨虛上廉二穴三里の下三寸鍼三分八分
刺して得て即瀉と灸三壯七壯藏氣不
足偏風脚氣腰痛手足不仁骨蒸冷
いたく大腸に食化せざる殮洩労痢腎腹
脹痛腸鳴氣上く喘息傳尸の骨熱と
○條口二穴上廉の下二寸鍼五分八分灸
三壯寒瀉感て足麻痺腫いたむと
○巨虛下廉二穴上廉の下二寸鍼六分
得て即ち瀉と灸三壯四十九壯

すべて中風瘧痺熱風冷症足重くいたむ
とうの厚朴さ涎出汗出ずして手足ぶん閉
麻顏色黃傷寒胃熱して食進まず腹
血下し胸脇小腹痛婦人乳癰を治す
○豐隆二穴外踝の上八寸下廉の外五
筋に隔て前の外廉陷の中灸三壯七
壯鍼三分屈伸大小便ならず胸膈滯
脹いたく風痰つよく四肢腫ずひ
○解溪二穴衝陽の後一寸五分脛上の
脈の中足の次指の直上踝上灸三壯鍼
五分留ること二時一頃痛目ぐるひてんかん
書乱轉筋面浮腫腰痛脹滿ぐるしく治す
○衝陽二穴足の踝上五寸脛谷と去ること
三寸次指と中指との間通りて足腕の方

上せバ足跗の中ゆびに指の止る處
灸三壯針三分留ること十呼り刺て
血出ること中風口喎ゆゝ足攣
踝腫ひ寒熱ゝ腹堅大る不食
傷寒振寒狂乱と治す
○陰谷二穴足の次指外の間本節の後
陷中内庭と去ること二寸灸三壯針五分
留ること七呼面浮水腫腸鳴腹ゝ
熱病汗出ること惡寒瘧と治す
○内庭二穴足次指の外間陷ゝの中
灸三壯針三分留ること十呼傷寒汗
出ること瘧疾不食赤白痢四肢厥冷腹
ゝ惡寒明ゝ口ゆゝ上齒痛ゝ

足の三陽經穴の之圖

○灸三穴足の次指の外側ら爪甲の角と
去ること二分針一分灸三壯 厥口禁心
腹滿水腫熱病汗出ること寒瘧

鍼とうひ上歯ひ〻その寒寒鼻ある足
狂走黄疸こゝかゝの口ゆがゝ面くゞ重〻
膝脚ゝれいゝゝゝ小便黄ゝと治を
○環跳二穴 髀樞 腸の外 病人側臥
後ゝと の中
○中瀆二穴 環跳の下 髀の外膝の折目
の上五寸分肉の間 灸五壯 針五分留と
七呼 寒に感一 髀膝痺いゝじと治を
○陽陵泉二穴 膝の下一寸 脛の外と 膝
とかゞめて外側の折目のくらゝうとす下
灸三壯七壯 五十壯 針六分留ゝ
と十呼 氣を得て 部ち 濕と 膝のゝて
屈まゞ 腿のゝ 痺痺中風 一身 逐ゝ
足筋攣 頭面ゝゝと治を
○陽交二穴 外踝の上七寸 外丘の前 針
六分留ゝと七呼 灸三壯 胸滿 足膝
いゝ 腰 膝 狂ゝ 面腫ゝと治を
○外丘二穴 外踝の上七寸 陽交と相並
陽交の前 外丘の後へ 針三分 灸三壯 胸
滿 頭項いゝ 惡寒 大小傷 ゝれく 發
熱 ゝんゝん 小兒の 龜胸と治を

外踝の中 針五分 灸 風痺 腫と治
○陽陵泉二穴 膝の下一寸 脛の外と 膝
とかゞめて外側の折目のくらゝうとす下
灸三壯七壯 五十壯 針六分留ゝ
と十呼 氣を得て 部ち 濕と 膝のゝて
屈まゞ 腿のゝ 痺痺中風 一身 逐ゝ
足筋攣 頭面ゝゝと治を
○陽交二穴 外踝の上七寸 外丘の前 針
六分留ゝと七呼 灸三壯 胸滿 足膝
いゝ 腰 膝 狂ゝ 面腫ゝと治を
○外丘二穴 外踝の上七寸 陽交と相並
陽交の前 外丘の後へ 針三分 灸三壯 胸
滿 頭項いゝ 惡寒 大小傷 ゝれく 發
熱 ゝんゝん 小兒の 龜胸と治を

損唾血足の外くるぶしの
○灸鍼二穴足の小指の次指の岐骨の
間本節のきわ陷の中鍼三分留こと三
呼灸三壯胸脇支滿寒熱傷寒
病汗出ると目の外眥赤目眩頭痛
耳聾胸中いたみ痛常の処あるを治
○竅陰二穴足の小指の次指の外側八
の生際の角と去ること二分灸三壯鍼一
二分留ること一二呼脇痛欬逆息とる
ことを得ると手足煩熱し汗出でとてんかん
癲狂心いたみ舌とかわき口乾き口痺肘
いたみ耳ときとくと目ひとくと冷たを

秘傳の次

の頭爪の先とかう足のうらと眼の下に引
それから胴の後の横文まで
其脾の臭の頭とかう臭ふのかを脊の後
より下し脾の上ち處に脊の正中より假
点に付又臭下とかう脚の内側のまを
取て其脾の真中と假点よりあて兩の
端より点をとこれ患門の二穴をりさそ厳
より点をかうる脊の正中の点いあくをさ
但し立て胴の紋のまを見て正しくを
初めて坐して横文のうらにかりふ
墨を付てまを白と見く紋の正中まで
すとそこへ灸數六病人の歳のまた
一壯すとそこへ灸數六病人の歳のまた
虎一壯とそこへ灸二十歳多くを
虛勞手足の心熱し盜

○腰眼二穴病人を立て腰をくゝれん兩
男にをこゝ陷こゝありて兩眼のしを是
穴多く合面を目と一穴の七壯ゝ十四壯ゝ
勞瘵の腰痛ゝ妙多ゝ勞虫あれば止出
大便こゝ下ゝ奚支の日支の時ゝ灸
故ゝ奚支の穴と云 俗ゝ支腰と云
○風市二穴腿の外の正中膝の上七寸
兩筋の間ゝ立て身を直し兩手を脇
下一中指の頭の盡処陷の中五十壯百
壯 腰腿脛ゝ痛いゝ脚氣中風を治
○騎竹馬二穴先長き稗ゝて男ハ左女ハ右
の手の肘横文の中こゝ手の中指ハ端
ゝそのまゝ取り病人を九竹の上ゝ膝げ

こゝあれて背を直して肘こゝ
取る稗の端を跨ぐる竹の際亀尾
の所ゝあて脊にそゝて上ゝ外せ稗
ハ盡る所の脊ゝ假点をれこゝ
左右へ一すつ灸十四壯廿一壯 癰疽
一切の惡瘡ちこゝふ痛風等に妙多ゝ
○鬼哭二穴病人の兩手を合せ大指
こゝ紙こゝ中ゝ兩の大指を縛り
丈を四分こゝ中の大さゝして兩の爪
の角を肉を四処ゝあて灸ること七
壯十四壯 狐つき物つき驚風てんかん
○斜差二穴脊の九推の下左へ一寸五分
十二推の下右へ一寸五分肝俞ハ風邪ゝ
傷られこゝあ脾俞ハ飲食ゝ傷られ

ざるゆへ小兒ハ氣力脆くして灸難き
勝るゆへ四穴ハ灸すべし肝ハ左に
あり腎ハ右にあるゆへ暑くして二穴ハ点を

針灸諸病の治例

○中風

風者百病の長さり其變化さること極
多し偏枯ハ半身遂りて風痺ハ身に痛
る四肢収らべて風證ハ昏冒して人事
を知ず風痺いふひきてふふふあ元
精虚弱して栄衛調護とうしるひ
あるひハ憂思ことごとして真氣耗散し
腠理密さして風邪に中る肝風ハ筋
挛り手足逆りて汗出く風と惡じ心

言澁り肌肉不仁心いさゝ心酔ごと
肺風ハ息つゝい苦しく身緩り声れ
手足多るる腎風ハ腰いさゝ骨節痠
耳鳴聲小さる又風血脉ゑ中れハ白眼
ゆゝむ府に中るハ手足多るハ身節痠
を心臓に中るハ耳口鼻そこりり
舌強り声出ゝ氣虚ハ右の半身
卒中風ハ卒に倒れて癲るるり
口開き手撒り眼吞り遺尿し髮直
沫吐き頭ゝ搖ゝ直視声しゝきの如
汗出く玉のゝく面青さハ死証多り
神聊風池百會曲池翳風風市
環跳肩髃皆針灸して風に躁し

遠く中風あり此八穴と第一にとるなり
なり三の中風にて腹とくく候ひとるあ
腹に塊あり其の塊りに鍼まべし愛て
ひとくくこの塊に刺ハ必ずとるる

鍼▲卒中風ハ工府少商申脉人中
▲人事を知ざる中衝大敦百會
▲日蝕あハ頰車風池兼漿合谷
▲不仁あハ魚際尺澤少海委中
灸▲百會風池大推肩井間使曲池三里
▲人事を知ざる中衝大敦百會
▲日蝕て言語ざる鍼の穴と同
▲不仁ハ風市肘髎中渚太沖環跳三陵

○痺痛

鍼灸書

通ぜざるなり曲池風市
▲風痺ハ尺澤陽輔▲痿痺ハ膈俞
▲寒痺ハ曲池委中風市▲厥逆ハ列缺

○痿

濕熱あり痿あり血虛あり氣弱さあり
痿血あり腎虛あり内関肩髃曲池
風市陽陵泉痿る所に刺て氣とひる
血とうごかすべし中渚環跳に鍼して
倍て氣を待と二時二重脈命に灸ぶ

○傷寒并熱病

冬月風寒に傷られ寒極て熱ぶこり
をあらはす中に病と正傷寒といふ
寒毒内に蔵して春に至て發るを溫

病とゆひ氣に至て發るを熱病と云
汗をかくと傷寒と汗あると傷風とに
初め一二日頭痛惡寒發熱身いたむ
者は病足太陽の經にあり發散すべし
三四日耳聾脇いたむ嘔して口苦寒熱往來
二三日目疼く臭乾て眠ること得ざる
足陽明の經にあり解肌すべし
とれまでと病表にあり汗をもて
とるは病足少陽の經にあり
表半裏にあり
和解をもべし汗吐下をもとめむ
五六日脉沉咽乾き腹痛む自利は足太陰の經にあり是より裏に入る
六七日口噤て舌乾き口渴き譫語は足

少陰經にあり七八日煩躁裏に
脉沉滑は足厥陰にあり
▲汗出て惡寒するは玉花大杼肝俞陶道
▲身熱惡寒は後溪▲身熱汗出足冷
は大都▲身熱つゝう食すれは三焦前
▲身熱頭痛汗出は曲泉にとる
▲熱進退は神道関元
▲背惡寒口中和するは関元に灸
▲風と惡するは風池風府に針し
桂枝湯を與ふ
▲汗出て惡寒は後溪陽池
▲身熱喘は三間▲鼻熱書は曲池
▲陽明の病は上脘
▲太陽少陽の并病は肺俞肝俞

大椎肩髃に刺す胸のこゝろ〇八会穴腑
俞肝俞に刺べし
▲頭痛汗いそぎの風池命門に灸す
▲汗出寒熱せば五處穴上歯に灸す
▲煩心さく惡さく巨闕商丘さらう
▲匹利三中熱脉五ぞう次陰に灸すべし
▲嘔吐は半表半裏の厥陰に灸三壮
▲表逆ぞう期門に刺べし
▲胸脇満ぞうきしと言うは期門に刺す
▲小腹満腰痛は太中 奪命の穴に刺す
▲腰痛 ○絡穴に刺べし
▲陰中に刺べし
▲陰証小便通ぞう陰裏痛り入小腹痛
ぞう陰ぞう陰に刺べし

▲六七日手足冷煩躁ぞう厥陰命に灸す
▲少陰腹血ゾトとは少陰太谿に灸す
▲七八日熱さめ胸脇満語話は期門に刺
し其草芍薬湯より愈ぞう隱白に刺
▲結胸心満堅く痛む期門脇命に刺
▲熱寒汗出ぞう商陽合谷陽谷に刺
▲尿兌労宮脾胃に刺べし
▲同熱度多く止ぞう腦谷に刺べし
〇中寒
のようなる
寒は天地殺厲の気ぐうう虚なる者これ
に中らば則ち口噤目口歪四肢僵直
表に在りて惡寒ひえ表証同赤く
汗あり ○ひえ表証 ○抜方 頭痛ぐうう手足
冷あり腹いたく吐瀉 延泳ゾ吐

るのち數條して面然く灸と引修
り脚蹇をう
用して脚蹇をう
氣海關元より針灸し或は腎俞肝俞
灸すべし灸は人と知るい神驗こと灸
ふ灸を人と知るい神驗こと灸

○疫瘧 おこり

夏暑に感じ即病む秋天濕風に傷られ
られ病をる初は悪寒發熱づくこそ
慮冒の比に但脈弦手つの後に時
分あるべし真ちうに合谷曲池公孫
兼滿大推の頭に針二三壮してその針
後に灸二十壯して奇効あり又三推
の上にもこれ又いもの瘧にも梁門
に針して奇効あり久しき瘧も兼
梁門のもとに針して奇効あり

ものは是と針して刺らるべく効あり

○刺病 ちりやう

赤白とり小濕熱と作て治をるべ
古へは腸澼くいひ滑下といふ
今の痢病をう脈滑沉小へ弦
急は死をとらこと血と下し屋乃雨
漏のごとく魚の腸臓の如きは皆死
脾俞腎俞復溜長強大腸俞
小腸俞中脘足三里大都を灸べし
奇效あり鼻海水分天樞に針して
刺べし

○淋瀝 りりりりり

膀胱の異変化して黄色をそ

食物ところを脾胃に壅滯して五藏
の分を塞ぎ腹脹り嘔逆を大
腸分を塞ぎ腹脹り嘔逆を大
腸に寒邪あるに食後
腹泄は大腸に寒邪あるに食後
腹血
腸いたむ小腸泄は小腸いたむ腹血
と云ふ小便少し赤
泄り裏急して通じ
泄の中にひとつ泄の證にして治を
医学の中にひとつ泄の證にして治を
▲鍼 関元 腹溜 長強 腹哀 三陰交
▲灸 三里 気海 中脘 大腸小腸俞
膀胱俞 腎俞 ○霍乱

霍乱は外邪に感じ内飲食生冷
に傷られ心腹痛み吐瀉
腹痛吐瀉

ものは死を又吐瀉して脚筋腹に入る
脚筋腹に入る
霍乱と云ふ治し
轉筋は卒に吐瀉して津液の
乾霍乱と云ふ治し
そら筋つれ
裏縮り舌巻と云ふは治し
其陰囊を引き女は陰の乳を
中人一処に寄るべしとれ妙法なり
腹脹
腹脹は鍼灸ともに幽門
に刺し北穴に刺し
そられにも痛増く自ゆく見つひる
しあり苦しみて
霍乱は陰陽交
腹痛は天枢

▲脾病問吐ゼバ脾胃ノ氣ヲ補ヘシ

○傷食 ものくさり

飲食停滯 ものくさりこれハ脾胃傷テ或ハ寒養熱

腹痛 吐瀉 或ハ寒養熱

つうして傷寒のごとく外傷ハ左の脈盛に手の指熱ー鼻塞ー頭の角いたく身疼む内傷ハ右の脈盛ん手中熱ー額の正中いたく腹いたく不食など

▲脾前三里に灸ー

▲梁門 天樞 通谷 中脘 ヒ針ヲ

○嘔吐 ものくさ

胃虛して吐する者あり胃寒して吐する者あり暑に犯さるゝ者あり飲食ヲ

人後して吐ヲ

▲針 氣海 風池 大淵 三里

▲灸 胃俞 三里

○膈噎 翻胃 ものくさ

憂思勞氣ヨリ生ズ噎とハ食飲ものくさして噎る也膈とハ喉のあくまで何ものくさりも吐ズ呑ども下らず麥粥にして氣味を食ズそのまく吐逆ス翻胃ハ朝食ものくさ物ヲタヲ吐ータヲ食して晨ニ吐ものくさ病ものくさして治セズ

▲天突 石關 三里 胃俞 胃脘 鬲俞 水分 氣海 膻中 胃倉

○呃逆 一日嗝逆 ものくさり

婦兎ハ氣逆上衝して声となる也
又胃火上衝をなす逆をロにをこすの
腸こう起るを治し易し脾下りて上
ろへ陰火上衝く治しがたし
▲期門への針し脾俞中脘乳根に灸を

○喘促 ぜんそく

肺虚寒の喘あり肺實熱の喘あり
氷氣肺に乗じて喘し氣滯り肺
脹く喘し氣急の喘胃虚の喘陰
虚氣虚痰喘其病と受ること同
▲灸 中府雲門天府華蓋肺俞
▲針 中脘期門章門肺俞

○痰飲

あり痰の患ること喘と咳と也
咳とは肺の病なり痰とは脾の病なり
嘔とは胃の病なり痰とは肺の病なり
驚悸し寒熱し痛腫を発し塞壅盛
四肢不仁し口眼瞤動き眉稜耳輪い
ずれも腸の間に聲あり
背心一点氷のごとく冷へ肩項いたく
咽より後ろ付て吐くを出を呑ごと
下らぬ胃虚しく肺を塞ぐこと
あるべし四氣七傷の犯され
氣塞り痰聚りて然らしむ
▲不寐 巻清 幽門 通谷 風門 膈俞
肝俞 中瀆 埥跳 肺俞 三里

○咳嗽 しわぶき

咳の聲あり痰あり肺氣やぶれて

水〻〻と嗽ハ痰ありて声かゝ脾湿
その痰と動とゆへ多くあるハ風寒
濕熱の邪に感ゝあるハ医虚火動
おこりて労咳とゝ水うかれて痰
とゝ多くゝゝ咳嗽せしむ
肺俞肩井少商然谷肝俞期門行間
廉泉に灸〻〻を〻〻不容深門ゝ鍼を
▲肺咳ハ手大淵　▲脾咳ハ足太白
▲腎咳ハ足太谿　▲多く眠ゝ三里
▲面赤く熱咳あハ支溝
○諸氣　氣の脉ハ沉多り
經ゝ日百病ハ氣ゝう生ゝ喜ゝ心伏
傷ゝ〻〻ハ其氣散ゝ腎氣衰ゝ
肺氣衰ゝ憂ゝ肺ゝ傷ゝ〻〻ハ其氣
氣衰ゝ心氣衰ゝ思ゝ脾ゝ傷ゝ〻〻ハ
其氣結ゝ肝氣衰ゝ怒ゝ腎ゝ傷ゝ
〻〻ハ其氣怯ゝ脾氣衰ゝ者ゝ則
ハ氣泄寒ゝ〻〻ハ氣ゝ
結構虚無精神内ゝ守れゝ病何ゝ
ゝつゝ生ゝ
▲灸　肺俞神堂膈俞肝俞三里
▲鍼　承滿深門ゝ刺べ
○證
氣血通和ゝれゝ百病生ゝ
結聚ゝ〻〻ハ六番ゝ多ゝ氣滞ハ
腹脇腹満刺ゝ痛ゝ舒ゝ脉沉也
血脉ハ大小便紅ゝ紫血ゝ吐ゝ

風と後と脉數濇多り食貪ハ嗽氣
吞酸胸腹飽悶いさこと不食右脉盛
多り痰貪ハ喘滿氣急痰嗽胸脇
いさこと脉滑多り熱貪ハ小便赤く澁
り五心熱し口苦く舌乾き脉數多り
温貪ハ身節走りいさこと陰雨ニ遇ヘハ
發り脉濡多り
▲膏肓神道肝俞不容梁門
○痨瘵　さのうさ
痨瘵の證さ〻一端ニあらと氣體虛
弱し心腎ハ勞傷してこれと得さり
心ハ血と主り腎ハ精と主る精血ハ
相火たりて咳嗽血遺精盜汗

日晡にくるおこり此證勞虫のうて
骨とうつり相傳く親類と滅とと傳
尸と云▲梁門とあらうて幾度も刺と
▲惠門四花膏肓章門氣海三里に灸
○吐血并衄血　欬血　唾血　咯血
陽虛して陰虛ところゆへ血下に行
て炎上して口鼻こう出ること或ハ
一椀ばかり吐く別ニようこのもの腹
中の宛血あるあるいハ熱の傷こうあり
こうかゝず吐血ハ胃こう出ると全く
血と吐く先痰と吐く後ニ血と吐ハ
積熱多り先血と吐く後痰と吐くハ
陰虛多り治しかたと衄血欬血ハ肺ヨ
り出唾血咯血ハ腎こう出とこと

▲曲澤 神門 魚際 ▲嘔血へ大淵 長強
▲吐血へ前谷 上脘 井田 隱白 脾俞 肝俞
▲衄血へ諫語 二間 風府 委中 合谷
▲欬血へ肝俞 大淵 ▲唾血へ肝俞

○下血

風寒濕熱藏腑に入て腸胃となり血と大腸に引て下血となる
▲腎俞 氣海 陽關 關元 三陰交 絶骨

○虛損

元氣素より弱く或は起居宜を失ひあるひは飲食勞倦一心に用て太過にして眞氣を損じ形體を眼うすく齒動き髮落耳鳴を生じ腰

遺精白濁内熱脯熱口乾き喝渴する心神寧からず寐られず小便短少餘瀝肢體寒えるそれ是氣急促咳嗽健忘四肢倦怠等の証を顯す
▲灸 肺俞 肝俞 脾俞 腎俞 三里 膏肓
▲針 梁門 中脘 くつくつ

○汗

發熱して自ら出るを自汗と陽虛より出る陰虛より出る
▲盜汗へ腎俞 自汗へ脾俞 肺俞 ふ灸をべし
▲合谷 曲池 湧泉 然谷 又刺をべし

○諸熱

五藏の熱證 肺熱をれば皮毛熱

嗽寒熱と心熱されど脉熱し
煩熱心痛し手の中熱を 肺熱そん
で肌肉熱し夜ねむられず 心情し
と四肢収を 肝熱へ筋熱し寅卯の
刻ねむられず脉弦ゆるく多く 怒り手
足熱し筋ゆるめ腎熱されば骨髓
熱し骨の中と共にふ起こ居られど
諸無の熱證 面熱されば足陽明 口熱
し舌乾くへ足少陰 耳の前熱されば
手太陽 掌熱されば手厥陰 足の下
熱し足少陰 身熱し肌いたむ
手少陰 洒淅として寒熱せば手太陰
中熱し喘されば足少陰 身前熱され

足太陽 肩の上熱されば手太陽也
晝熱されば熱陽分にあり夜發へば
熱陰分にあり晝夜同じく熱され
ば血室に入り重陽無陰多し 渴をべ
き多し陽と渴をべ
▲梁間 表滿 天柱 氣海 針いくらかと
刺くは 又天澤委中こうの血とる
○健忘 征忡 驚悸
精神短少多き者心とものゆくこと過
ち洗忘して多く事を忘れ心健忘を
いう征忡は心中惕々として跳動を驚
悸は驚忡して驚うこと人の捕へんと
するごとしこれ心脾の虛損多り或は

癲心驚ゆ迷て事〻ゆうする者あり

▲灸 膈俞 肝俞 肺俞 脾俞 腎俞

▲鍼 神門 大陵 巨闕 上脘 三里

○眩暈 ゆらゆらめきよわくあく

諸の眩暈はみな肝に屬す風邪上り

攻湊進りて眩暈するあり血虛

失血あるひは医虛火動くこと此

証とする風眩は脉浮ゆうして汗あり痰

は脉弦ゆうして滑あり ▲鍼 上星 風池

天柱 臨泣 風府 陽谷 中渚 梁門

▲灸 上星 顖會 前頂 百會 風門 膈俞

○中惡 ゆうさつのにわくらく

中惡とは人の精神衰へ弱して鬼邪

ゆうて胸腹刺ごとく痛み悶乱して死

をあるは吐血をあるをあり先 ▲幽門

百會 關元 氣海 ゆ灸 ▲ 安息香 ゆ

豆粥 ゆ火ゆ入煙ゆ香ゆべし

○癲癇 てんかん

癲癇は元母の胎内に在く驚き受く

五種あり五藏ゆ應ずるゆえ

一藏ゆ歸を驚くときは神舍ゆ中ら

舍空き則元痰逆心竅ゆ迷ひふさぐ

ゆえ口出入をするはうて卒に倒

即て手足ひくあり口眼引つり

のびのびのびとなり沫を吐く聲ふ

しゆうしゆうとなり ▲鍼 大推 水溝 百會

神門 金門 巨闕 崑崙 筋縮 湧泉

灸百會龜尾上脘陽蕎の美醫

○狂乱　さらぐの

狂はるゝ人ゝ定まらず正く定まらざる也
あるの人痰火實盛あるひは心血不足
あるの人憂驚にして志とする所
此証とする所喜で笑ハ心火盛なる也

鍼尺澤間使天井百會神門中脘

灸巫山風池曲池尺澤神門上脘

○諸虫　むしくのぶ

虫ハ潮熱して生ずる腐草蛍となる
其証饋雜腹痛涎沫を嘔吐
面の色痿黄眼睛鼻の下青黑く
食少く色黑く瘦あるの人寒熱咳
嗽して九虫ハ一名伏虫あり四す

諸虫の長さ二寸動虫長さ二尺動
とれハ清水を吐き出るとれハ心
痛をして心とゝあくときんハ人を
殺す三寸白虫長さ一寸動きき
ハ腹痛腫裏り清水を吐き上下り
おこりさあり心を傷ときハ死を
四ふ肉虫される者のごとく人を煩
清せしむ五ふ肺虫蚕のごとく人を
咳嗽せしむ六ふ胃虫ろうぶ如
ろう吐逆嘔をする七ふ弱虫瓜のあ
ごのごとく多く唾を吐く八ふ赤虫生
の肉のごとく腸を鳴しむ九ふ蛇虫細
長して蛇虫のごとく　赤癩瘡瘍癤を
生ずる千金方に曰く五藏労をするとき

熱と生ずる熱をもつて虫と生ず
心虫と蛔と云脾虫とす白と云腎虫
いうこの比肝虫は李の比腎虫はすも
ふ切くるる蟯のごとし二虫は長虫赤虫
蛔虫あり諸虫ともに上半日は頭と上
ましりふ又子のごとく上ゆくふとしり
九ゑ諸虫と治をるふ寒熱虛實と
察し脉とをんかんばくをみて
針と行ふべし三陰交 三里 内関
陰谷 行間 太白 復溜 氣海 脾俞
翠門 天樞 滑肉門
虫の發りをるときは稍その上に刺を
べうをまれ足の穴少て氣と下ゑ比
傷じその駐節の氣に應じて色々
のをらとをれ氣と引下をとれば虫
おのづから治を
○積聚
肝の積と肥氣とふ左の脇にあり面
青く兩ときをるを小腹より引心の
積と伏梁とふ臍の上おおをる胸の
中に横ゑ腹熱し面赤く胸ひをれ
咽ひるき不食しやをて吐血を脾の
積と痞氣とふ脇の裏中のをゆり
まあり面の色黄して飢るをれば
かれ飽をれのをる常れ腸ふく
足をれ泄瀉嘔吐し痩をるを脇
の積と息賁とふ右の脇にあり面白

背のさこ膚の皮の中時よりくこ
虫のくこふがしと腎の積と奔豚と
いつも小腹にありおこるこれハ臍よ
のぶり面黒く飢るこれハ
飽これハかくるこ膿いさこ骨ひ
目くくくくロかくく
積こ腹痛あり痛ますて塊あり
て不食をるこをあり或ハ咳逆嗽
短氣心痛とあり腹痛をるこれハ猥
よ痛処よ刺べくくれ積ある処と
くくあ〜ゆ〜げ其後いくむ処とう
三すぐりりきに針をべ〜若痛と
つくれとこひさとひさこのうへよ刺
多〜積よかまらびまれとかまりて
氣と快くをるとさいおのづく〜治を

▲三里陰谷解谿肺俞膈俞脾俞
三焦俞期門章門中脘氣海関元

○黄疸

五疸の分ありといへ〜こ皆これ脾胃
水穀濕熱相蒸ゆくよ黄と發をる也
胸腹飽悶身面目〜ゐ黄小便黄澁
汗の衣と染ろこと黄栢の汁のごこ〜
ゑこハ麴のごこ〜濕と熱とさこ〜こ
氣ここの〜ざれと鬱〜て疸とある

▲針巻清泉門よりくこひと刺をこ
▲灸天枢水分氣海膈俞肝俞腎俞
脾俞腎俞胃俞俞よ灸をべ〜

○水腫　これやまひ

内經に曰く水腫その本は腎にあり

そのもとは脾にあり水のつもり

故に水病は下腫より腹大きに上

嘔急と云ふ所を得て先腹

これ後に手足を治すべし治せば

手足より腫を後に腹を治すべし治せば

肉をくく掌をこの如くするは治せず

▲灸　膈俞　肝俞　膽俞　脾俞　腎俞

通谷　石関　水分　天樞　氣海

▲針　胃倉　合谷　石門　水溝　三里

復溜　四滿　曲泉

▲渾身浮腫は曲池合谷三里内庭行間

陰陵泉　▲水腫は脾腎肝膽皮陽陵

陰谷　解谿　公孫　厲兌　冲陽　陰陵　胃俞

▲四支浮腫は曲池合谷中渚液門三里

三陰交　▲風腫身浮は解谿　▲遍身腫

滿飲食化せざるは腎俞百壯即差

○脹滿

胃と才ゝ脾七と堤ゝ故に脾腎

虛ゝ脹と云ふ遍身

と水腫と腹と大ゝ鼓の

ごとく面目手足腫さると脹滿と

虛脹ゝ脉洪大は微細ゝ色

▲針上脘三里章門陰谷関元期門

行間脾俞懸鍾承滿復溜

▲灸三里章門脾俞承滿

▲水脹脇滿は陰陵泉　▲水分に刺と

○消渴

上消ハ邪熱肺ヲ燥して多く水を飲
食すくなく大小便つゝのごとし中消ハ
胃熱して脾胞盡を飲食をよふ多く
小便赤　下消ハ腎虛して水乾く多く
水をのゝ小便膏の如くして白ぎる

水溝　承漿　金津玉液　曲池　太冲
行間　勞宮　商丘　然谷　隱白

灸　腎俞　中脘　意舍　小腸　膀胱　關元

鍼　中脘　意舍　照海　曲池　曲骨

○淋病　小便閉

淋ハ小便をぢり痛むあり熱臨脾より
腎を結して滲泄をなし能ハ
ざるゆへ淋と名づく五種あり熱淋

ハ小便赤くちぢり痛むこゝろぢ
石淋ハ莖中にくゝ努力しくれハ泡石の
ごとし氣淋ハ小便をぢりいさゝつゝよ
餘瀝ありて盡ぢ血淋ハ尿血結熱
して莖痛と多く膏淋ハ尿膏に似
たり勞淋ハ勞倦をれでをおこり發
又色欲をでおこりぢして強留して泄
さゞ小便急に來して溺ぢ忍ゆまべ
多く淋と致と

鍼　關元　夾溪　三陰交

灸　腎俞　膀胱　小腸　中膂　三陰交
炒塩と臍中に填滿て大麥粒七壯
陰寒甚して小便通ぜを陰囊縮入
小腹痛こ延ぢんとする ハ石門に灸

○溺濁

赤濁は血に屬し思慮に過し心虛して熱あり白濁は氣に屬し房勞すぎて腎虛して寒あり

▲腎俞 氣海 關元 脾俞 三里 三陰交

○遺溺

先ず遺尿は小腸膀胱の陽氣衰へ脫落ゆへ尿は白く膀胱利せざれば癃閉あり溺は赤く遺尿は白濁又は赤濁

下焦に血とゝゝ久虛勞し內損されて小便おのづゝ遺て知ず下焦虛寒し水液と溫制とゝゝあゝざれば小便さへあるにづる

腎俞 氣海 小腸俞 曲骨 三里 關元

○遺精

夢に人と交り感じて精を泄を夢遺といふ夢に因ずして精おのづゝ出るを精滑といふ心腎內虛に因て固く守ることあるに相火動じゆゝ多し又久しく交合ぶ精猶ゝ溢るるのは病あゝぶ

▲灸 脾俞 肺俞 腎俞 氣海 三里

▲針 關元 曲泉 然谷 大赫 三陰交

○秘結

風秘は風痰大腸に結して通ぜず風と發散ぶ氣秘は氣ぶ滯ぜず後重せまりて煩悶脹滿を氣とめぐゝとゝゝ寒秘は腹冷痙攣結

滯と溫補をべし虛秘は津液虛し血少くして かるる潤し滑べし熱秘は實熱氣ふさぐ心煩鬱べし腹り煩渴ぶ熱とをぶくしく すべし

灸 肝俞 膽俞 腎俞 大腸俞 関元

針 天樞 滑肉門 石門 陰交 巖山

○痔漏 いぼぢ あなぢ

屁の穴より瘡と生じて傷ぶべあるの傷て少あして愈やをぶと痔と云瘡潰ゝ竅と作ゝ膿血出て愈ぶるぶと漏とのふ痔に六種あり壯痔は肛門の邊より肉珠と生じて鼠の奶のごとくあそうと血と出を牝痔は瘡と生

故る脉痔は屁の面よりぶくと生ゝ

るぶくく膿血と出を腸痔は肛門ろ中に結核と生じ血と出し寒熱性來し溜り行ぶくに脫肛とあり血痔は大便より清血と下ぶとく止を酒痔は酒とのびぶくに瘡出血とあるす

▲灸 百會 氣海 腎俞 大腸俞 長強 膀胱俞 三陰交

▲針 秩邊 委中 陽輔 ▲血痔あは 巖山 復溜 ▲腫痛あは 飛陽 ▲漏あは 長強 商丘 巖扶

○脫肛

肛門の翻出ぶるあり肛は大腸の門あり大腸は肺の府あるにより肺實

をれば鬱結し肺虛寒をれば鼻出
を又經に曰く腎は穴と二陰とのみ
こと故に腎虛をる者多く此症あり

▲命門 俞 腎俞 長強 百會 膀胱 灸

○頭痛 ずつう

頭は諸陽經の首也風寒の頭痛は鼻
塞り惡ん發熱を濕は頭重し食
滯は額の正中いたむ左邊痛は氣虛右
は血虛交痛に苦し眉輪骨いたむは痰
火あり真頭痛は腦巔の底にとゞまり
痛ところをさゝく手足冷臂とのこ
ろ上まで上るは半日に死を

▲百會 風池 風府 合谷 攢竹 曲池
魚腰 前頂 曲差 上星 三里

▲頭重く鼻塞は百會に刺を

▲目眩き頭のうゝ腫は前頂に刺を

▲項強り惡寒せば後頂に針をべし

○痃癖

肩の痛むこと或は痺にして或は風寒
濕にして或は多くは氣血つゝくこと
ゆへあり此處に刺こと秘傳のうもの
手を肩に押の多り撫ぐべし氣と
開をして後に刺をべし深きこと
あるまらあり若ぐりに刺こと
人に害をこれと刺は針をして
皮肉の間にとゞまるべし少も肉に刺
こと有れば肩背に撚針に用べゝ
從針をうるべし管に入てくるる

下し皮とやぶりて氣血とぬくるの
効速あり針と刺るるあると又管ゟ
く推べしかるゝと血出て邪氣ゟ
あり上古ゟ石の尖ゟ痛痺ゟ
處と刺し脉とやぶり邪とさる鍼
經ゟ砭石とりて膿血と出とあり

○手指

手の痛ハ痰にゟ風濕ゟる老人
ハ氣血衰弱して肢とやゝあるゆ
あるゝかの骨節ゟゝ大ゟん節
間ゟくゝあり指と赤くのゝ如ゟん
痰と血の不足ゟり

▲曲池 手三里 肩髃 刻缺 尺澤

心痛ハ九種ゟり虫痛疰痛風痛悸
痛食痛飲痛寒痛熱痛去來痛也
厥心痛ハ寒邪心包絡ハ客ゟり真
心痛ハ寒邪心の藏と傷ゟる痛こゝゟ
ゟゝく手足青くして臂膝と過
ゟハ半日ハ死を

▲胸の中刺ゟくゝゟゝ手足の唇
青く脉沉ゟハ大鄂ゟ刺して
▲胸中滿ゟゝれいさゆゝく缺盆ゟ
引つり痛こ死ぜんとゟゝ行間
尺澤ゟ刺こゝ
▲胸ゟくゝゟゝ
死ぜんとゟるゟハ然谷湧泉ゟ刺と
▲神門 鍵里 大都 太白 中脘ゟ撰刺
▲多ハ腹充滿俞 肺俞 大鄂 中脘 下脘 三里

○腹痛

腹痛に九種あり絶えずして増減あり
さむい寒也 作痛作止い熱痛多り
食もろもろ入れば腹痛し泄して後よ
痛減むるい宿食多り 時よ痛と時
よ止む面白く唇紅すして飢ろ入れ
い痛かつ〻〻食もろもろ入れば
らく止び重痛多り痛處移らざる
死血多り 脇下に引いて聲あり
痰飲多り 手を腹と按よ軟ふ痛
やわらぐい虚多り 腹硬く手を按
いよいよくいるひい實痛多り
の腹痛るい先腹よ針灸を

足の穴よ針灸して痛く和らぎそのち
腹よ刺すべし 尋常のごとく腹痛
あるいは腹滑肉門と重く押へく刺
すべし ▲腹痛ひどく目
眩き死せんとするあい隱白湧泉よ
針して正氣を付べし
▲上脘 中脘 巨闕 不容 天樞 章門
氣海 崑崙 大白 大淵 三陰交

○脇痛

兩脇痛ハ肝火盛に本氣實るとろ多り
陰嗽しそいること走注し痰の出あり
痰多り左の脇よ塊ありて痛
移さるはハ死血右の脇よ塊ありて
飲閉もろい食積多り肝積い左よ在

腸積ハ右ふあり

▲針　日月　京門　腹哀　風市　章門

　　五樞　中瀆　期門

▲灸　肝俞　絶骨　風市

○腰痛　こしのいたみ

腰ハ一身の大関六經の懸るところ太陽

腰痛ハ項脊尻ヨリ引ぜあり重ク陽明

の腰痛ハ左右へくくられる強り

ると少陽の腰痛ハ針ゆて皮と

くぐごと俛仰あしず大陰の腰痛

ハ熱して腰ヨ横木あるゴ如ク遺泉

を少陰の腰痛ハ張弓のごとく默々と

して心ヨリ脚ヨ熱ス

腰痛ハ腰

邪熱あれば腰痛く脛ヨリ足

ちらく又曰く腰ハ腎の府多くハ色欲

過し腎と労傷とれと常ヨ腰と

痛ずして心日輕く夜重きハ瘀血あり

陰雨ヨ遇ひ久しく坐して發るハ濕

あり腰ヨ引き重走注串き痛ハ痰あり

頭痛惡寒發熱とるハ風寒にして腰ヨ

ハ中寒多

▲腎俞　膀胱　腰俞　志室　崑崙に灸し

▲崑崙　肩井　環跳　陰市　三里　陽輔ヨ針

▲委中ヨリ血とるべし　▲兩腹水の

ごとく冷腰脇肋いたハ尺澤　三陰交

合谷　陰陵　行間　三里　手三里　▲腰痛動

ずるハ風市委中行間　▲腰脊強痛

あり腰命委中湧泉小腸命旁院命

○痛風

痛風は遍身骨節走注していたむ也

氣血虛弱し風寒濕に感じ或は

痰經絡に流注し関節利せざる

▲針 百會 環跳に刺べし

灸 肩髃 肩髎 曲池に灸べし

○脚氣

男は腎虛女は血海の虛より發る或は

風寒暑濕とうけて生ずる走りいたむ

處さまざまに風より筋肉急して

のべがたく如に痛は寒より腫て重き

は濕より手足腫るは熱し燥渇く

骨節の間ゆるくゆるとして鶴膝風と云治

ぶべし脚氣腹に入ると云大事なり

灸 三里 三陰交 風市 外踝 内踝

針 公孫 衝陽 委中 懸鐘 飛陽

又痛び上に針と刺べし

○疝氣

凡そ疝氣は濕熱痰積流下して病とな

る或は虛寒にして食積にして發る

肝經に歸し宜く肝經と通じて

又腎經と手とゝ多し

七疝の症 厥疝は心痛し足冷食と吐く

寢疝は腹中に氣積して背のゞ

寒疝は冷ゝ食と用ゆるゆゑ

腹のさいたむ 氣疝は忽にとち多

瘧・そしゃく・盤痢は腹中いたみ臍の下の旁にひく・附痢は腹いたみ臍の下
あり・積聚あり・狼痢なり
と陰へ引痛む ▲針 大椎 大衝 大敦
腹結 氣海 関元 石門 滑肉門 三陰交
▲灸章門 三陰交 大敦 氣衝 肝俞
▲鍼灸病人の口と合りあの濶さの
すと三角とうそれと三角ふ△此の如
して上の角と臍の下廉にあて下の両
角に灸をすること左右各二十一壯をべし
七疝ともふ奇妙あり
▲陰卵偏大なるは関元より灸百壯をべし

○眼目

目は肝の外候五藏の精華なり故に諸脉
皆目ふ屬とす烏睛は肝木 両眥は心火
上下の瞼は脾土 白睛は肺金 童子は腎
水の精なり 暴に赤腫痛は肝經の風
熱 久病昏暗は腎虚 遠く視ることあ
ざるは心虚 近視ることあざるは腎水の
虧なるなり
▲灸 巨骨 膏肓 曲池 肝俞 腓俞 三里
▲針 神庭 上星 前頂
▲熱血目赤 絲竹空 百會 上星
▲背痛 涙出で明なずは風池 合谷
▲雀目は睛明 攢竹 ▲斜目は合谷 足
▲赤くるくるは陽谷 太陵

○耳病

耳は腎に屬して腎と少陽の部ふ開

手三陽の間より通じ腎に関うう
聾多く故に腎虚をるゝ人は耳聾
して鳴り両耳腫痛こゝるひは膿を出
をは腎經の風熱多ノ口苦く脇痛く
寒熱往来は少陽膽經の風熱左の耳
聾は怒怒膽の火と動を右の耳聾
をるは色慾相火と動ぜ両耳俱に聾
をるは厚味胃火と動ぜるひは氣
うて閉る者あるひは痰火より因
く耳鳴るものあり小兒耳腫耳痛耳
停は三陽の風熱多り各証と詳して
治をべし

◆灸 腎俞 百會 ▲耳聾鳴
耳聾 聽會 ▲耳聾耳痛 ▲緊風 ▲耳
門 ▲外陽谷 前谷 液門 商陽 火海

聽宮 肩貞 ▲ここして刺をべし

○鼻病

鼻は肺の候多り和をるとこれはうく香
臭と分別を若し七情内傷 六
淫外感傷り飲食勞役して鼻氣調
ひて清道ふさがりて病多ひて臭塞り
濁涕と流をは熱邪 清涕と流は
寒邪 香臭と聞ざるは肺に風熱
あり濁涕あるひは清汁とあり
ざると鼻渋 乃風熱腦とやり
腦氣固
臭き膿水あり出るを腦漏 ひ面
白く清涕 香臭と聞ざるは肺
虚多り 臭赤きは熱血肺に入る酒

鼻しこいハ鼻頭紫黑きハ風寒にして
血流涙帯し敷さきのあり…か症〳〵詳
〳〵治まるべし
▲百會 上星 脳戸 風門 ▲鼻塞るハ上星
▲百會 上星 脳戸 風門 風府 風池
後谷 ▲鼻塞ハ上星 百會 風府 風池
後谷 ▲清涕ハ人中 上星 風府 風門
後谷 ▲鼻渕 鼻出 上星 ▲人病涕
▲鼻渕 鼻出 上星 ▲人病涕
鼻渕 鼻出 上星 ▲人病涕
鼻渕 鼻出 上星 ▲人病涕

上肉の起るところに灸すべし效あり△下
齒のさきハ龍玄側腦交叉美藥合谷
三間又腦ゑひ五寸上兩筋の間ゑ
灸五壯しゑ妙なり△血熱胃口にあり
咽齒の引いたむ浮白內庭合谷
△頰腫牙いたむ頰車曲池△虫牙ゑハ
ゆくり牙のこゝろの蟲ゑ刺べし妙也
△虫喰牙ゑ蟇と生しさゝるゆのハ
美藥に灸七壯△牙痛ゑ美藥ゑ灸

○唇病

經曰く脾の榮ハ唇ゑあり唇瞤ハ風也
乾ハ燥あり裂ハ熱あり揭ハ寒あり唇
腫裂あるゆハ蟇と生し米泔のごと
小くあると緊唇とゆゑ又中氣虛損
して唇口蟇と生ずる者あり又陰虛
火動して唇燥裂て繭の如ゑ者あり
△唇乾液あるハ下廉唇乾き食下ら
ざるゑハ三間少商△唇動き虫の行ゲ
ごとくあるハ水溝△唇腫ハ迎香△緊唇
ハ虎口と灸と男ハ左女ハ右又美藥に灸三壯

○口病

經曰く脾氣ハ口ゑ通じ肝熱をこゝ
口酸しゑ心熱をこゝ口苦しゑ腎熱をる
こゝ口苦しゑ脾熱をこゝ口甘し
腎熱をこゝ口辛しゑ腎熱をこゝハ口
口臭きハ內熱口乾きハ蟇ハ脾熱
△口乾ハ尺澤曲澤大陵二間少商

▲口噤ハ頰車と支溝外関列缺廉泉
内庭▲口眼喎斜ハ頰車水溝絲竹空
列缺太淵合谷二間地倉

○舌病

舌ハ心の苗也又脾の經絡舌の本
る惟舌の下廉泉の穴ハ取ル經ヲ書
故ニ心熱ヒテ舌腫強シ生ジ心脾
熱ヒ重ク舌腫ル言語ヒ心脾虛シ
く風熱ヒ氣鬱シテ重舌ヒ出ヒ
心脾熱シテ舌胎ヒ生ジ肝ヒ
血ヒ出ヒ上ヲ鬱熱ヒ口ヒ
ハ口舌のやまいヒ生ジ

▲舌縮ハ太淵合谷中陽内庭風府
三陰交崑崙▲舌強ハ亞門二間少商

魚際中冲陰谷然谷▲舌黄ハ魚際

○咽喉のんどこのさこ

喉ハ肺ヲ通ジテ氣の往來ヒ主ル
氣鬱結シテ上ニのぼり頸の間ヲ血
熱ヒ久シク血餘リテ喉痺ヒ病ム
又手少陰少陽の三脉ヒ喉氣ヲ血ヲ
欠ハ腫脹ヒ主ル故ニ熱上焦ニ客シテ
咽嗌ヒ或ハ腫痛ヒ或ハ痰ヒ生ト
ハ赤ヒ或ハ結核腫ル或ハ
閉塞リ言ヒ能ハヒ俱ヒ風熱痰
欠カ

▲天泉痙門ハ血ヒ吐ル口ヒ
開ク喉の腫ル所ヒ
く突ク血ヒ吐ル口ヒ
急症ヲ三陵針ヒ少商ヲ刺ク毒血

と出るべし ▲喉痺 ゆへ夾車合谷少商
經渠大陵二間尺澤前谷曉谿▲頸腫
ゆへ少商▲咽痛ハ風府然谷▲咽の中
緩の如くいつくゆへ間使三間▲咽
中滑大鍼▲咽の外ゆへ廉門
食下らざるハ喜中ゆへ灸せし▲咽の中
ゆへ合谷曲池▲又ゆへ合谷少商▲咽乾く
飲食下らざるゆへ合谷少商▲咽乾く
ハ大淵魚際▲消渴ゆへ水溝行間曲池
然谷商丘 陰白 勞宮

○外科門 ○瘡瘍

白く諸瘡痒瘡ハ皆心火ゆへ屬
心ハ血と主く熱と行られ若氣血
心火の熱と交く癰疽のごとく

生ぜ大ゆへて高く起ると癰とハ
平ゆへて内に發ると疽と癰と
頭のあり小瘡瘡ハ總名あり此病多
ハ魚肉厚味と食し安坐して身をつつ
ど色慾と過して水つり火盛よなり
熱毒内ゆへ攻め氣血と煎熬して成る
▲癰疽背に發るハ肩井委中に針
べし▲又始めて發せハ膏と片て瘡の
上に貼その上ゆへ灸して疼ざるハ疼む
で疼む者ハ疼まざるまで灸すべし
灸ること覺て七日ゝう中あれハ愈
▲癰背ゝう出るハ至陰通谷
東骨崑崙委中▲髻ゝう出るハ攢竹
夾谿陽輔陽陵泉▲鬼ゝう出ハ厲兌

内踝陰谷衝陽解谿▲脳うう出るハ
絶骨▲腸癰ハ兩時と曲正して肉の
頭の鋭骨の端と灸百壯をれば膿血
と下して安し▲嚢癰陰腫ハ水分に灸を
と灸三壯久病陰腫るハ水分に灸を
乳癰ハ天樞水泉肩井臨泣夾谿
行ハかぎりと面手足と生じ▲面上と
口の角ふ生ずハ合谷に灸と▲手に生ず
曲池に灸と▲背上ハ肩井二里委中
臨泣と灸行間通里少海太冲▲足ハ
行間三里委中臨泣▲掌後横文ふ灸と
男ハ左女ハ右に七壯とかりて瘡ろ
紅縄疔ハ頭手足の間ふ黄泡と生じそこの
中に紅の線のごとく線の端に断て

▲
血水と去ろうくぎれ疔に入て治ぜ
療癰ハ結核耳の前後頤頷頸喉ふ生を
胸脇と生じて形長くと馬刀とかりて小ろ
と結核とかりて連ろとかりて
り少海その核の大さを針と入て三上三下
出て天池章門臨泣支溝陽輔と灸百壯
肩井年の手の三里曲池大迎と灸とべ
▲瘰疬ハ項臂腋とかりて紅ぬ痛
の臂ふ肩井曲池と針と
▲瘰癧ふハ天容翳風間使天突二十一壯
肩髃十八壯 又兩耳後髮際灸七壯
▲瘊子ハいぼの上に灸一壯して水と漬て
▲瘍瘡ハ少海
▲癬瘡ハ曲池と溝後溪崑崙大陵

瘧疹ハ肩髃曲澤曲池環跳合谷
便毒ハ手掌の後の横文中指の
先まで のすじとり其すじ又横文へ
臂の方へ向てすの蟲ろとろに三壯
灸と便毒右あゝ左の手に灸と
○癘風 癩風 大麻風 皆ろくの池
癘風ハ天地殺物の風也陽明の一經ゟ
外あゝを初て起るものハ白屑雲頭紫
黑死瘡膿ゝ流しあるものハ爛てうゝ
ど麻木不仁ゝとゝゝどゝしのハ毛
落眼ゝれ眉脫し遍身癩疹ゝで
臭ゝ肉腐り声唖る痒ゝハ虫あ
り耳鳴り膝ゝれ足の底穿り

灸とれば愈る三ゝび灸とべし▲又大
指動脈の縫の間約ゝとゝ半すゝ灸
三炷香して毒氣と出を▲又三稜針
あて委中ゝ刺ゝ血と出をゝと二三合
紫黑死瘡の處を赤惡血と去べし一
日ゝ隔て一刺ゝべし三次刺して血の色
変ゝ此のごゝくすること二十餘日しゝ
ゝ

○損傷 ゝこゝのやゝる
經ゝ白ゝ瘀墜折傷ゝれば瘀血腹中
ゝ留り腹滿大小便通ゼ心腹ゝ痛
上ゝ閉亂して死ゝる者あゝこれゝ源
ゝべし又皮敗ゝて血出ゝゝハ補ゝ
足の内踝の下然骨の前ゝ刺して血と

出るを止るなり大数ゝ血とるべし
又足の脚上の動脉の処より三毛ばかり
穴ありこれゝ鍼して血と出るを右の
穴を左より左の穴を右に刺べし大衝脉
を鍼して血とるべし灸へ宜しきを
○中毒ごくにあるる
凡そ砒霜石斑猫の毒その外もろ〳〵
の毒に中る者へ中脘より鍼して
吐をべし又水溝より鍼して炒り
○虫獸
蛇に咬まるゝその処より蒜の片にて
あさき上に灸三壯をべし
犬に咬まるゝその咬る処より灸医
○鼠

驚く死るあり悲みて死るあり
驚きて死し心下温ずべし鍼と灸者
の口中あてあゝめて発骨と刺し
ふ出て穴とりあべ活ずる悲く哭て
死し手足冷ずるとも口身温ずば水
溝より鍼して白會に灸七壯をべし
目神轉らず口に泡ふく舌卵縮らば
んゞ合谷より鍼と刺し治と施をべし
湯泉神道會陰より鍼をべし
○諸の氣付
驚き肝とつぶし氣と上へ引あげ
入るゝゆへ三重三陰交より鍼をべし
眠りくらし入やうゆへ絶入るゆへ
會水溝より鍼して活べし

▲腹痛く絶するには湯泉に鍼をべし

▲胸痛く絶するには三里に鍼をべし

▲氣付あれば合谷中衝勞宮陽谿

鍼をべし

▲氣付あれば何様なりとも神闕関元

に灸數百壯をべし

▲厥逆死するは兩足の大拇指の毛の中に灸をすること三五壯▲又厥逆死二切の立死する人中と灸をすること三五壯▲又臍の中百壯をべし

○溺死

凡て水におぼれて死したるをべし一夜

関元に鍼灸をべし又臍中に灸をべし

○脉絶

脉微細にして尋ぬべからざるは絶して有ること多し

復溜の穴に鍼をべし圓利鍼にて鍼

胃の處に至り鍼を瀉し下し刺を

陽に回し脉をうるの脉生ずるときふ

ふづくふ鍼を出をべし

○婦人の科

夫婦人は十四にして月水行り四十九

にして絶その病太抵男子と異なること

なし帷帳前産後月經調はざる崩漏帶下の證のこと同じ

血虛し氣滯しやすし

▲月水調はざる少は氣海三陰交中極
帶脈灸一壯ずつ過ぎべからず又肩俞効
▲月水多く下るは通里行間三陰交
▲月水來らず面黃ぶくれ子なしは
三陰交曲池支溝三里
▲經閉は命門三壯月水通ずべからざるは灸七壯
あるのは關元▲月水通ずべからざるは灸
心下滿目遠くみること能はず腹はるかに
水泉五壯灸すべし
▲崩漏月水調はず逆氣腹脹は血海
氣海灸三壯▲漏血止まざるは太冲三陰交
▲血崩は氣海大敦陰谷太冲三陰交
然谷中極

▲赤白帶下は白環帶脈關元三陰交
氣海間使▲久き帶下は豐隆大膠長強
▲月水とゞまる時は交合し寒熱さし引
形瘦く虛勞のごとくは腎俞風門中
極 氣海三陰交
▲經行の時に傷寒と病は期門に鍼
▲腹冷痛く腸下に引痛は中庭
▲諸節痛は陽輔▲脇脏の病は崑崙
業山▲足踝は陽陵冲陽丘墟▲脚弱
は膝關委中三里陰市▲脚筋短急
足重腰痛く鶴膝歷節風は風市
▲腰重く脚筋攣は兩脚脉に曲あり
兩紋四處三壯一同に灸す▲腰痛は僕參
三壯▲膝より上のいたみは環跳風市
▲膝より下は犢鼻膝關三里陽陵灸

▲踝より上は三陰交絶骨崑崙に灸
▲踝より下は照海に灸▲腰痛は眞骨
▲脚氣は風市に灸一次は伏兎
康一▲脚氣は風市に灸一次は伏兎
に灸針三分灸をべし積氣膝眼地五會
三里上廉絶骨
▲一切の諸病は關元に灸をべし
▲月水調はず塊ありて微痕ありは
關元に灸をべし▲血塊あり復溜三里
氣海丹田復溜三陰交▲小腹堅帶脈
▲血の道は月経頭痛つう發熱嘔吐して
不食を不容風府大椎大杼

○妊娠

▲子あれば三五中極▲又は賢俞命門
腹痛あるものは胞衝上に心をせめ
腹いたみは巨闕三陰交に針をべし
▲小産　胎障して後手足水のごとく
厥冷をなして肩井一針をべし針刺
ありてれば悶へくるしむ急に三里に刺
▲胎落ちんとする神闕に灸を永く落
▲難産横産死胎は合谷を補して
再び瀉をべし三陰交太沖
▲横産して子の手を出さば産母の右
足の小指の尖の上に灸小麥
して三壯の五壯をべし
▲胎子手足を出さば針して手足の
心に一分刺く塩とあり除に送入
はば子をうして順に産

▲難産ゆへ至陰三壯又太衝三壯
▲子心へつき上り悶えるゆへ巨闕
三陰交と瀉　合谷と補をべし
▲子心ゆへ衝上り痛み息をつく氣衝
▲胞衣下らぬゆへ中極崑崙三陰交灸
○産後
▲産後の諸病ゆへ期門
▲惡露にぶくゆへ氣海関元▲同腹痛
陰交百壯氣海へ灸と期門伏兎関元
腎俞▲惡露止ぬと小便ちゝ通ぜぬ
ゆへ氣海へ灸をべし▲兩脇痛ゆへ石門
▲耳鳴腰いたゆへ合谷光明
▲血暈ゆへ支溝三里三陰交へ鍼
氣海へ灸をべし

▲歯ぐきに口噤し語音出ざるゆへ兼灸五壯
▲血氣俱に虛をるゆへ血海百壯
▲惡露行ざるゆへ石門三陰交崑崙
▲陰挺出ゆへ曲泉照海へ灸と
▲産後手足水のごとくゆへ肩井鍼三分
▲乳汁通ぜぬゆへ膻中へ灸し少澤より
鍼をべし　前へ
▲乳腫痛ゆへ足の臨泣▲乳癰ハ下廉三重
魚際少澤委中足の臨泣灸
▲兒の息ゆへ乳ふめぐりて惡寒
もゆへ百會
▲子を妊んと欲せぬゆへ合谷右起
の内踝の上一寸へ灸　臍下二寸三分へ
灸三壯をれば陽氣消を

うく黄うるハ小便通さしめるかん臭
かくさき蚯蚓いうこと〻うん
類ハ腎ホ屬ゝ色黑くゝと痛くゝ黄
ゝと逆ゝ赤ゝさハ腎と膀胱とホ
熱あり〻て小便通ぜざゝこと主ゝ
小兒三歳ゝり内ハ虎口三關の紋通
と見ゝく病ゝきゝるべゝ

虎口三關の紋之圖

男ハ左り女ハ右の手の食指の本の
節と風關と中の節と氣關と
三の節と命關とその紋風ホ

あれで病めさゝ治ゝ易ゝ氣關よ
あれで病重ゝ命關よあれで
病ゝそホ深ゝ治ゝ〻〻〻○紋の色
ひさゝハ熱ゝ○赤ハ傷寒ゝ
○青ゝさハ驚風ゝつゝ○白ゝさハ痃
の病○黑ゝさハ惡氣ゝ作ゝ○黄
ハ脾の困ゝつゝ○淡赤ゝさハ寒
熱表ゝあり○深紅ハ傷寒痘疹ゝ主
ゝる○紋亂ゝるゝさハ病久ゝ○細
ゝさハ腹いゝ多ゝ嘔ゝ乳食消
化ゝ直ゝ指ゝハ驚風ゝ
つゝさゝゝ惡証ゝり黑ゝ墨のゝ
ゝるハ諸病ゝ治ゝ易ゝ〻〻〻
ゝと右ハ心肝ゝ應ゝ左ハ肺脾ゝ應ゝ

○巨闕三

魚刺の形は驚風痰熱と主る

懸貫の形は傷風泄瀉積熱と主る

水字の形は食積吐逆驚風と辨

乙字の形は肝の病と主る

虫の形は肝虫大腸積と主る

環の形は痰積吐逆と主る

珠のごとくなれば死すべきなり

乱丰の紋は虫と主る也

小兒二歳より後は醫者の六指ぐらい

あて兒のす関人と按候ふべし脉の

數呼吸の間に六七至ると常の脉と

是とうかと多きと熱と是とう

ずもくまきと寒とすべし

○緩小沉細多りと宿食消化とも○沉遲

○牢實は大便結を○沉細は疝○緩

○緊強は腹いたむ○強急は氣和せず

小兒二歳より後は醫者の六指ぐらい

あて兒のす関人と按候ふべし脉の

數呼吸の間に六七至ると常の脉と

是とうかと多きと熱と是とう

ずもくまきと寒とすべし

○緩小沉細多りと宿食消化とも○沉遲

○虛○沉實と積○單細は

痰勞多り　右は関人の脉法　二歳

ようようにいとけなき浮沉是數と辨

へ寒熱虛實と察るべし十二三歳より

脉は大人と法と同じうすべし

○驚風

急驚風は風熱とうかとの氣に卒に大

聲と聞きのごとくなれば

搐き身熱し面赤く口渇きいき熱

く大小便黄赤く目と見つめ反張う

勇頂　灸法　愈　藥方　人中　合谷

慢驚風 大病の後ひん吐瀉の後
脾胃虛 身冷口裏のいき涼しく
手足ひくつき昏睡して晴とあつ
發る時は目とうの進と流と
天澤七井 頭會一百會各三壯 灸七
驚風 脊骨最真也 百會前頂上
星 水溝 合谷 天澤 中脘 童門 少海
長強 急驚 灸 鍼をべし 慢驚 灸 医

○驚癇 こんかん こつち

大人の癇 三歳小兒の癇 とのふもの 証
肝脉 き搐搦 脈法 吐きたらしめ
よく作 とらず 風癇は手足
とびロ噤む 驚癇は頭目と搖 口
目 ひくつき 驚

視 食癇は肢搐き涎を友 張大 蟲
食 吐 飲癇は手足搐動 食
飽 多く 數日食 驚中
發る飽 おこり 發癇は狂
のごとく 目 見 のごとく
酔 多 又曰 犬癇は反
折上 鼠 犬叫 肝也 牛癇は目
直視 腹滿 牛叫 脾也 雞癇は
驚跳 反折手 雞叫 肺
猪癇は のごとく 吐き 猪叫
腎 羊癇は目 羊叫 舌 吐き
癇は頂上 巻三の中三壯 耳の後
青 巻三壯 癇は 目 會 巻 巻

▲癲癇驚目ハ角弓反張ス神灸三壯
▲驚癇ハ驚キ怖ル時叫ブ灸
後頂百會三壯耳後の青絡の灸
▲同ク舌ヲ吐キ沫ヲ出スハ灸三壯
▲風癇ハ風弓反張多ク吹聲
發ル時節ヲ盛ルヲ灸
沫ヲ吐ハ百會七壯▲同ク指ヲ屈
物ヲ數ル灸ハ鼻上髮際三壯
▲五癇ハ水溝百會神門金門崑崙▲
猪癇羊癇ハ巨闕三壯灸ス七壯功多
▲辛癇ハ九推の下節の間三壯又法
大推の上三壯▲馬癇ハ僕參三壯風府
脊中各三壯▲犬癇ハ兩手の心足太陽
脚ハ各一壯▲雞癇ハ足の諸陽經の穴

三壯▲食癇ハ尾の上五分灸三壯
▲猪癇ハ屎のごとく沫ヲ吐ハ巨闕三壯
▲牛癇ハ尾三壯大推三壯
▲中惡狐魅ハ鬼哭ハ灸

○五病

▲肝病ハ頭ヲ搖ス目ちがめさ見ル
汗ヲ流ス倦ス伏ス筋青く身も
青ク變立筋ヲ引ク痩羸ル
▲心病ハ面赤く身熱ス咽渴ス小便
赤く臭下ス腹脹口乾虛驚ク
▲肺病ハ咳嗽多ク喘ス氣ノ緣ハ
吹ク寒熱臭膏身白色腰脹
▲腎病ハ脉痩身に赤赤あり來熱ス
眥目足冷腰ヲあり水ヲ好ス

▲癖病は臭黄こい脚大なる泄瀉不食して
土を吹ひ地を臥こと好む
脾俞 肝俞 不容 章門
▲五癖とり小腸俞 肝俞 脾俞 不容 章門
灸をすべし ▲癖あて痩脫肛咽渴あり
灸をすべし
尾閭骨の上三寸陰中三壯午時に灸
を虫出て愈る三伏中楊の煎湯を
浴を ▲癖目あり合谷七壯灸をすべし
▲癖は即時に腐落る素撰米糊或灸
▲夏痩をるあり脚上一寸に七壯灸
▲腹脹手足腫るあり脚の上一寸七壯

○癖積 くさい

癖積久しく消ずして中脘章門に壯
命門 俞十四壯 ▲黃膽身を懈惰して
腹多く癖らんに章門に灸すべし

▲瘧病脊強り相引あり長強三十壯灸
脚の下滿瀉痢脉重く四肢收らず
瘧癖積聚腹ゆるに不食腹とりて
背に引多く食しても漸々に黃よ
痩るあり ▲脾の俞七壯灸すべし

○瘧疾 おこり 黃疸

疾瘧そころ寒く熱さしのき肝俞 ▲
黃疸あり脾俞三壯灸すべし

○吐瀉 あげくだし

▲食傷ふるうて吐瀉し痩つひあり
上脘 中脘 ▲脫肛
▲肛門ゆるく皮青黑ハ脚の上下左右
各半寸 ▲西光灸三壯づつ 尾閭一寸三壯
▲病あり神闕 ▲冷病あり脚 ▲灸二寸三寸

過乳あハ中庭ゟ灸一壯 重中

○初生雑病

初生乳と呑ざるハ家藥頭草 蘇

初生兒の穴なきハ三稜針ゟ刺うろ

べしあるく刺べうず

生て七日のうち口中舌のしゝゟ家藥

のごとくあるりの出て白泡と吐き啼て

乳とのまれと臍風口といふ

と指ゟすゝ温湯よひくそうくと

操磨り紅とあるべし若此のごく

をされば忽死をるあり然谷に灸三

壯あるひハ針三分血と見を立効あり

腰門合さるハ臍の上下各五分三穴ゟ九壯

夜啼ハ百會に灸三壯中脘ゟ針シべ

大便通ざるハ大腸俞神闕ゟ灸と

小便通ざるハ関元石門中極ゟ針と

脫肛ハ長強三壯 臍中三壯あるひハ年の

久しく癒さるハ百會ゟ壯灸とべし

▲脫肛瀉血ハ龜尾ゟ一壯ゟべし

重舌ハ舌の下に小舌と生と木舌ハ舌

とくゝ木のごくにあるる共ゟ 肺俞

脾俞 肝俞 膏肓 ▲木舌重舌ハ三稜

針ゟて舌下の兩脈と刺く惡血と出と

弄舌ハ口うゝ外へ舌と出とあり

四五歳ゟて語くと能ゝ心俞三壯

龜背ハ肺俞三五壯 あるひハ腸俞心俞

龜胸ハ兩乳の脇各一寸半に灸二壯

発熱口ハ上脘中脘下脘

赤遊風ハ百會 委中
目赤眥ハ大指小指の間の後一寸半 三陽
肩腫偏墜ハ関元三壯 大敦七壯
腋腫馬刀瘍ハ陽輔 太冲
瘍腫振寒ハ少海
頭中 牽ハ陽輔 太冲 ▲遍身瘡生ハ
曲池 合谷 三里 絶骨 膝眼 十四壯
拘攣癮疹ハ肩髃 曲池 曲澤 環跳
合谷 湧泉 ▲赤癩ハ曲池 支溝 陽輔
陽谷 大陵 合谷 後谿 委中 三里 陽輔
寬嵩 行間 三陰交
初生の兒病あくハくるりふ針灸を
ゝゝゝず其痛ふ忍ゝゝく五藏と動ゝ
知く病ゝ生ゝべゝ

神灸神針の方法

水帥綱目に曰五月五日ふ桃の木の
東へ引ゝる枝ゝ取削て木針ゝ
雞子の如く長さ三五六寸にして之を
乾ゝ ゝらゝゝゝ綿紙三五層を
以て患る処ゝ襯針ゝ將て麻油ゝ
蘸ゝ 點著ゝ吹滅ゝ熱に乘じて
ゝれゝ針ゝと 又艾葉一種ゝ擣ふ
ゝ後ゝ紙ゝつゝ著のゝゝゝ日
月に乾ゝて用ひ灸ゝゝゝ紙ゝ四
重ゝ墨ゝ衣裏ふ墨点ゝて灸穴ゝ
中火針に火ゝつの墨点に當推ゝ
刺口傳あり 又雷火神針の法あり
熱衝艾の末一兩 乳香 沒藥

川烏頭　草烏頭　川山甲

桃樹皮の赤　硫黄　雄黄各一匁

射香五分　右末して艾と拌ぜ熟

紙を以て裁く餘を成し茶艾と内

ふ鋪緊く巻て指の大さ長さ三四

すにして瓶内ふ收め時へ地中に

埋へ五十日取出して用ふる火燈の

上にして點着吹滅して紙十寸を

ろさして熱に乗して患る処ふ針を

熱氣直ふ病処に入く其効さ〳〵ふ

ここやうあり並ふ冷水とのむ

夫鍼灸ハ源素靈ふ出く而て盧

扁も亦これを學ぶ然といへども今

我朝の諸醫專ら湯藥を用く而て

唯針灸ハ庸醫盲人の業とし必ず此

を捨ろ〳〵勿れ古來鍼灸の書多し

といへども文盲の輩何そこれを

伺ふことを得んや故ふ予其講陋と

忘れ僭倫と顧ずして群書之要領を

乘り至近至要之義を錄して以て

野巫醫之助とするのみ因て之を名て

鍼灸調法記と號し庶幾ハ自ら賞

生べき者と使く死せざるものをして

豈生を救ふ一助ならんか

時享保戊戌春三月菊堂本齋正重撰

刻鏤各事實記而
千有余年然後正誤
而享保乙卯年再彫
然磨滅所見之者甚
勞故三上梓
寛延己巳年霜月

江戸　須原茂兵衛
大坂　岡田三郎右衛門
京　勝村治右衛門

鍼灸之法診脉之要經絡之辨

群書摘英

疾在腠理熨焫之所及

鍼灸重寶記

病在血脉鍼石之所及

長生要訣

毒病之論畢以和字記便庸工

夫以ゐ人此腔子あるこゝろ則此病
あり百年の光陰論る暇あるこの人のん
乎慈めゝを頼く早計るべし其計の
頼む所也針灸某うして而某餌の
及ぶる者鍼灸子因どんべ手ゐ其危
急と救ハん也今之工ゐる者多ハ其針
灸之通達とる所と知ずして而疾
ゐ逢ゝゐ則安にとゝと治て而く
之ゲ功と求也譬ハ猶規矩と習ひて
材木と試ずす鍼と持ずして朝塩よ
趨きて其利と得んと欲るゞ
遂ゐ得へゝと慈隱士本郷正豊曾
側隱惠民之心と以て醫道重寶記と

編輯し已に大に世に行る今復鍼灸重宝記と者と此編の若也九鍼之製灼艾之法神聖工巧之要經絡藏象之辨疾病治療之道畢國字仮名以て之を記と謂べし工者の規矩闔場の利刀也こ庸工と雖も之を以て以妄に治し人に害こと勿れ誑と免ること能はんば則重宝の名虛哉く叙して其首に弁し畢

皆

享保戊戌冬月吉旦

浪華　平住專菴　題

鍼灸重寶記編目目錄

九鍼之圖說　一丁
燃鍼の手法并圖　二丁
打鍼の手法并圖　四丁
管鍼の手法并圖　五丁
五藏六府の圖說　六丁
腑内景の圖　十三丁
五藏色脉証候虛實の圖　同丁
五藏の色體　十六丁
四知之論　同丁
診脉三部九候六脉祖脉　十八丁
七表八裏九道七死之脉
死証の見脉
腹の見様　廿一丁　廿三丁

天地人男女の法　廿四丁
太極の論　廿五丁
十四の鍼法　廿六丁
補瀉迎隨の論　廿七丁
當流傳受の奥義　廿二丁
針灸深の論　廿四丁
阿是の穴　廿五丁
針刺し拔さるゝ拔法　同丁
折針と拔の法　廿六丁
針灸慎の事　同丁
灸穴と點をる法　同丁
十二經旺分の時　廿七丁
四季毎日十二時の人神　同丁
血忌血支長病日　廿八丁
灸葉の製法　同丁
灸火の法　同丁
尺寸と定る法　同丁
髮際と定る法　同丁
大推と定る法　廿九丁
灸補瀉の法　同丁
灸暈と冷をる法　同丁
灸瘡と發をる法　同丁
灸瘡と洗ふ方　卅丁
同痛み止る方　同丁
同食藥　同丁
周身尺寸の定法　并小圖　同丁
十四經脈伏總圖　同丁
十四經脈　并是動所生の病　四十二丁

附奇經八脉
禁鍼禁灸并之圖
經絡之要穴并之圖說

五十一丁
五十二丁
五十七丁

○經絡要穴之目錄

頭面の部

神庭 五十八丁 上星 同丁 顖會 同丁
前頂 同丁 百會 同丁 後頂 五十九
強間 同丁 風府 同丁 瘂門 同丁
曲差 同丁 五處 同丁 承光 同丁
通天 同丁 絡却 七十丁 玉枕 同丁
天柱 七十丁 臨泣 同丁 目窓 同丁
正營 同丁 承靈 同丁 腦空 同丁
風池 同丁 天牖 同丁 本神 七十二丁
頭維 同丁 額厭 同丁 懸顱 同丁
懸釐 同丁 曲鬢 七十三丁 率谷 同丁
天衝 同丁 浮白 同丁 竅陰 同丁
完骨 同丁 素髎 七十四丁 水溝 同丁
光端 同丁 齦交 同丁 兌端 同丁
康泉 同丁 攢竹 七十五丁 睛明 同丁
陽白 七十五丁 聽宮 同丁 承漿 同丁
耳門 同丁 翳風 同丁 頰車 七十五丁
聽會 七十六丁 大迎 同丁 地倉 七十六丁

心腹の部

天突 七十六丁 璇璣 七十七丁 腹中 同丁
巨闕 七十七丁 上脘 同丁 中脘 七十八丁
建里 七十八丁 下脘 同丁 水分 同丁
神闕 同丁 陰交 七十九丁 氣海 同丁
石門 七十九丁 關元 八十丁 中極 八十丁

幽骨 八十丁　雲門 四丁　中府 四丁
氣舎 八十二丁　缺盆 四丁　幽門 四丁
通谷 四丁　陰都 四丁　石関 四丁
不容 四丁　兼蒲 八十三丁　梁門 四丁
関門 八十二丁　太乙 四丁　滑肉門 四丁
天樞 四丁　氣衝 四丁　期門 四丁
腰衰 八十三丁　腹結 四丁　章門 四丁
京門 四丁

肩背の部

肩井 八十四丁　肩髃 四丁　大椎 四丁
身柱 八十五丁　命門 四丁　陽関 四丁
腰俞 四丁　長強 四丁　風門 四丁
肺俞 四丁　厥陰俞 八十六丁　心俞 四丁
膏肓俞 八十六丁　肝俞 四丁　膽俞 八十七丁

脾俞 八十七丁　胃俞 四丁　三焦俞 四丁
腎俞 四丁　大腸俞 八十八丁　小腸俞 四丁
膀胱俞 四丁　高肓俞 四丁　神堂 八十九丁
譩譆 八十九丁　魂門 四丁　意舎 四丁
胞肓 九十丁　秩邊 四丁　志室 四丁

肘手の部

極泉 九十丁　天府 四丁　伏白 四丁
尺澤 四丁　魚際 四丁　孔最 九十一丁
列缺 九十一丁　太淵 四丁　少商 九十二丁
商陽 九十二丁　二間 四丁　三間 四丁
合谷 四丁　陽谿 九十三丁　偏歷 四丁
溢溜 九十三丁　下廉 四丁　上廉 四丁
手三里 四丁　曲池 九十四丁　手五里 四丁

臂臑 九十四
火府 九十五
後溪 円丁
大陵 九十六
中渚 円丁
天井 九十七
陰廉 九十八
曲泉 九十八
蠡溝 九十八
行間 九十九
築賓 九十九
水泉 九十九
大鄰 百

火海 円丁
神門 九十五
陽谷 九十六
中衝 円丁
陽池 九十七
臑會 円丁

膕脚の部

足五里 九十八
膝関 九十八
中封 九十八
大敦 九十九
交信 九十九
昭海 百丁
然谷 百丁

青靈 円丁
前谷 円丁
曲澤 九十六
液門 円丁
支溝 円丁

陰包 九十八
中都 九十八
大衝 九十九
陰谷 九十九
復溜 九十九
大鍾 百丁
湧泉 百丁

笑門 円丁
地機 百二丁
商丘 円丁
大都 百二丁
衆扶 百三丁
委陽 円丁
衆筋 円丁
附陽 百四丁
申脉 円丁
東骨 百五丁
脾関 円丁
膀胱 円丁
條口 円丁
解谿 百七丁

血海 百二丁
漏谷 円丁
公孫 円丁
隱白 円丁
殷門 百三丁
委中 円丁
衆山 円丁
崑崙 円丁
金門 円丁
通谷 百五丁
陰市 円丁
足三里 百六丁
巨虛上廉 円
巨虛下廉 円
衝陽 百七丁

陰陵泉 円丁
三陰交 円丁
太白 百三丁
會陽 円
浮郄 百三丁
合陽 円丁
飛揚 百四丁
僕參 円丁
京骨 円丁
至陰 百五丁
絕骨 円丁
陷谷 百七丁

内庭 百七丁
中瀆 丙丁
陽交 百九丁
陽輔 百九丁
臨泣 百十丁
竅陰 丙丁
腰眼 百十二
鬼哭 百十三
環跳 丙丁
陽陵泉 百九
光明 丙丁
外丘 丙丁
絶骨 丙丁
丘墟 百十丁
地五會 丙丁
夾谿 丙丁
四花 百十二丁
風市 丙丁
騎竹馬 丙丁
斜差 百十三丁

針灸諸病の治例

中風 百十三
傷寒 百十五
痎瘧 百十七
霍乱 丙丁
脾瀉 百十四
熱病 丙丁
痢病 百十八
傷食 百十九
嘔噦 丙丁
痰 百十五
中寒 百十七
泄瀉 百十八
嘔吐 百十九
喘促 百廿丁
嗽逆 丙丁

痰飲 百廿
咳嗽 百廿二丁
諸氣 丙丁
欝証 百廿二
勞瘵 丙丁
吐血 百廿三
下血 丙丁
虚損 丙丁
汗 百廿四
諸熱 丙丁
健忘 并怔忡
驚悸 百廿五
眩暈 丙丁
中悪 丙丁
頭痛 百廿六
在乱 丙丁
諸虫 丙丁
積聚 百廿八
黄疸 百廿九
木膈 丙丁
脹滿 百四十
消渴 丙丁
淋病 丙丁
濁淋 百四十一
遺尿 丙丁
遺精 百四十二
秘結 丙丁
脫肛 百四十三
頭痛 丙丁
痃癖 百四十四
手指痛 丙丁
心痛 丙丁
腹痛 百四十五
脇痛 百四十六
腰痛 丙丁
痛風 百四十七
脚氣 丙丁
眼目 丙丁
耳病 百四十九
鼻病 丙丁

牙齒 百四十九　唇病 百五十一　口病 百五十二
舌病 同一　咽候 百五十三　癰疽 百五十四
疔 同一　瘰癧 百五十五　諸瘡 同一
便毒 同一　癘風 同一　損傷 百五十六
中毒 同一　虫獸 同一　頓死 同一
氣付 百五十七　溺死 同一　脉絶 百五十八
婦人 百五十八　調經 同一　崩漏 同一
帶下 同一　諸痛 百五十九　血道 同一
求嗣 同一　妊娠 同一　産前 百六十
産後 同一　乳病 百六十一　絶子 同一
小兒脉法 同一　驚風 百六十四　癲癇 同一
疳 百六十六　癖積 同一　瘧 百六十七
黄疸 同一　吐瀉 同一　初生雜病 百六十七
神灸神鍼の法方 百六十九丁

鍼灸重寶記綱目

九鍼之圖説　本郷正豊編集

鑱鍼　長さ一寸六分

熱の頭身にわつと刺し陽氣と瀉を

圓鍼　長さ一寸六分

分間の氣と搖摩し肌肉と傷らず

提鍼　長さ三寸五分

脉と按し氣と取て邪氣と出す

鋒鍼　長さ一寸六分

癰疽の熱を刺して血と出して用ゆ

鈹鍼　長さ四寸五分

二分半癰腫を刺して大膿と出す

員利鍼　長さ一寸六分

癰疽とところを用ゆ又暴氣とところを

毫鍼　長さ二寸六分
寒熱の痛痺經絡にとゝまりふるを
長鍼　長さ七寸
病を除き痺痛をとゝまるを用ひ
大鍼　長さ四寸
水氣關節に出さるを除瀉するを
鍼經に云く九鍼の宜く各ゝ施を
べき所あり長短大小あるべく
所あり其用を得ざれば病去て病ひ
淺くして針深くれば良肉を傷て皮の
膚癰をなす病深して針淺くれば
邪氣かゝりく後ふ大病を生ず病
小なりて針大なれば氣瀉をなし
元氣を傷る病大ふ

ちく針小なれば病氣泄をして針その
宜きを失ひ赤敗をなす
夜鍼　今日本にもちゐる
ちく八分穂八分ふくさ麥の莖かゞ
ふー先を三角すして管に入てをらく
腫物の血膿をとり又日腫を痃癖を
刺して血を出す又邪氣あつまり痛を
をこすとき刺して血を出れば邪氣去て
をこりをは俗ふ三稜針といふ
鍉針　大形軸六分
穂一寸五分ふ二寸長短さまゝ〳〵
あり針首の氣に應じて用ひ
打針　二寸二分　穂一寸
管針　ちく一寸八分

撚針の之圖

撚針の手法

先まづ志氣正しく病者に心を付く
思ひ針ふりを目と外へふることあく人を
物語せべ慎ひべしさて左の足をもき
右の膝をと立て針先を口にくくこ左の
手を腹をうつぶし針をべき穴と
まべ左の大指の爪の角を五六呼
ぶの間その穴を按さて中指と大指
と合せて穴の上ふをき右のひらと

膝にのせて針を穴にあて左の中指
をて針口をあさく食指と人指と上く
針の中をとりら右の食指大指をそくこ
く針をの移り下を急ふの移り急ふ
下べ痛て堪ぶ息の出入ふ
く左右の食指と大指をそ和ふ抑
此る補泄迎隨溫凉寒熱の刺
りあり經ふ三く刺てとぶこと春
夏ハ二十四息あさふ秋ハ二十六息ハ
く針を出をとあり老人小
兒ころ人ころへる人ふ五六呼
て針をあくべ針のあさふ先
とこ抜出さて持ふて
中ゆべそ針の口をあ